

外宮ノ四
至未ダ定
ラズ

寬平五年十一月二十七日

一一三

南西深山無有人宅、北限宇治河者、其程去宮一里餘、此內不住人宅、禁制尤嚴、此則爲禦機事也、此宮四至未被定置、但去寬平五年十一月廿七日、司符傳、宮近居住百姓之宅有火失事、殆及宮內、自今以後、任格條、自宮四方各册丈之內、居住人宅、一切禁斷、若不擯出、科違格罪、見任解却、曾不寬宥者、自爾以來、爲近四至也、○下略、全文ハ延長四年四月十一日ノ條ニ收ム、

〔皇字沙汰文〕

上 伊勢豐受太神宮神主解 申請神祇官裁事略 中

右謹檢案内、從上古代、神宮遠近四至內、不居住人民等者也、而中間、神宮奉仕兵士仕丁百姓等居住、奉仕神宮之間、依去寬平五年十一月廿七日、司符、被擯出者、其後不居住人民等也、○下略、天慶九年四月七日神祇官符、

兵士仕丁
等居住ス

十二月 乙未 盡

五日、己亥京中ノ燒亡ハ、散齋以外直ニ之ヲ奏セシム、

〔清獬眼抄〕 凶事 一燒亡事

散齋外失火奏事

神態之月、散齋以前、不奏京中失火之事、自今以後、散齋之外、任申奏立、爲恒例者、

寬平五年十二月五日

右看督使近衛別有輔 奉

十日、辰甲雜役免除ノ人ト雖モ、荷前幣使ヲ奉仕セシム、

〔類聚符宣抄〕 荷前 帝皇

被中納言兼右大將從三位行春宮大夫藤原時平卿宣稱、奉勅、雖在放免雜役人、宜差奉荷前幣使者、

寬平五年十二月十日

少外記安部安直 奉

十一日、巳乙月次祭、神今食、

〔西宮記〕

六月 今神 月次祭 散齋日在穢內行神事例

延喜十九年六月廿六日、於神祇官、被行月次并神今食祭事云々、○中 四品貞

寬平五年十二月五日、十日、十一日

一一三

散齋以前
京中ノ失
火ヲ奏セ

寬平五年十二月二十九日

一一四

□親王、參議澄清、恒佐朝臣、就神町南舍、但納言以上、更不合ト食、參議中恒佐、獨合ト、右大臣宣、參議一人、行件事乎、外記申云、略、中寬平四年十二月、同三年十二月、略、中有此例者、

二十日、卯、中宮、皇女忠子、內親王四十ノ賀ヲ行ハセラル、

〔菅家文章〕

十二、願文下

奉中宮令旨、爲第一公主賀册齡願文、寬平五年十一月廿一日、

奉造白檀釋迦佛像一軀、脅侍菩薩二軀、

奉寫金字孔雀經一部、墨書壽命經四十卷、

右中宮殿下、爲第一公主所莊嚴也、公主春秋四十、事須慶賀優遊、殿下思慮百千、謀在息災延命、是故歸依功德、染著善根、中殿懺悔滅罪之間、後庭香花普供之次、便就勝蘭、聊陳梵唄、子之所以求長生者、專欲事母之長也、母之所以祈遠算者、不忘願子之遠也、發意無二無三、作念非他、非自唯願、公主久帶綺羅之春、公主永斷霧露之犯、福業之霑、薰修之助、及於无邊法界、成其一切所求、癸丑之歲臘月二十一日發願文、

二十九日、亥、越前氣比神社ノ神封ヲ分チテ、神宮寺料ト爲スコトヲ停ム、

〔類聚三代格〕

一、神封物并租地子事

太政官符

應令停止分神封鄉寄神宮寺事

右得神祇官解僞、坐越前國正一位勳一等氣比大神宮司中臣清真解僞、檢舊例、太政官去齊衡三年四月七日、下國符僞、寺別當與神宮司、共可勘知封物出納者、自爾以降、相共勘知、先納神宮、後分寺家、是宮司之處分、非國宰之所行、而國去九月二日、送神宮寺移云、依別當僧平鎮牒狀、分足羽郡野田村封鄉、爲神宮寺料者、宮錄無例之狀、副郡司、禰宜祝等申文、再三移送、而曾無報移、又未改行、因茲平鎮等、入接封鄉、徵妨調物、供神之物、先爲僧侶之食、役社之輩、還稱寺家之人、國宰所行、宮司難制、望請官裁、被停分鄉、但宮司依例、惣納封物、供神之後、隨色頒行者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅依請、

寬平五年十二月廿九日

宮司下國
限トノ權

別當平鎮
ノ濫行

供神之物
先僧侶
ノ食トナ
ル

寬平五年十二月二十九日

一一五

寬平五年是冬

是冬、老僧ニ綿襖ヲ施與ス、

〔菅家文章〕

詩五

〔寬平五年〕
感雪朝、勅使施老僧綿襖

此朝誰不雪山僧、恩捨綿々草木凝、中使馬疑騎鶴至、上方人似踏雲昇、早驚春氣禪林臘、先負日光定水冰、何啻孤峯寒更暖、所生功德萬民承、

一二六

是歲、檢非違使、山城愛宕郡錦部郷百姓等ノ鴨河堤ノ邊ニ耕作スルコトヲ禁ズ、

〔類聚三代格〕

八
農桑事

太政官符

應許耕作鴨河堤邊東西水陸田廿二町百九十五步事

右問山城國民苦使正五位下守左中辨平朝臣季長奏狀、得愛宕郡司解、錦部郷百姓等愁狀、前件田是己等口分、事具圖籍、貞觀十三年有下符禁制、堤東西田、件口分從天長年中領來稍久、爲堤無害、仍國司不加禁遏、而寬平五年、檢非違使稱有宣旨不許耕作、其所營獲稻、皆勘收防河所、自後不得開墾、中略

寬平八年四月十三日

群飲ヲ禁ズ、

〔類聚三代格〕

十二
禁制事

太政官符

應重禁斷諸司諸家所々人等饗宴群飲及諸祭使等饗事

寬平五年是歲

一二七

防河所

燒尾荒鎮
諸祭使ノ

寬平五年是歲

一一八

右群飲之制其來尙矣自天平寶字二年至寬平五年數度相重炯誠分明燒尾荒鎮及近衛官人祭使之饗等亦立科條皆隨禁止○中

昌泰三年四月廿五日

備中疫癘流行シテ死スル者多シ、

〔政事要略〕

七十 蠱毒厭魅及巫覡等事

巫覡見鬼有徵驗記善家異記

人民死沒多シ
巫覡鬼ヲ見ル

寬平五年余出爲備中介○正月十一日條參看、到數十日疫癘大發人民死沒者顛仆道路館中亦有此染注舍弟清風男兒小字長者及門八源敦等數日之内相次殞沒時有一優婆塞自小田郡來自云能見鬼即招喚座左右於是優婆塞云有一鬼持椎打府君侍兒之首時帶刀源教爲兒童在余臥内今指名者此童也須臾此兒熱頭痛毒惱尤甚又大驚高聲云有二鬼奪奉侍人菅野清高之首清高大懼狼狽起座走出未出數十步卒然倒仆疾病號呼其後七箇日優婆塞云前日鬼著菅清高者今日出去一人云可往大和國葛城郡一人云可行京下是日清高平愈如常又云鬼著源兒者得祭之後歡喜無極即赴賀夜郡大領賀陽豐仲之家是日源兒病愈積二日豐仲家疫癘大發此事雖迂誕自所視聊以記之恐後代以余爲鬼之董狐焉清高後仕爲式部大錄延喜中以久次敘外從五位

下出爲安房守

寬平五年是歲

一一九

年末雜載

神社

外宮禰宜

〔豐受太神宮禰宜補任次第〕禰宜外從五位下神主冬雄在任廿六年 寬平五年

癸閏五月廿六日任元大内人年五正六位上○度會系圖

祝部今吉

〔祠官系圖〕祝部今吉別雷宮祝無位寬平

鴨社祝

〔鴨縣主家傳〕一 真吉千繼 寬平五年六月七日補祝

佛寺

〔阿婆縛抄〕九十六之二 常行堂 靜觀僧正之建立顯祚大德之莊嚴寬平

叡山常行堂建立

五年堂舍自然成寬平年中僧正建造立常行三昧堂之時顯祚法師以有緣檀越

八千人堂二奉寄 〔叡岳要記〕下 常行堂 安置阿彌陀像 寬平五年廣命靜觀僧正顯祚大德建

立○四大寺 傳記同ジ

文藝

〔菅家文章〕詩五 寬平五年文章院漢書竟宴各詠史得公孫弘

文章院漢書竟宴

六十初徵八十終官班博士遂三公太常對策科爲一丞相招賢閣在東何忘牧

童疲望海不愁布被耐寒風後生欲識才名貴請見孫公我道通

文人紀學會士ノ亭ニ

賦葉落庭柯空 勸冬從龍松容封農重縫鋒蹤逢峯春備蜂攻

遇境幽人意乘閑卒歲冬庭承水氣靜葉逐晚風從誰見桐棲鳳唯聞竹嘯龍
露塵先落柳絕澗後凋松地脉生相寄天姿勢不容青苔隨徑合白雪滿枝封案戶
驚愁婦窺園惱老農飄々依砌聚片々擁塔重遂使輕紅滅何教碎錦縫破殘寒
月鏡來迫曉霜鋒燎照偷光手沙穿散藥蹤新賓詩私積逆旅醉鄉逢舉眼無疎
蔭廻頭只遠峯形骸疲外役夢想到高春賞翫輸誠洽攀援得力慵星稀雖遠鵲
花嫩未期蜂觸感孤心苦傷懷四面攻欲催春管律頻待夜更鐘分任循環運年
如轉轂衝榮枯同物我雨露爲誰濃

頭書扶十二 遊龍門寺

隨分香花意未曾緣蘿松下白眉僧人如鳥路穿雲出地是龍門趁水登橋老往
還誰鶴駕閣寒生滅幾風燈樵翁莫笑歸家客王事營々罷不能

寛平六年甲寅

正月乙丑朔盡

三日丁卯、卯杖、是日、皇太子拜觀アラセラル、

〔日本紀略〕亭子院 正月三日、丁卯、天皇御南殿、有御卯杖事、皇太子拜觀、燕飲

南殿ニ御
ス
太子ノ外
祖父叙位

云々、授皇太子外祖父正四位下藤原朝臣高藤從三位、

七日辛未、敍位、

〔公卿補任〕四

參議正四位上藤有實 左中將、大宮大夫、正月七日敍從三位、止中將

〔公卿補任〕四 昌泰三年 皇太后宮大夫、正月七日從三位、古今和歌集目錄同

〔公卿補任〕四 延喜二年 參議從四位上藤清經、五十 同六正七從四位上、

參議從四位上平惟範、四十 同六正七從四位上、

從四位下紀長谷雄、五十 同六正七從五位上、

〔公卿補任〕四 延喜八年 參議正四位下藤仲平、卅四 同六正七從四下、

寛平六年正月三日 七日

〔公卿補任〕

延喜十一年 參議從四位上源當時四十同六正七從五位上

〔職事補任〕

五位多藏人 左近少將正五位下在弘景同六年正月七日補

〔外記補任〕

一 大外記從五位下惟良高望 正七敍

〔古今和歌集目錄〕

諸王 貞朝臣登 六年正月七日正五位下

○貞登ノ事蹟便宜左ニ合敍ス

〔古今和歌集目錄〕

諸王 貞朝臣登一首戀

仁明天皇十五子母更衣三國氏貞觀九年正月七日從五位下十四年二月土佐守十五年二月大和權守十九年正月七日從五位上元慶九年正月實錄十作ルニ備中守寬平四年二月越中介五年正月紀伊權守六年正月七日正五位下

〔尊卑分脈〕

仁明源氏

仁明天皇

源登賜貞朝臣姓

〔古今和歌集目錄〕

庶女 三國町 正四位下紀名虎女仁明天皇更衣貞登母登者仁明天皇第十五子也歷代編年集成同

遷俗シテ右京ニ貫ス

初メ源姓ヲ賜フ

母ノ過失ヲ依リ籍ヲ削ラル

仁明帝ノ不豫ニ依リ出家ス

貞姓ニ復ス

歌什

〔三代實錄〕

清和天皇 貞觀八年三月二日戊寅是日勅沙彌深寂賜姓貞朝臣名登敍正六位上貫右京一條古今和歌集目一坊先是貞觀五年九月廿

日三品行中務卿諱天光孝親王四品兵部卿兼行上總太守本康親王參議正四位下行左兵衛督源朝臣多從四位上行伊勢守源朝臣冷散位從四位上源朝臣光等奏言深寂是仁明天皇更衣三國氏所生也承和之初賜姓源朝臣預時服月俸料イ厥後母過失被削屬籍仍出家入道嘉祥之末更垂優矜同於法榮尋道三列預時服月料仁明天皇聖躬不豫之間與諱等共侍嘗藥高祥三登遐之時緣身出家不預處分今善緣不遂再落俗塵所生之子隨亦有數而名猶編僧身未有貫附出仕之理既絕沈淪之悲良深夫爲子之道緇素无別出家之時既列皇子還俗之日何爲非兒然則准之人間宜復本姓但伏聞嵯峨遺旨母氏有過者其子不得爲源氏望請賜姓名貞朝臣登敍位階貫京職至是詔許之

〔古今和歌集〕

戀歌五 題一らす さだの、ぼる

獨のみ詠詠めふるやのつまなれば人を忍ふの草そおひける

宗于王ニ源朝臣ノ姓ヲ賜フ

〔三十六人歌仙傳〕

正四位下行右京大夫源朝臣宗于光孝天皇孫式部卿是忠親王男 寬

寬平六年正月十五日十七日是月

一三六

平六年正月七日敍從四下、王氏、改姓爲臣、古今和歌集目錄同シ

十五日、卯除目、

〔公卿補任〕四 參議從四位上藤有穗 中宮大夫、正月十五日兼河內權守、(阿波イ)

〔公卿補任〕四 寬平七年 參議從四位下源希、册六(寛平) 同六正十五兼左近中將、

〔公卿補任〕四 延喜十五年 參議從四位下藤恒佐、册六 寬平六正十五左近將

監、藏人、

〔公卿補任〕四 延喜十九年 參議從四位上源悅、五十(寛平) 同六正十四從五下、

〔外記補任〕一

大外記從五位下惟良高望 正七敍、十五日任伊勢權介、

安倍安直 正月十五日轉、

少外記多治宗範 正十五任、元大學大允、進士、

十七日、辛巳大射、

〔日本紀略〕亭子 正月十七日、辛巳天皇御豐樂院、觀大射、

是月、內宴、

〔菅家文章〕詩五 (與世) 寬平六年 翫梅花應製

豐樂院ニ
御ス

道真應製
ノ詩

隨處有梅惣可憐、不如獨立月明前、香風豈管花吹出、半是清涼殿裏煙、

寬平六年是月

一三七

寬平六年二月八日

二月 大甲午朔

一三八

八日、祭主神祇大副大中臣有本卒ス、

〔類聚大補任〕 祭主正五位上行神祇大副有本 二月卒、

〔二所大神宮例文〕 第八 祭主次第

有本 清曆六男今曆孫常陸少掾雄良男、貞觀十四年任、在任廿二年、寬平六年二月八日卒、

〔大中臣氏系圖〕

世系

雄良 常陸少掾、正六上、

有本 祭主、大副、正五位上、寬平六二八卒、

良臣 大司、大副、從五位下、父子爲祭主、宮司、云々、男五人、

夏水 從八位上

全臣 大司、六位、

定臣 權司、

有本 貞觀十二年豐雄卒、同十三年祭主闕職、同十四年有本補祭主、少副、從五位下也、同十六年正月補大副、元慶元年從五上、同八年正五下、大

嘗會賞、寬平元年十一月正五位上、大嘗會賞、同六年卒、

二十三日、耕田ノ數ニ准シ、正稅ヲ班舉セシム、

〔類聚三代格〕 八 出舉事

太政官符

應准耕田數班舉正稅、并有對捍輩卽科其罪事

口分田ヲ沽却ス 富豪ノ出 段別五束以上正稅ヲ班舉ス 浪人ノ處分法

右得紀伊國解僞、檢案內、此國調庸租稅并年料雜米、及例貢雜交易等之色、其數猥積、遷代國司無力辨濟、空過秩限、遂爲身煩、伏尋由緒、惣依民不堪躬耕、沽却口分田也、方今良田多歸富豪之門、出舉徒給貧弊之民、收納難濟、官物自失、因斯承前國吏等、准量田疇之數、班舉買耕之人、而或諸司官任雜任、并良家子弟、內外散位以下、及諸院諸宮王臣勢家人等、多接部內、領作田地、至于班舉正稅、偏恃官位及本主、對捍國司、曾無承引、望請官裁、不論土浪貴賤、准耕田數、段別五束以上班舉正稅、若有對捍輩者、勸收所營之穫稻、填補不足之官稻、以爲懲肅、曾不寬縱、謹請官裁者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅依請、若懲肅之後、猶不悛改、京戶子弟及浪人者、依寬平三年九月十一日格、勒還本鄉、及移配遠所、不復留住、其當國人怙終之者、不論

寬平六年二月二十三日

一三九

寬平六年二月二十八日是月

一四〇

有官無職、及院宮勢家人、錄名言上、殊處重科、諸國若有此類、同亦准之、

寬平六年二月廿三日 ○政事要略同

大宰府、新羅賊來寇スト奏ス、勅シテ之ヲ追討セシム、

〔日本紀略〕院亭子 二月廿二日、乙酉、大宰府飛驒使來申新羅賊、同日賜勅符、

令彼府應追討也、

○新羅ノ賊來寇スルコト、五年閏五月三日ノ條及ヒ本年三月十三日

ノ條ニ見ユ、

二十八日、辛酉、除日、

〔三十六人歌仙傳〕散位凡河内宿禰躬恆、先祖不見、寬平六年二月廿八日任甲

斐少目、○古今和歌集目錄同

是月、彗星見ハル、

〔扶桑略記〕醍醐天皇 裏書 延喜十八年十月十五日、太宰府解、壹岐嶋言上

怪異等解文云、○中略 古老云、寬平六年二月、彗星見、

三月 甲子 朔 盡

三日、丙寅、上巳宴、

〔菅家文章〕詩五 (寬平六年) 有勅、賜視上巳櫻下御製之詩、敬奉謝恩旨、

不啻看櫻也、惜春、紅粧寫得玉章新、微臣縱得陪遊宴、當有花前腸斷人、

六日、己巳、踏歌後宴、

〔日本紀略〕院亭子 三月六日、己巳、天皇御射場殿、有踏歌後宴之興、令上卿結

番射之、

十三日、丙子、大宰府、新羅賊邊島ヲ侵スト奏ス、勅シテ之ヲ追討セシム、

〔日本紀略〕院亭子 三月十三日、丙子、申剋大宰府飛驒使來申新羅賊(新)損侵寇

邊島之由、即賜勅符於彼府、令追討、

○新羅ノ賊來寇スルコト、二月二十二日ノ條及ヒ四月十四日ノ條ニ

見ユ、

二十一日、甲申、夜狂人アリ、紫宸殿ニ昇ル、

〔日本紀略〕院亭子 三月廿一日、甲申、今夜狂人昇紫宸殿、

二十四日、丁亥、地震、

寬平六年三月三日 六日 十三日 二十一日 二十四日

一四一

詩題
道真應製
ノ詩

射場殿ニ
御ス

寬平六年三月二十四日

〔日本紀略〕

院亭子

三月廿四日、丁亥、地兩度震、

四月小

癸巳

盡
○日本長曆、三正經緯大盡、
二作ル、今日本紀略ニ作テ、

一日、癸巳、旬儀、

〔日本紀略〕

院亭子

四月一日、旬、

七日、己亥、擬階奏、

〔九條年中行事〕

四月

七日、奏成選短册事、謂之擬階奏、

卿、受筥進至御前、受册置机上、
掃部察儲御前机、而寬平六年四月
七日記云、件察誤不儲候、○上下略

十日、壬寅、大宰府飛驒使來ル、是日、同府管内ノ諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕

院亭子

四月十日、壬寅、大宰府飛驒使來申、仰遣奉幣管内諸社、

十三日、乙巳、太白東井ヲ犯ス、

〔日本紀略〕

院亭子

四月十三日、乙巳、太白犯東井四頭北第一星三寸、

十八日、庚戌、太白出自東井、去南一丈、

廿四日、丙辰、太白出自東井、去南一丈、

十四日、丙午、大宰府、新羅賊對馬ニ寇スト奏ス、尋テ、大宰府ニ勅シテ之ヲ討ゼシメ、又北陸、山陰、山陽諸國ニ令シテ、警固ヲ嚴ニセシム、

〔日本紀略〕

院亭子

四月十四日、丙午、大宰府飛驒使上奏、新羅賊來著對馬島

寬平六年四月一日、七日、十日、十三日、十四日

依府ノ請ニ
經ヲテ國
ニ任ズ帥

寬平六年四月十八日

一四四

之由同日賜勅符於彼府、

十六日戊申、大宰府飛驒使來著、上奏被給將軍討平凶賊、即日、以參議藤原國經爲權帥、

十七日己酉、賜勅符於大宰府、應討平新羅賊也、又下知北陸、山陰、山陽道諸國、備武具、選精兵、令勤警固、

〔公卿補任〕四

參議正四位下藤原國經、皇太后宮大夫、四月十六日兼大宰

權帥、

〔小右記〕三十

寬仁三年四月十八日、

略○上引見寬平外記日記云、有警固北陸、山陰、山陽、南海等道要害、

○新羅ノ賊來寇スルコト、三月十三日ノ條ニ、賊船ノ逃去スルコト、五月七日ノ條ニ見ユ、

十八日、庚大中臣安則ヲ祭主ニ任ズ、

〔類聚大補任〕天字多

祭主正六位上行神祇權大祐、大中臣安則、四月十八

日任、在任卅九年、祭主子老孫、道雄男也、

東山、東海兩道ノ勇士ヲ召ス、

〔日本紀略〕亭子

四月十八日庚戌、今日東山、東海道召勇士、

十九日、亥新羅賊追討ニ依リ、大神宮ニ奉幣シ、尋テ、諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕亭子

四月十九日、爲討新羅賊、奉幣伊勢太神宮、

廿日、同日分遣諸神社幣帛使、

〔師守記〕九

貞和三年十二月十七日、

(天字)天下兵革時被行御祈例、

天慶三年正月十三日、諸卿參入、依東西兵亂、准寬平六年四月新羅賊例、奉

幣十二社、伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、大原野、稻荷、春日、大神、大和、住吉、廣田、○大外記中原師茂勸例、

二十日、壬陸奥、出羽ヲシテ警固セシム、

〔日本紀略〕亭子

四月廿日、仰陸奥、出羽可警固之由、

二十二日、甲山陵使ヲ發遣ス、

〔日本紀略〕亭子

四月廿二日、遣山陵使、

二十五日、乙大江千里、勅ヲ奉シテ、古今ノ和歌百二十首ヲ撰ビ、之ヲ獻ズ

〔句題和歌〕

臣千里謹言、去二月十日、參議□□朝臣傳勅曰、古今和詞、多少獻上、臣奉命以

寬平六年四月十九日、二十日、二十二日、二十五日

一四五

幣十二社奉

寛平六年四月二十五日

一四六

後、魂神不安、遂臥重疴、延以至今、臣儒門餘孽、側聽言詩、未習艷辭、不知所爲、今臣纔搜古句、構成新詞、別亦一本又或ハ命ニ作ル、加自詠十首、惣百廿首、悚恐震懾、謹以奉カ舉進、豈求駭目、只欲解頤、千里誠恐、誠懼謹言、

寛平六年四月廿五日

散位從五位上大江朝臣千里

春

咽霧山鶯啼尙少

山高ふかみたちいみふりくる霧にむすればや鳴鶯の聲のこゑまれならなる赤○古本集

同ジ、以下二
十首略ス、

夏

春條長定夏陰盛

このめもえいはるあさかかへこしえいえもあなればなはなのなかけとそ成なまさりける一○以下十
首略ス

秋

天漢迢々不可期

あまの河ほとのはるかになりゆけはあひみん事のさためなきかな赤○古本集

同ジ、以下二
十首略ス、

冬

迎冬先有好風

いつしかと冬をむかふるあしたからまつよき風の吹そうれしき赤○古本集

同ジ、以下十
一首略ス、

風月

風纏白浪花千片

れきへより吹くる風はしら浪の花とのみこそ見えわたりけれ赤○古本集

同ジ、以下
十首略ス、

遊覽

山雲初晴水色新

雲もなく谷あかきは山さへはれ行は水の色こそあらた成けれ二○以下十
首略ス、

雜

淚流雙袖面成文

なく涙こふる袂たつにかりてはくれなおふかきあやと社見れ首○以下十
首略ス、

述懷

寛平六年四月二十五日

一四七

寛平六年四月二十五日

自静其心延壽命

定なき心ひとつをなしつる(にイ)そ命をのふる物にそありける○以下
首略

右百廿首、大江千里之和歌也、自寛平六年二月十日、至同四月廿五日之詠、
看日數纔間詠也、彼人一世之詠歌、雖可有數首、依隔時代、今見稀也、此後歌
者、吾隨所見書加之、今世雖有不好之詞等、古風體、儒門之詠歌、何可捨乎、不
斷勘可被見之、誠温故而知新之謂、宜哉、

文保二年六月四日

參議藤判

〔古今和歌集〕

雜歌下

寛平御時、歌奉りけるつゝ、おてに奉りける、

大江千里

芦たつの獨をくれて鳴聲は雲の上まで聞えつかなん

〔群書一覽〕

四家集類

大江千里集 寫本

一卷

はしめに眞字の自序あり、歌數百餘首、ことくく白氏文集の詩句題なり、
全き家集にはあらずと見えたり、

○藤原興風、藤原勝臣ノ和歌ヲ獻ズルコト、便宜左ニ合致ス、

藤原興風
和歌ヲ獻

藤原勝臣
和歌ヲ獻

〔古今和歌集〕

五秋歌下

寛平御時、ふるき歌奉れと仰られければ、立田河紅
葉々流といふ歌をかきて、その同じ心をよめりける、

興風

み山より落くる水の色見てそ秋は限と思ひしりぬる○興風
集ニ二

句ヲおちくる
瀧のニ作ル、

〔古今和歌集〕

十八雜歌下

寛平御時、歌奉りけるつゝ、おてに奉りける、

藤原かちをん

入しれす思心は春霞たち出て君かめにもみえなん

寛平六年四月二十五日

一四九

一四八

寛平六年五月一日五日七日

五月大 盡 五月王 朔

○日本長曆三正統覽小盡二作ル、今日本紀略五七小右記長和三年五月五日條ニ據ル

諸司廢務

一日壬 戌 日食

〔日本紀略〕亭子 院 五月一日壬戌、日有蝕之、諸司廢務

五日丙 寅 參議藤原國經ヲ權中納言ニ任ズ

〔公卿補任〕四 權中納言從三位藤原國經六、七、五月五日任、大宰權帥如元同

八日給左右近衛、左右兵衛爲隨身

〔古今和歌集〕十七 雜歌上 大納言藤原のくにつねの朝臣宰相より中納言に

なりける時に、そめぬうへのきぬのあやをおくるとてよめる、

(源能春) 近院の右のおほいまうち君

色なしと人やみるらん昔よりふかき心(ほ)にそめてし物を

七日辰 戌 大宰府、新羅賊逃去セル由ヲ奏ス、尋テ、勅シテ警固ヲ嚴ニセシム、

〔日本紀略〕亭子 院 五月七日、大宰府飛驒使來、上奏賊等逃去不獲之由、翌日

賜勅符於彼守、令固守

○新羅賊ノ來寇スルコト、四月十四日ノ條ニ、再ビ來寇スルコト、九月

十七日ノ條ニ見ユ、

乘車ノ制

十二日酉 癸 貴賤ノ乘車ヲ禁ズ、

〔政事要略〕六十七 男女衣服并資用雜物等事 寛平六年五月十二日官符云、男女

有別、禮敬殊著、而頃年上下惣好乘車、非施新制、何改弊風、左大臣宣、奉勅、不論

貴賤、一切禁制、七 日本文、長保元年七月二十

○左右大臣ニ乘車ヲ聽スコト、七月一日ノ條ニ、又男子ノ乘車ヲ聽ス

コト、七年八月十七日ノ條ニ見ユ、

是月、渤海使裴頰等入朝ス、

〔日本紀略〕亭子 院 五月、是月、渤海使裴頰等入朝、

〔扶桑略記〕二十二 宇多天皇 五月、唐客含詔入朝、

○渤海使ノ伯耆ニ來著スルコト、十二月二十九日ノ條ニ見ユ、

寬平六年六月一日

六月壬辰朔

一日壬辰紀伊ノ神戸官戸ノ課丁ヲ同率ニセシム、

〔類聚三代格〕八調庸事

太政官符

應同率神戸官戸課丁事

右得紀伊國解僞、檢案内、官戸課丁少數常煩所司勘出、尋彼由緒、官戸悉爲神戶百姓之所致也、何者此國有封神社總十一處、所充封戸二百卅二烟、可有正丁千二百七十六人、此則依式每戸以五六人所率之數也、而今神戸所領正丁之數、或戸十五六人、或戸二三十人、官戸所有課丁之數、或戸僅一二人、或戸曾無課丁、詳檢其由、神戸課役頗輕、官戸輸貢尤重、因斯脫彼重課、入此輕役、謹案式云、戸以正丁五六人爲一戸、其神寺封丁、若有增益者、隨即減之、死損者不須更加、而國造并禰宜祝等、寄事神祇、曾無改正積慣之漸、忽然難變、望請、不論神戶官戸、總計國內課丁、每戸同率貫附并カ、弁定之後、若有輒改替者、尋其所由、依法科罪、謹請官裁者、右大臣宣、依請、

寬平六年六月一日○政事要略同シ

有封神社
十封戸正
同封戸數
丁ノ官戸
課丁ノ數
同ジカラ
ズ、神ノ課
役ハ輕ク
官戸ノ輸
貢ハ重シ

十一日壬寅月次祭、

〔日本紀略〕院亭子 六月十一日、壬寅、月次祭、

二十七日戊午、傳燈大法師位濟棟ヲ東大寺別當ニ補ス、

〔正倉院文書〕一東南院文書一櫃第二卷

太政官牒 東大寺

傳燈大法師位濟棟年六十七、膳册八、法相宗 專寺

右（藤原良世）大臣宣、件法師、宜補彼寺別當權律師法橋上人位、惠眇秩滿之替者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

寬平六年六月廿七日

左大史正六位上（昌誓下同シ）大原氏雄

從四位下行左中辨兼木工頭美濃權守源朝臣

奉行 同年七月五日白堂了

別當權律師惠眇

都維那賢證

小別當權威儀師峯澄

上 座阿闍梨

寺 主應如○本書ニ、太政官印十九顆、ヲ踏ス、東大寺別當譜同シ、

寬平六年六月十一日 二十七日

惠眇ノ替

寬平六年六月二十七日

一五四

〔東大寺別當次第〕

三十四

傳燈大法師濟棟已講

寬平六年六月廿七日官符年六

膳四十八、法相宗、本寺唐禪院

去四年維摩講師、七年任律師、寺務四年、寬平六七八九、

七月辛酉 朔 盡

一日、辛酉左大臣源融、右大臣藤原良世ノ乗車ヲ聽ス、

〔公卿補任〕

四

左大臣從一位源融 七月日勅許車、

右大臣從二位藤原良世 七月日勅許車、

〔古今和歌集目錄〕

大臣

河原左大臣

〔寬平〕同六年七月一日有許車勅、

○藤原有穗ノ乗車ヲ聽スコト、便宜左ニ合敘ス、

〔公卿補任〕

四

參議從四位上藤有穗 七月十五日聽乘車、

七日、丁卯七夕御會、

〔菅家文章〕

詩五

〔寬平〕同紀發詔、奉和御製七夕祈秋穗詩之作、

非書非劍我君明、千尺願絲一箇情、珍重素風初七夕、待來銅雀第三聲、佳期恰似時難遇、巧思祇同月、易盈偏祝西成兼所感、四騶晝夜破行程、

十六日、丙子尾張、參河、遠江、駿河、近江、美濃、越前、加賀、能登、越中等ノ諸國ヲシテ、諸院宮ノ使等、往還ノ舟車人馬ヲ強雇スルコトヲ禁ゼシム、

〔類聚三代格〕

十二 禁制事

寬平六年七月一日 七日 十六日

一五五

詩題
道真ノ詩

寬平六年七月二十二日

一五六

太政官符

應禁止諸院諸宮諸司諸家使等強雇往還船車人馬事

右得上總越後等國解僦得諸郡調綱郡司并雜掌綱丁等解僦進上調物以馱爲本運漕官米以船爲宗而上道之日前件諸院等使結黨路頭追妨馱馬率類津邊覆奪運船於是有心逐馬無顧彼荷(整)官物致欠失之煩綱領陷逗留之責加之部內百姓差預綱領之日苦此濫惡逃竄他境國之弊亡莫過於斯焉望請下知路次諸國永休民愁謹請官裁者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣如此之事格制先立曾無懲肅責在國宰宜下知尾張參河遠江駿河近江美濃越前加賀能登越中等諸國特施嚴制一切禁斷若有強雇者准之強盜科罪其身者諸國承知勝示路頭津邊莫令重然

寬平六年七月十六日

二十二日、壬太政官、在唐僧中瓘ニ報牒ヲ與フ、

〔日本紀略〕亭子院 七月廿二日、太政官牒送在唐僧中瓘報書上書狀、

〔菅家文章〕十狀牒 奉勅爲太政官報在唐僧中瓘牒

太政官牒在唐僧中瓘報上表狀

馱馬ヲ妨
グ運船ヲ
奪フ

温州刺史
朱褒ノ懇
志

頃年頻ニ
災アリ
沙金百五
十兩ヲ賜
フ

仁壽殿東
庭ニ行ハ
ル

音樂立合
參議階下
ニ陪ス

牒奉勅省中瓘表悉之、久阻兵亂、今稍安和、一書數行、先憂後喜、壑源茶等准狀領受、誠之爲深、溟海如淺、來狀云、温州刺史朱褒、特發人信、遠投東國、波浪眇焉、雖感宿懷、稽之舊典、奈容納何、不敢固疑、中瓘消息、事理所至、欲罷不能、如聞商人說大唐事之次、多云、賊寇以來十有餘年、朱褒獨全所部、天子特愛忠勤、事之髣髴也、雖得由緒於風聞、苟爲人君者、孰不傾耳以悅之、儀制有限、言申志屈、迎送之中、披陳旨趣、又頃年頻災、資具難備、而朝議已定、欲發使者、辨整之間、或延年、大官有問、得意敍之者、准勅牒送、宜知此意、沙金一百五十兩、以賜中瓘、旅庵衣鉢、適支分銖、故牒、

寬平六年七月廿二日

左大史云々

○中瓘ノ唐國凋弊ヲ報ズルコト、五年三月是月ノ條ニ見ユ、

二十八日、成子相撲召合、

〔日本紀略〕亭子院 七月廿八日、戊子、於仁壽殿東庭、相撲召合、

廿九日、己丑、相撲、

〔西宮記〕七月相撲召合 同三年七月廿四日、貞公御記云、仁壽殿前有相撲召合、

有音樂立合等是寬平六年例也、參議以上候殿上、檢彼寬平例、參議陪階下者、

寬平六年七月二十八日

一五七

寬平六年七月二十八日

〔北山抄〕

八相撲大將要抄
召合

承平三年依南殿類有物恠御此殿仁德殿有音樂立合寬

一五八

平六年例也、○江家次

第同

八月

大庚寅朔盡

四日、癸巳雜米未進ニ依リ、國郡司ヲ斷罪シ、且ツ其解由ヲ返サシム、

〔類聚符宣抄〕

八解由事

太政官符

應依雜米未進、斷罪國郡司、返國司解由事

源隆右左大臣奏狀稱、日者大炊廩院、數申無庫、尋其由緒、誠緣未進、凡年料白米者

以大稅利稻、諸國春進、一年應納萬八千石、而或年見納六七千石、或年纔八九

千石、然則既欠三分之一、何支百僚之用、伏見格條、寶龜元年、五月四日、閏二月

十三日、兩年、類乘法制云、諸國雜米、未進數多、既闕國用、事須掾領已上專當其事、

史生以上宛綱領送、若有未進、無問多少、國司史生已上、皆奪公廩、主典已上、並

卽貶考、專當官者解却見任、郡司主帳以上、咸取職田、解任貶考、亦同國司、延曆

十四年、七月二日、格云、依少奪多、事實不穩、而斛米疋絹、一物未進、偏稱格式、悉

奪公廩於事思量、深乖弘恕、自今以後、宜國司史生已上、各作差法、准未進數、割

其公廩、隨色弁備進納京庫、據件等格、隨未進後誤公廩、雖載延曆之格、罪專當貶

綱領、尙存寶龜之制、今之所庶專當國司、罪如始制、綱領史生、亦解却見任、其國

年料白米
萬八千石
大炊察納
米三分一
寶龜元年
同四年ノ
格

延曆十四
年ノ格

寬平六年八月四日

一五九

寬平六年八月九日

司進解由之日、知無未進、及後收之者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅依請、

寬平六年八月四日弁史可尋入之

九日、戊戌舊ニ依リテ、對馬ニ防人ヲ差遣セシム、

〔類聚三代格〕

十八 衛士仕 丁事 ○ 享祿卒

太政官符

應依舊差遣對馬嶋防人事

防人ノ數
留住シテ
歸ラズ
蕩沒逃亡
防人停止
新羅對馬
ヲ窺フ
討賊使清
原令望府

右得太宰府解僞、太政官去貞觀十八年三月十三日下府符僞、參議權帥從三位在原朝臣行平起請僞、防人九十四人、是六國所點配也、配遣年久、漂亡者多、仍問嶋司等、申云、往年配遣之人、或因嫁娶爲居、或習漁釣爲業、留住不歸、往々而有、今新點之民、或蕩沒、或逃亡、徒失課役之人、還非扞城之士、望請、停止配遣、令輸役料、便以其物雇留住人者、右基經大臣宣奉勅依請者、自爾以降、停件防人、只送功物、而今新羅寇賊屢窺彼嶋、燒亡官舍、斂傷人民、加以弊亡有漸、民氓衰耗、况便弓矢者、百分之一二、因茲討賊使少貳從五位下清原真人令望、更留府兵

兵五十人
ヲ差遣ス

五十人、權宛援兵、備其不虞、今尋差遣防人之興、元爲邊戍、而停彼兵士、令輸役料、是兵革不用之時、權議也、謹案物意、安不忘危、存不忘亡、豈不慎非常之謂乎、若不置件戍、何以備守望、請簡擇精勇、復舊差遣、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奧出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請、

寬平六年八月九日

十九日、戊申除目、

〔公卿補任〕

延喜二年

參議從四位下紀長谷雄五十、同六八月十六右少弁五

〔公卿補任〕

延喜十三年

參議從四位上藤枝良六十、同六八十六轉大輔六

〔外記補任〕

大外記和氣宗世 八十九任、

少外記多治有友 八十九任、元宮內丞進士、

〔葉黃記〕

五 實治元年四月廿七日、

勘申文章得業生菅原在匡、與同公長座次相論事

一依兼國可被定上下薦哉事、略中

寬平五年二月四日、癸酉、以蔭孫正六位上菅原朝臣高視現爲文章得業生、同六

寬平六年八月十九日

寛平六年八月二十日二十一日

一六二

年八月十六日任參川掾三月二日、大外記中原師光勘申、件國掾相當從七位上、○寶治元年

僧忠戒ヲ權律師ニ任ズ、

〔僧綱補任〕○興福寺本 權律師忠戒 八月十九日任、久修業東大寺（卷七）

六、

二十日、己酉甲斐國正六位上在樹神二位一階ヲ進ム、

〔日本紀略〕院亭子 八月廿日、己酉授甲斐國正六位上在樹神從五位下、

二十一日、戊庚參議菅原道眞ヲ遣唐大使ニ、左少辨紀長谷雄ヲ副使ニ補ス、

〔日本紀略〕院亭子 八月廿一日、庚戌以參議左大辨菅原朝臣爲遣唐使、以左

少弁紀朝臣長谷雄爲副使、

〔扶桑略記〕字多天皇 八月廿一日、甲戌遣唐大使參議左大辨兼勘解由長

官菅原道一（五）遣唐副使紀長谷雄（九、四十）

〔公卿補任〕四 參議從四位下菅道一（五）左大弁、式部大輔、春宮亮、勘解由長

官、八月廿一日兼遣唐大使、○政事要略、一代要記、大鏡、書古今和歌集、目錄同、

〔公卿補任〕四 參議從四位下源昇（四十一）、（寛平）同六八月兼遣唐裝束使、○

代曆

遣唐裝束使

〔古今和歌集〕

雜歌下

寛平御時よ、もろこしのはう官よめされて侍ける

時よ、東宮のさふらひよて、をのこともさけたうへけるついでよよみ侍ける、

藤原たふさ

なよ竹のよなかき上に初霜のおきおてものをおもふ比哉

○遣唐使ノ發遣ヲ停ムルコト、九月是月ノ條ニ見ユ、

能登ノ史生一員ヲ停メ、弩師ヲ置ク、

〔類聚三代格〕官員并廢置諸事

太政官符

應停史生一員置弩師事

右得能登國解僞、此國獨出北海東西不隣、若有非常、誰備防禦、望請准越後佐渡等國、被置件職者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請、

寛平六年八月廿一日

二十二日、亥辛天台座主園城寺長吏猷憲寂ス、尋テ、大法師康濟ヲ園城寺長吏ニ補ス、

寛平六年八月二十二日

一六三

越後佐渡ニ准ズ

寬平六年八月二十二日

一六四

〔扶桑略記〕

字多天皇

八月廿三日座主猷憲卒

○僧綱補任

〔園城寺長吏次第〕

第三猷憲

內供阿闍梨智證弟子下野國人寬平六年八月廿二日滅年六十八

〔華頂要略〕

天台座主記一

第七內供奉阿闍梨猷憲持念堂下野國鹽屋郡大師隨大師受法灌治山一年承和十四年月日受戒

頂德圓講師弟子治山一年承和十四年月日受戒

五日任座主治山四十七七、敕使少納言藤原是陰同日到來同六年八月廿二日卒

十八、

〔寺門傳記補錄〕

長十三

高僧略傳上

內供奉猷憲持念堂三世猷憲

下野國鹽屋郡人大師入室德圓和尚弟子至內供阿闍梨寬平三年五月二十

二日於山王院禮大師受阿闍梨位灌頂時年七十一臘四十一五年二月補長

吏治一時內供奉同三月二十五日任座主治一六年二月二十二日以大法職

位授於增欽慈鏡二人受後今茲八月二十二日入滅年七十四

〔園城寺傳法血脈〕

乾

大師

初炎曼德迦寬平三年五月廿二日入滅山王院大師解七十一、四十一、

猷憲入室又德圓弟子下野國人號定心院座主號持念堂

後勝三世

官歷

法系

定心院座主

弟子增欽慈鏡

園珍ヨリ三部大法ヲ受ク

寬平六年八月二十二日

一六五

〔天台宗延曆寺座主圓珍和尚傳〕

今年春二月和尚俄語門弟子曰我今年將

〔園城寺長吏次第〕

第四康濟

權律師光定弟子越前國人寬平六年任

〔僧官補任〕

園城寺長

康濟律師

寬平六八任治三年

〔諸寺別當座主次第〕

園城寺長

康濟

同六年八月日任三昧院

○猷憲ニ阿闍梨位ヲ授クルコト三年五月九日ノ條ニ園城寺長吏ニ

補スルコト五年二月是月ノ條ニ見ユ

補スルコト

五年二月

是月ノ條ニ見ユ

園城寺長吏ニ

補スルコト

五年二月

是月ノ條ニ見ユ

園城寺長吏ニ

補スルコト

五年二月

是月ノ條ニ見ユ

園城寺長吏ニ

補スルコト

五年二月

是月ノ條ニ見ユ

園城寺長吏ニ

補スルコト

五年二月

是月ノ條ニ見ユ

園城寺長吏ニ

補スルコト

五年二月

是月ノ條ニ見ユ

園城寺長吏ニ

補スルコト

五年二月

是月ノ條ニ見ユ

寬平六年八月二十二日

一六五

大師猷憲阿闍梨授二人

增欽長吏師解六月廿二日入壇

〔師資相承〕

慈鏡

或云撰大師廣傳之時連署中爲第一仍列長吏五

〔師資相承〕

三種悉地

智證大師

猷憲

寬平五年八月廿三日入滅

○又云我所傳三部大法宜求其人而傳之其年五月即經奏聞蒙官牒傳

授三部大法於猷憲康濟兩大法師以爲三部阿闍梨爲不斷佛種也

終略中又云我所傳三部大法宜求其人而傳之其年五月即經奏聞蒙官牒傳

授三部大法於猷憲康濟兩大法師以爲三部阿闍梨爲不斷佛種也

終略中又云我所傳三部大法宜求其人而傳之其年五月即經奏聞蒙官牒傳

授三部大法於猷憲康濟兩大法師以爲三部阿闍梨爲不斷佛種也

終略中又云我所傳三部大法宜求其人而傳之其年五月即經奏聞蒙官牒傳

授三部大法於猷憲康濟兩大法師以爲三部阿闍梨爲不斷佛種也

寬平六年九月三日 九日

九月大申盡

三日、戊、壬伊勢大神宮、及ビ諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕院亭子 九月三日、奉幣伊勢太神宮、

〔西宮記〕例幣 寬平六年九月、天皇御大極殿乾角、奉幣諸社事、○中略、撰集

寬平六年九月五日、此日被奉伊勢太神宮臨時幣、

〔小右記〕三十 寬仁三年四月廿四日、辛亥、寬平六年新羅凶賊時宣命、野美

材自筆草、慮外尋得、○中書寫送四條大納言、爲令見宣命趣之太優、報云、美材

文華拔群者也、見菅家集者、

○西宮記五日ニ作ル、今姑ク日本紀略ニ據リテ掲書ス、

九日、戊、長重陽宴、

〔日本紀略〕院亭子 九月九日、戊辰、有重陽宴、題云、天澄識賓鴻、

十日、己巳、詩宴、題云、雨夜紗燈、

〔菅家文章〕詩五 (頭書、扶十六) 重陽節侍宴、同賦天淨識賓鴻應製、

秋風拂拭易排虛、道路依稀稚羽初、碧玉裝箏斜立柱、青苔色紙數行書、曉霜唯

痛頻寒著、沙漠不知幾里餘、賓雁莫教人意動、向前旅思欲何如、

大極殿ニ
御ス

小野美材
宣命ヲ草
ス

後朝詩宴

道眞應製
ノ詩

後朝應製
ノ詩並ニ
序

長谷雄應
製ノ詩

三統理平
應製ノ詩

高丘五常
應製ノ詩

(頭書、扶十一)
賦雨夜紗燈應製、并序、于時、

官人入夜殿上舉燈例也、于時重陽後朝、宿雨秋夜、微光隔竹、疑殘螢之在藁、孤
點籠紗、迷細月之揮霧、臣等五六人、奉勅見之、々々不足、應製賦之云爾、謹序、
紗燈一點五更廻、不要寒雞曉漏催、晴誤穿雲星乍見、秋疑冒雨菊新開、耳聞落
淚兼聞曲、手勸微心且勸盃、每憶脂膏多溼潤、那勝恩澤繞身來、

〔類聚句題抄〕天淨識賓鴻 (長谷雄) 紀納言

銀漢浪晴橋不斷、紫微雲破陣初橫、尋聲得識多賓客、逐影相看幾弟兄、

統理平

青靄盡時辭北土、絳霓殘處客南中、聲懸碧落驚天斗、影點銀河亂暮虹、

高五常

數行成陣添嚴仗、群輩差肩亞侍臣、候節遙過溟海曲、隨陽自屬帝王津、

十一日、庚、午穢ニ依リテ、例幣ヲ停止ム、

〔日本紀略〕院亭子 九月十一日、庚午、例幣、依內裏穢停止之、

〔西宮記〕例幣 寬平六年九月十一日、例幣使、依內裏穢停止云々、

寬平六年九月十一日

十二日、辛未法橋康濟ヲ天台座主ニ補ス、

〔日本紀略〕亭子院 九月十二日、辛未、以法橋康濟爲天台座主、

〔扶桑略記〕字多天皇 九月十二日、康濟大法師任天台座主、師智證大弟子

〔華頂要略〕天台座主記一 第八康濟和尙蓮華房律師、寬平六年九月十二日

任座主、年六十七、藏四十八、勅使少納言令輔王、同十三日到來、(五方)僧綱補任、異事ナシ、

〔座主宣命〕第八康濟權律師 治山五年、

宣命云、使少納言令輔王、十五日到來、

天皇我詔旨止、山中乃法師等仁白止左倍宣勅命乎白久、法橋上人位康濟波、年

老高之上仁、眞言止觀乃業乎兼習倍利、故是以座主爾治賜事乎白止左倍宣勅

命遠白壽、

寬平六年九月十二日補、超權律師勝延、幽仙、

十三日、申壬從五位下備前權介藤原玄上ヲ下總介ニ任ズ、

〔公卿補任〕延喜十九年 參議從四位上藤原玄上、六十(寬平)同四正廿三備前權介、

同五正廿一從五位下、內冥藏人同六九十三下總介、

大宰府ノ史生一員ヲ減シテ、弩師ヲ加フ、

圓珍ノ弟

勅使

宣命

勝延幽仙
ヲ超ユ

〔類聚三代格〕

五員并廢置諸國

太政官符

應停史生一員加置弩師事

右得大宰府解稱、謹檢案内格條云、去弘仁五年五月廿一日、除史生一人、置弩師一人、若有病故、誰補其闕、望請、重減史生、加置弩師、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請、

寬平六年九月十三日

十七日、丙子是ヨリ先、新羅ノ賊對馬ヲ侵ス、是日、守文室善友等、防戰シテ之ヲ破ル、

〔扶桑略記〕

字多天皇

九月五日、對馬島司言新羅賊徒船四十五艘到著之

由、太宰府、同九日進上飛驒使、同十七日記曰、同日卯時、守文室善友、召集郡司士卒等、仰云、汝等若箭立背者、以軍法將科罪、立額者可被賞之、由言上者、仰訖、即率列郡司士卒、以前守田村高良令反問、即島分寺上座僧面均、上縣郡副大領下、今主爲押領使、百人軍各結廿番、遣絕賊移要害道、(備九)豐圓春竹率弱軍四十人、度賊前、凶賊見之、各銳兵而來向守善友前、善友立楯、令調弩、亦令亂聲、時凶

寬平六年九月十七日

一六九

賊船四十
五艘

善友士卒
ヲ激勵ス
前守田村
高良島分
寺上座郡
領等ヲ押
領使トス
豐國春竹

賊三百餘
人ヲ殺シ
船十一艘
ヲ奪フ

來寇ノ目
的

島司善友
ヲ賞ス

寬平六年九月十八日

一七〇

賊隨亦亂聲即射戰其箭如雨見賊等被射并逃歸將軍追射賊人迷惑或入海中或登山合計射殺三百二人就中大將軍三人副將軍十一人所取雜物大將軍縫物甲冑貫革袴銀作太刀纏弓革胡籙宛夾保呂各一具已上附脚力多米常繼進上又奪取船十一艘太刀五十柄梓千基弓百十張胡籙百十房楯三百十二枚僅生獲賊一人其名賢春即申云彼國年穀不登人民飢苦倉庫悉空王城不安然王仰爲取穀絹飛帆參來但所在大小船百艘乘人二千五百人被射殺賊其數甚多但遺賊中有最敏將軍三人就中有大唐一人日記上

〔小右記〕

三十 寬仁三年六月廿九日

略○上 寬平六年新羅凶賊到對馬島々司善友打返即給賞

○新羅賊追討ノコト四月十四日ノ條ニ大宰府賊ノ逃去ヲ奏スルコト

ト五月七日ノ條ニ對馬ニ防人ヲ差遣スルコト八月九日ノ條ニ大宰府新羅賊擊破ノ狀ヲ奏スルコト本月十九日ノ條ニ見ユ

十八日丁丑季御讀經

〔日本紀略〕

亭子 九月十八日讀經

諸國檢非違使ノ秩限ヲ定メ無位ノ人ヲ以テ之ニ補スルコトヲ停ム

〔類聚三代格〕

五 定秩限事

太政官符

應諸國檢非違使立秩限并停補无位人事

右檢案内把笏帶劍威儀不輕糾察追捕職掌惟重而年來所任不必其人官縱雖卑選何疎略者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅宜自今以後停補无位人并以六年爲一秩准職非永例隨時廢置先任之輩秩限滿則不待替人直從解任

寬平六年九月十八日

十九日戌寅大宰府新羅賊擊破ノ狀ヲ奏ス仍テ飛驒使ニ勅符位記等ヲ賜

ヒ又諸國ニ令シテ警固ヲ停メ舊ニ依リテ出雲隱岐兩國ニ烽燧ヲ置

カシム

〔日本紀略〕

亭子 九月十九日戌寅大宰府飛驒使言上打斂新羅賊二百餘

人仍仰諸國令停止軍士警固等

卅日己丑大宰府飛驒使來言上打斂新羅賊廿人之由賜勅符於彼國令警固

〔北山抄〕

四 雜抄 飛驒事 寬平六年九月十八日子二剋太宰飛驒使來十九日戌

寬平六年九月十九日

一七一

六年ヲ一
秩トス

賊二百餘
人ヲ誅ス

賊二十人
ヲ誅ス

大宰府飛
驒使來ル

前後飛驒使ヲ賞ス

寬平六年九月二十三日

一七二

二剋飛驒使來言上打殺新羅賊二百餘人之由云々寅四剋召先後飛驒使於陣頭給白袞各一條緣其早來也一人給勅符一人給位記等還遣之

〔類聚三代格〕

○十八 關并烽候事

太政官符

應出雲隱岐等國依舊置烽燧事

右得隱岐國解僞檢令條諸國置烽燧若有急速則通達京師遠近相應慎備警固至于延曆年中內外無事永從停廢而今寇賊數來侵掠邊垂加之此國遙離陸地孤居海中風波危勦往還不通縱有非常何得通告望請官裁雖不通京都而件兩國之境依舊置烽候者右大臣宣奉勅依請

寬平六年九月十九日 ○扶桑略 記同

○對馬守文室善友新羅ノ賊ヲ擊破スルコト十七日ノ條ニ大宰府賊船ノ退去ヲ奏スルコト十月六日ノ條ニ見ユ

二十三日、壬午、新羅ノ來寇ニ依リテ、山陵ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕

院亭子 九月廿三日、遣山陵使、

〔西宮記〕

臨時十二 仁王會裏書

寬平六年九月廿三日、奉山陵臨時幣、停尋常政、依新

廢務

延曆中烽燧ヲ停廢ス

羅凶賊來侵也云々納言以上有障不參仍使參議參入行事

二十七日、丙戌、參議菅原道真、東宮ノ令旨ヲ奉シ、詩ヲ賦シテ之ヲ獻ズ、

〔菅家文章〕

詩五 暮秋賦秋盡翫菊應令并序

古七言詩曰大底四時心惣苦就中腸斷是秋天又曰不是花中偏愛菊此花開盡更無花詩人之興誠哉此言夫秋者慘慄之時寒來暑往菊者芬芳之草花盛葉衰于時九月廿七日孰不謂之盡秋孤蓂兩三莖孰不謂之殘菊謹奉令旨賦此雙開意之所鍾刀火交判故獻五言以資一劇云爾

二十九日、子戌、直物、是日、宇佐使ヲ發遣ス、

〔日本紀略〕

院亭子 九月廿九日、直物同日、發遣宇佐使左衛門佐源朝臣當時、

正稅帳ヲ勘ヘザル諸國司ヲ科責セシム、

〔類聚三代格〕

七 諸使并公文事

太政官符

應科責不勘正稅帳諸國司事

右得民部省解僞主稅寮解僞謹檢式僞進正稅帳者諸國二月卅日、大宰管内

寬平六年九月二十七日、二十九日

一七三

寬平六年九月二十九日

國島五月卅日以前者此誠所以辨去年雜用知國內官物者也今諸國遠者廿年以下近者五年以上或點(點)而不進或進而不勤因茲載結解帳每年申送而依無科責猶致緩怠交替時移之後纔勤去年帳雖勤出物其數千萬而謂非當時(唯)只事規避徒有勾勤之煩曾無填納之勞遂使後任之吏慣其如此寄言前司無心勤勤夫正稅者國家之資非常之備若有急用何得勤申望請殊立科條嚴誠將來者省依解狀謹請官裁者左大臣宣奉勅依請今須件帳一任之內或過時不進或雖進不勤之輩遷替之日雖進解由返却不收以懲後人唯依舊年欠猶未填納且請取返却帳之國論實是勤濟公文也雖無返抄理非可責假令未及勤當時之帳而勤濟前司公文八年以上者從政匪懈勤公可稱若有辨濟填納請取返抄四年以上者擢於等倫殊加褒獎

寬平六年九月廿九日

〔政事要略〕

五十六 交替雜事十六

私記云有符主稅寮應科責不勤正稅帳諸國司事右被太政官去九月廿九日符僞省解僞得寮解僞謹檢式僞進正稅帳者諸國二月卅日太宰府管內國嶋五月卅日以前者此誠所以辨去年雜用知國內官物者也今諸國遠者廿年以

下近者五年以上或默而不進或進而不勤因茲載結解帳每年申送而依無科責猶致緩怠爰交替時移之後纔勤去年帳雖勤出物其數千萬而謂非當時(唯)事規避徒有勾勤之煩曾無填納之勞遂則在任之間恣用公廩去職日巧得解由後任吏等慣其如此寄言前司無心勤勤方今年々勤帳之國功過易顯闕負難避即知偏憚此事所致之漸也夫正稅者國家之資非常之備若有急用據何(何得)勤申論之公途事涉疎漏望請殊立科條嚴誠將來者省依解狀謹請官裁者左大臣宣奉勅者今須件帳一任之內或過時不進或雖進不勤之輩遷替之日雖得解由返却不收將懲後人唯依舊年闕猶未填納且請取返却帳之國論實是勤濟公文也雖無返抄理非可責若有辨濟填納適取返抄後之勤宜爲功課至于當任若所司勤尤有理而不辨填者怠在見任不可優恕又或國懈怠不進公文已歷廿餘歲或國僅進無意勤濟亦過十箇年既稱未勤前年公文何以分別後人功過如是之類見任國司依實言上二辨濟假令未及勤當時之辨而勤濟前司公文八年已上者從政匪懈勤公可稱何依前年之怠更爲當任之煩省宜承知依宣行者寮宜知依件勤之符到奉行

正六位上行少丞紀朝臣常直

寬平六年九月二十九日

寬平六年九月三十日是月

一七六

寬平六年十月十四日

正六位上行大錄奏忌寸經則

三十日、己丑對馬島正四位下和多都美神等ノ神位各一階ヲ進ム、

〔日本紀略〕

亭子院

九月卅日、己丑、是日授對馬島上縣郡正五位上和都美

名神、下縣郡正五位上平名神並從四位下、正四位下多久豆名神正四位上從

五位下小坂宿禰名神正五位下、正六位上石劔名神從五位下、

是月、遣唐使ノ發遣ヲ停ム、

〔日本紀略〕

亭子院

九月卅日、己丑、其日停遣唐使、

〔菅家文章〕

九奏狀

請令諸公卿、議定遣唐使進止狀

右臣某謹案、在唐僧中瓊、去年三月、附商客王訥等、所到之錄記、大唐凋弊載之具矣、更告不朝之間、終停入唐之人、中瓊雖區々之旅僧、爲聖朝盡其誠、代馬越鳥、豈非習性、臣等伏檢舊記、度々使等、或有渡海不堪命者、或有遭賊逐亡身者、唯未見至唐、有難阻飢寒之悲、如中瓊所申報、未然之事、推而可知、臣等伏願、以中瓊錄記之狀、遍下公卿博士、詳被定其可否、國之大事、不獨爲身、且陳款誠、伏請處分、謹言、

平神
多久豆
小枝宿禰
石劔神

道真ノ奏
狀
唐凋弊

翌年停ム
トノ説

寬平六年九月十四日 大使參議勸解由長管從四位下兼守左辨行式部權大輔春登管朝臣某

〔菅家御傳記〕

寬平

同六年九月十四日、上狀請令諸公卿、議定遣唐使進止、

同七年五月十五日、勅止遣唐使進、

〔拾芥抄〕

下本諸社部第一

遣唐使、寬平六年任遣唐使、菅紀不遂前途、無沙汰兩人、其後無沙汰、

○太政官、在唐ノ僧中瓊ニ報牒ヲ賜フコト、七月二十二日ノ條ニ、道真等ヲ遣唐使ニ補スルコト、八月二十一日ノ條ニ見ユ、

寬平六年九月是月

一七七

寛平六年十月一日五日

十月庚寅朔

一日庚寅旬儀

〔日本紀略〕

亭子院

十月一日、旬、不奏音樂、

五日甲午、左右檢非違使廳ヲ定メテ、毎日政ヲ行ハシム、

〔政事要略〕

六十一 檢非違使 雜事上

別當中納言兼左衛門督源朝臣光宣、近者囚徒滿獄、科決猶遲、或所犯是輕、禁囚日久、或本罪既重、待斷終身、獄官之道理不可然、因之去年十月五日、須定左右檢非違使廳、每日行政之狀已畢、○下略、寛平七年二月二十一日、廳宣全文ハ其條ニ收ム、

○重ネテ左右檢非違使廳ニ令シテ、毎日政ヲ行ハシムルコト、七年二月二十一日ノ條ニ見ユ、別當源光等、新補官人ノ加階ヲ奏請スルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔政事要略〕

六十一 檢非違使 雜事上

檢非違使

請被特授六位官人等事

(在左)右衛門少志正七位下(水)氷車貞椀

樂ヲ奏セ

囚徒獄ニ
滿チ科決
遲滞ス

七位以下
ノ新補官
人ニハ特
授ニ六位
ヲ

勅符ヲ賜

一七八

府生正七位上當世宿禰基宗

右衛門少志正七位下惟宗朝臣善經

右謹檢案内、七位已下者補檢非違使之日、特授六位、望請、依承前例、將被特授、謹請、

寛平六年八月十一日

右衛門權佐源朝臣當時

左衛門權佐源朝臣唱

別當中納言兼左衛門督源朝臣光

爲存古事、載件文、

六日乙未、大宰府、新羅ノ賊船退去ノ由ヲ奏ス、

〔日本紀略〕

亭子院

十月六日、乙未、大宰府飛驒使奏、新羅賊船退去之由、同日

給勅符於彼府、

○大宰府、新羅賊擊破ノ狀ヲ奏スルコト、九月十九日ノ條ニ、大宰府、壹岐ノ官舎討賊ノ際ニ燒亡セシ狀ヲ奏スルコト、七年九月二十七日ノ條ニ見ユ、

權律師豐藝寂ス、

寛平六年十月六日

一七九

寛平六年十月八日 十日 十八日 二十六日

一八〇

〔僧綱補任〕〇二 興福寺本 權律師豐藝 寛平五年十月十一日任花嚴宗、已

講勞〔深書〕七十三、同六年十月六日入滅〔深書〕七十四、〇三會定一記〔深書〕十一月二作ル、

〔維摩會講師研學豎義次第〕〔仁和〕三年、丁未、講師豐藝〔深書〕年六十七、藏冊五、

八日、丁酉、筑前從一位勳八等田心姫神等ニ勳七等ヲ授ク、尋テ又、勳六等ヲ授ク、

〔日本紀略〕〔亭子〕院 十月八日、丁酉、授筑前國宗形郡從一位勳八等田心姫神、

市杵島姫神湍津姫神並勳七等、

市杵島姫神湍津姫神高階忠峯依ルノ解狀ニ

十一月五日癸亥授筑前國從一位勳七等宗像大神勳七等〔六カ〕依左大弁高階真人忠岑之解狀也、

十日、己未、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學豎義次第〕〔寛平〕六年、甲寅、講師三修〔深書〕年六十六、藏冊七、〔去書〕法相宗、東大寺、〔菅野氏、左〕請京人、本東

寺供僧眞 研學增泰〇三會定一記同ジ、

十八日、丁未、皇太子、霜菊ヲ天覽ニ供セラル、

〔日本紀略〕〔亭子〕院 十月十八日、丁未、皇太子〔致仁親王〕殖霜菊於丹墀、奉覽天皇

二十六日、乙卯、律師常全ヲ少僧都ニ任ズ、

詩題

〔僧綱補任〕〇二 興福寺本 律師常全 十月廿六日轉任小僧都〔少〕〔深書〕八十一、

是月、公宴、

〔日本紀略〕〔亭子〕院 十月十八日、丁未、其日公宴、賦冬日殘菊、

寛平六年十月是月

一八一

寬平六年十一月一日三日十一日

十一月己未朔

一日己未、日蝕、

諸司廢務

〔日本紀略〕

亭子院

十一月一日己未、日有蝕之、諸司廢務、

〔本朝統曆〕

六

十一大朔己未、午三、日蝕、十一分弱、巳三、未一、

三日辛酉、地震、

〔日本紀略〕

亭子院

十一月三日辛酉、巳二剋、乾方地震如雷、

十一日己未、畿内、近江、紀伊ノ諸國ヲシテ、祈年月次ノ兩祭ヲ敬祀セシム、

〔類聚三代格〕

一 祭并幣事

太政官符

應二月祈年、六月十二月々次祭、國司一人率禰宜祝部等、向神祇官、受取幣

帛物事

右可受取幣物如法慎祭之狀、去年三月二日、○本條下符五畿内七道諸國已畢、今聞、國司緩怠不勤、祝部疎略無慎、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、國之大事、莫過祭祀、不守符旨、怠在主司、須畿内并近江紀伊等國、選國司掾目、若史生品官之中、謹厚恭敬者一人充使者、率禰宜祝

國司緩怠

祭祀八國ノ大事

國司ヲシテ神祇官ニ向テ幣帛ヲ受取ラシム

宿衛ト稱シテ吏務ヲ怠ル

部等、向神祇官受取幣帛物、即便每社、如法慎祭、々畢之狀、差使言上、若致闕失、殊處科法、又其見參祝部等交名者、前祭一日、使者等進官、事據祈福、不得乖違、自今以後、立爲恒例、

寬平六年十一月十一日

郡司所帶ノ左右近衛、門部、兵衛等ヲ解却セシム、

〔類聚三代格〕

七 郡司事

太政官符

應解却郡司所帶左右近衛門部兵衛等事

右百里之任、衆務所繫、而或郡司偏稱宿衛、有妨公事、准之政途、理不可然者、(所カ)中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、宜不論異能無才、且解却、且言上、但擬用之輩、隨國司申、登時解退、曾不停滯、適令分憂之吏、頗得施治之便、

寬平六年十一月十一日

三十日、未_子、成解由ヲ得ザル官人ノ本罪ヲ斷ゼシム、

〔類聚三代格〕

十二 斷罪贖銅事

寬平六年十一月三十日

寬平六年十一月三十日

一八四

太政官符

應斷未得解由人所犯本罪事

右檢交替式未得解由内外官人犯用借貸可依法斷罪天長二年五月廿七日條制已立而垂制之後寬縱不行官物減耗大概由斯今諸國不與解由狀所載負累彼此不同或欠失千計物既入己或無實万數皆在民身尋其犯過輕重相殊而俱拘解由不許叙用論之公途實乖折中左大臣宣奉勅宜仰諸司依式行之彼負累之倫自知廉耻之節者事須内外諸司所申不與解由狀勸解由使勸判訖刑部省待使局送斷其犯罪然後更付使局令奏其餘徵物奪祿等皆如舊例

寬平六年十一月卅日政事要略同ジ

諸國百姓等王臣家人ト稱シテ部内ヲ擾亂スルヲ禁ズ

〔類聚三代格〕十二 禁制事

太政官符

應禁斷諸國百姓稱王臣家人騷擾部内事

右舍人帳内資人之外託仕官家一切禁斷去寬平三年九月十一日新制已立

寬平三年ノ新制

×六中

猾民ノ濫

蔭贖

旬毎ニ巡察ス

寬平六年十一月卅日

檢非違使ヲシテ大井、淀、山崎、大津等ノ非違ヲ巡察セシム

〔政事要略〕六十一 檢非違使 糺雜事 上

右大臣宣奉勅檢非違使每旬巡察大井、與度、山崎、大津、□□等非違者

寬平六年十一月卅日

左衛門少尉橘在公奉

寬平六年十一月三十日

一八五

寬平六年十二月一日五日十一日十五日

十二月大己丑盡朔

紫宸殿ニ御ス

一日己丑、番奏アリ、

〔日本紀略〕院亭子 十二月一日、天皇御南殿、有番奏、

五日癸巳、檢非違使七人ヲ置ク、

〔日本紀略〕院亭子 十二月五日、癸巳、暫置檢非違使七人、

十一日己亥、月次祭、神今食ヲ停ム、

〔日本紀略〕院亭子 十二月十一日、神今食、依真言院穢停止、

〔西宮記〕院亭子 十一月月次神今食 寬平六十二、真言院西方有死人、仍止祭云々、

○撰集秘記同シ、

十五日癸卯、除目、

〔公卿補任〕四

參議從四位上源貞恒 十二月十五日兼大藏卿、

從四位下菅道（寬） 十二月十五日兼侍從、

〔古今和歌集目錄〕庶女 陸奥○中略

葛直者○中 寬平六年十二月任石見權守○日、關ク、

橋葛直ノ傳

○橋葛直ノ事蹟、便宜左ニ合敘ス、

〔古今和歌集目錄〕庶女 陸奥一首雜下、

橋葛直女 葛直者、相模守從四位下真直一男、貞觀十年正月補藏人、五月依

病解任、十八年正月七日敍從五位下、元慶四年十月任宮内少輔、五年任大

和介、

〔尊卑分脈〕橋氏

真直頭職 從四上、左兵衛佐、

相模守、左中將、

葛直因幡介、陸奥守、從五下、

女子陸奥、古今作者、

二十二日庚戌、僧綱ヲ任ズ、尋テ、少僧都益信ヲ法務ニ、聖寶ヲ權法務ニ補ス、

〔僧綱補任〕二 興福寺本 權律師聖寶 十二月廿二日任、三論宗、兼真言宗、

東大寺、真雅僧正弟子（宗世）、六十七、同廿九日爲法務（權勝力）、〇密宗血脈鈔同シ、東寺長者

聚、二十八日ニ作ル、

〔東寺長者補任〕延喜九年 長者僧正聖寶 （實本） 六年十二月廿三日任權律師、

寬平六年十二月二十二日

一八七

一八六

法務益信

六十七(三)、同廿九日兼權法務益信同、
四十五(七)、
〔血脈類集記〕二(第)、小四代源仁弟子、僧正聖寶、略、中裏書云、聖寶事、次第云、略、中寬平六年十
二月廿八日任權律師、同廿九日任法務裏書同、皇紀、
〔僧綱補任〕二(興福寺本)、小僧都益信、十二月廿九日爲法務、東寺別當(榮世)
十八、

〔東寺長者補任〕一、長者權少僧都益信、十二月廿九日任東大寺別當(行方)、兼
法務眞雅、同日聖寶律師任權法務延壽、東寺人相雙例始也、

眞雅ノ替
延壽ノ替

〔東寺長者雜自記〕城○山、一東寺長者任例事

東寺正權法務相雙初例

寬平六年十二月廿九日、益信僧正于時權、兼法務、同日、聖寶僧正于時、任權法
務、東寺同時權僧正、法務相雙例、以之爲始、

二十九日、日、渤海使伯耆二來著ス、

客徒百五
人

〔日本紀略〕院亭子、十二月廿九日、丙辰、渤海國客徒百五人、到著於伯耆國、

〔公卿補任〕延喜十三年、參議從四位下橘澄清(五十)、同六十二廿八伯耆權

掾、依渤海客
入觀也

是歲、弘福寺檢校僧都壽長寂ス、權律師聖寶ヲ同寺檢校ニ補ス、

〔東寺文書〕禮一之十二
○山城

太政官牒 弘福寺

聖寶

權律師法橋上人位聖寶

壽長死闕
ノ替

右大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、
件聖寶宜補彼寺檢校、傳燈大法師位壽長死闕之替者、寺宜承知、依宣行之牒
到准狀、故牒、

寬平(六)年□外從五位下行右少吏兼春宮少屬□

遣唐副使從五位上兼守右少辨行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣(長谷部)、○本書
弘福寺古文書同弘福寺古文書同、

太政官牒 弘福寺

官歷

傳燈法師位壽長年五十九、大安寺

當弘福寺別

右大臣宣、件法師宜補別當、傳燈大法師位貞操秩滿之替者、寺宜承知、依宣
行之牒到准狀、故牒、

寬平六年是歲

貞觀十八年九月七日 正六位上行左少史印南野臣宗雄（自覺）牒

從五位上守左中辨藤原朝臣（自覺）○本書二、太政官印十一類

〔金剛峯寺座主次第〕第一權少僧都壽長 宇多天皇御宇、去仁和五年、依中

院僧正之奏、始所被置座主職也、所謂壽長僧都者、最初之座主也、

〔眞言傳法灌頂師資相承血脈〕○上 山城

眞雅弟子 僧正眞然 付法二人

壽長○血脈類

〔本朝高僧傳〕八 淨慧二之五 紀州金剛峯寺沙門壽長傳

釋壽長、不詳其姓氏、自少登高野山、師事眞然僧正、其性高恢、足幹於事、然公器

重、入灌頂壇、授諸密印、然公及衰耄、倦僧事之勤、仁和四年、奏朝廷、以長任金剛

峯寺座主、此職以長爲始、

〔高野春秋〕二 貞觀十七年乙未三月廿一日、眞然律師、豫欲爲以此山屬入

室、壽長法師、（國史）其狀云、贈大僧正臨入定時、撰諸弟子言、眞然子獨在師跡之

念、故以附屬此山、實惠禪師加德、令建立之云々、因茲雖至長者、任僧正、常住本

山、時隨公請、汝夫努旃云云、（考、寬借法務長者記、亦如此、然山史異之、寬平元年、爾見矣、兩件雖取捨、蓋以壽長法師堪山職之器、欲

金剛峯寺座主

法系

眞然ノ弟子

眞然ヨリ野山ヲ囑セラル

山務ヲ執行ス

在職二十年

寬平八年寂ストノ說

令勤山事、（師イ）先示誨之、故加豫字、明非現然之附屬、寬平元年、然公八十餘歲、山務并兼、長者宜哉、令附屬此山、於壽長資、是以兩個大成一事、蓋去嘉祥二年、長子創造、勢州法雲寺、而住持廿六年、今已然、師同十八年丙申、春正月朔日、壽長有山家讓與之厚志、故招寄之、成此囑者也、

〔高野春秋〕三 寬平元年己酉三月廿一日、然師以此山全附屬壽長僧都、老

倦故也、（行年七）同月、壽長師任高野座主、同六年甲寅、春正月朔日、座主壽長朝

拜、（山務執行于愛廿个）同月日、權律師無空補座主、是依長師之執奏也、（壽長師、同八年丙辰月日、前座主壽長僧都入寂于中院、舊野史、失月日、）

權律師無空ヲ金剛峯寺座主ニ補ス、

〔金剛峯寺座主次第〕第二權律師無空（壽長大法師付法、或云、眞然之後爲檢校、） 寬平六年補座

主、

〔高野春秋〕三 春正月日、權律師無空補座主、是依長師之執奏、（壽長師、退位替、）

主、

年末雜載

神社、

〔石清水八幡宮記錄〕

○十山城八幡宮寺緣事抄 一宮寺諸任官先規濫陽事
觀清始權都維那 寬平六年、別當幡朗時、

佛寺、

〔寶幢院檢校次第〕

同代智證大師內供奉 增命大法師

寬平六年、西塔念佛始行之、

〔歷代編年集成〕

字多天皇

同六年甲寅八月十一日、常行堂始修引聲念佛、

彼引聲念佛者、慈覺大師於大唐清涼山謁法道和尚所傳給也、極樂法音也、歸朝之時、於船上三尊顯現、令傳成就如是也、節給矣、

〔山門堂舍記〕

西常行堂 別記云、寬平五年、奏宇多天皇、慈覺大師行法始行、

三世常住大念佛也、

略

○中寬平六年八月日、持念堂和尚猷憲之時、始行不斷念佛、

佛、○四大寺傳記、寬平七年二月作ル、

〔正倉院文書〕

一東南院文書 一櫃第三卷

太政官牒東大寺

應補任三綱事

傳燈法師位離邊年五十五、

右土座僧賢永秩滿之替、

傳燈法師位行安年六十一、

右寺主僧應如秩滿之替、

傳燈法師位神焉年卅三、

右都維那僧賢澄秩滿之替、

已上三人並專寺、

以前得彼寺牒傳件等三綱依例請補任如件者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、依請者寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

寬平六年八月十四日

左大史正六位上大原史氏雄

從四位下行在中辨兼木工頭美濃權守源朝臣奉行

奉行

以十月十三日到來、

別當○木書ニ、太政官印十四顆ヲ踏ス、

公家、

〔類聚符宣抄〕十使上日

史生巨勢有野

右被大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣云、件人遣後院使、經使之間給上日者、

寛平六年六月廿二日

少外記多治宗範 奉

後院使

諸家、

道真ノ五
十賀算

〔北野宮寺緣起〕

〔舊傳〕同六年九月、於吉祥院有知命之御賀〔實錄〕十月、

〔荏柄天神緣起〕

〔宇多〕寛平六年長月〔前田家本〕北野天ノ頃、門徒の人々、たかき

も賤も、吉祥院にあつまりて、五十の御としの悦の會、修せしめけるとき、法會の庭のおもを見やれば、わらうつは、きしたる翁の願文に砂金を取そへて、漸あゆみよりつゝ、堂のまへの案の上をきて、いふ事もなくしてにけさりぬ、あやしと思ひて、ひらきみれば、

傳聞、菅家門客共賀知命之年、弟子雖削跡人間無名世上、而數記淳教之風、多改惹昧之過、古人有言、無德不報、無言不酬、深感彼義、欲罷不能、故福田之地、捨此沙金、金以表中誠之不輕、沙以祈上壽之無涯、莫疑其人、可求其志、遠居北關

之以北遙增南山之和南、

とこそかゝれ侍けれ、其時少僧都勝延、その會の導師にて讚歎しき、かたしけなくも天子の修する所なり、希代の勝事とそ、ふるなの辨説をのへ給ける、〔北野緣起〕同、

公驗、

〔春日神社文書〕

〔十四大和〕

河内國石川郡龍泉寺氏人等謹申請、郡内在地刀禰司證判事、

合 在河内國石川郡

一寺邊敷地山内三百町

四至 東限檜嶺 南限手懸太輪

西限里田嶺 北限坂折小野田

一紺口庄水田等氏人祢領家地

在陸田里貳坪陸段 參坪柒段 肆坪伍段 玖坪伍段 拾坪捌段 拾

壹坪貳段 拾伍坪壹段 拾陸坪伍段 拾柒坪柒段 貳拾壹坪壹町

貳拾貳坪壹町 貳拾玖坪柒段 木屋戸里伍坪柒段 拾貳坪肆段 拾

寛平六年雜載

一九五

河内石川
郡龍泉寺
領ノ公驗

參坪伍段 下尻社里拾玖坪佰捌拾步 參拾坪貳段 參拾壹坪伍段大
下來堂太尻南北拾町

一山地壹處

在古市郡 石川兩郡 科長鄉

東限春毛谷 南限比女御墓 并御廟山西小河下太河千

西限太口太河 北限赤馬谷 并西尾太河千

度々女谷 仁賀谷 宮毛谷

在谷々水田 麻尾谷 葛根谷 九埋谷 并西四至內田畠共

先祖宗我
大臣所
領地

氏長者宗
岡公重

右謹檢安內件所々田畠海浦氏人等之先祖宗我大臣之所領也、而爲鎮護
國家、小治田宮御宇世丙辰冬十一月、被建立龍泉寺也、仍以所々領田、爲佛
取聖燈油并堂舍破壞修理新施入寺家之後、數百余年之間、更無他妨、而以
去承和十一年之比、氏長者宗岡公重、不慮之外、爲強盜被致害、住宅燒失之
次佛件寺調度文同、以燒失已了、回之殘氏人等注在狀、令訴申郡內在地方
禰司之時、仁道理有判證、但所々寺領等、其數未入記錄之紛失狀文之內、寺
家之大歎、尤莫過於斯、望請早郡內鄉村之刀禰并寺住所司三綱等、任實正

之理、被令證給者、將知正道旨、且又爲令氏之寺財公驗也、仍勒在狀、氏人等
謹言、

寬平六年三月五日

龍泉寺等宗岡 在判

宗岡 在判

宗岡 在判

俗檢校宗岡 在判

權俗別當宗岡 在判

執行俗別當宗岡 在判

氏人等之被訴申事、一々明白也、仍寺院所司三綱等加判、

僧 在判

僧 在判

都維那師法師 在判

寺主法師 在判

上座大法師 在判

件龍泉寺氏人等之解狀、於先例彼所々領地等、令寺領事顯然也、依在地刀

禰司等加署名之

俗證刀禰笠 在判

紀 在判

井原 在判

舍人 在判

河內 在判

郡加判

惣行事河內寺 (在判)

少行事河內忌寸 (在判)

依有刀禰等之證署國加判可寺領也

守藤原朝臣 (在判)

寬平七年乙卯

正月 大 己未 朔 盡

一日、己未、朝賀ヲ停ム、

〔日本紀略〕

醍醐天皇

延喜八年正月一日癸酉依雨雪止朝賀依寬平七年例也

〔西宮記〕

正月朝拜

延喜八年正月一日朝拜裝束如例因雨雪差藏人到(時平)大臣令

問先例大臣令奏(略)○中寬平七年晦雪停朝賀先例如前依寬平例停朝賀之(也)御記

五日、癸亥、齊世親王ニ乘車ヲ聽ス、尋テ、中納言藤原諸葛等ニ之ヲ聽ス、

〔政事要略〕

六十七男女衣服并糺雜物等事

使廳續類聚云寬平七年正月五日

宣旨无品齊世親王明日許聽乘車同九日宣旨中納言藤原朝臣諸葛民部卿藤原朝臣保則等宜聽乘車者親王公卿惣制乘車明經學生秦維興依輒乘車被斷其罪即處違式之科依多事具不載

○貴賤ノ乘車ヲ禁ズルコト六年五月十二日ノ條ニ見ユ、

十一日、己巳、除目、

〔公卿補任〕 四

寬平七年正月一日五日十一日

雨雪ニ依

乘車日ヲ限ル
乘車ノ學ヲ罰ス

參議從四位上藤有穂 中宮大夫正月十一日兼備前守

從四位下菅道（延） 左大弁式部大輔春宮亮勘解由長官遣唐大使正月

十一日兼近江守（止）長官餘官如元

從四位下源 希（延） 正十一兼播磨守

〔公卿補任〕延四九年 參議從四位下藤道明（延） 同七正十一越前少掾

〔公卿補任〕延四十一年 參議從四位上藤興範（延） 同七正十一轉少貳

〔公卿補任〕延四十九年 參議從四位上橘良殖（延） 同七正十一遠江守

從四位上源 悅（延） 同七正十一備前權介

〔公卿補任〕延四長元年 參議從四位上藤扶幹（延） 同七正十一信乃守

〔古今和歌集目錄〕源女 寵（源） 精者（源） 略（源） 寬平七年正月十一日任大和守

○源精及（源） 其女寵ノ事蹟便宜左ニ合敘ス

〔古今和歌集目錄〕源女 寵（源） 三首（別） 一首（戀） 一首（戀） 一首（戀）

〔古今和歌集目錄〕 大納言定孫從四位上行大和守精女也

精者貞觀十年正月七日敘從五位下（無） 十四年六月廿四日補侍從十八年

源精及（源） 寵ノ傳

世系

公利（源） 藤原

寵ノ訓

二月十五日任雅樂頭元慶三年正月七日敘從五位上四年正月十一日任太

宰（延） 小貳

〔尊卑分脈〕源 嵯峨

嵯峨天皇 源定

精 大和守從五下（延） 氏

浮（肥） 前守從五下後撰作者

女子（浮） 子歌人古今作者寵從五上

〔古今和歌集〕八 離別歌 常陸へまかりける時に藤原公利によみてつかは

しける 寵

朝なけに見へききみとし頼まねは思ひたちぬる草枕なり

〔奥儀抄〕五 人名 寵 女の名也或人云これはうつくとよむ也かの人かた

ちのめてたくて君のおほえにてはへりければうつくとはいかくかくへ

きと議しけるにおほえなるによりて寵とかきてうつくとはよむ也（延） とい

またくみいたしたる事也とそほりかはの右のおほいとはかたり給ひ

しと大宮のおほいとのあかし給ふとて故一條殿のおほせられける也

故將作もうつくとそ侍ける、又或人云、兼房朝臣は、かなにててうとかきたりけるとそありたりけん物を、

〔袋草紙〕 一 諸集人名不審

後拾遺

涼ハ女房名也、通俊卿自嘆云、古今集ノ女寵、向後人、定テ訓ニ迷テ、唯

稱涼歎云々、

〔古今聞書〕

離別歌第八

寵

御抄云、ヲホクウツクトイヒケリト書タル

説ニキコユレト、金吾ハ只寵トヨマレケレハ、其説ヲウケタリ、サルハ堀河

右大臣ウツクトヨマレケリトカキタル物アメレト、金吾マサシクチヨウ

ト申サレケリ、女也、ヲモウトモ、アイストモ、又アガムトモヨム、裏書云、寵、中

略 顯昭目錄ニハウツクト點テ祕藏ノ讀ト書リ、

○精ノ年貢違延ニ依リテ、罪セラル、コト、三代實錄仁和元年十月十

九日ノ條ニ見ユ、

二十二日、庚辰備中權掾三統理平等ヲ渤海客存問使ト爲ス、

〔日本紀略〕

亭子院

正月廿二日、庚辰、以備中權掾三統理平、明法得業生中原

連岳等、爲渤海客存問使、

○渤海ノ客伯耆ニ來著スルコト、六年十二月二十九日ノ條ニ、鴻臚館

ニ著スルコト、五月十一日ノ條ニ見ユ、

二十三日、辛巳二品秀良親王薨ズ、

〔日本紀略〕

亭子院

正月廿三日、辛巳二品秀良親王薨、年七十九

〔續日本後紀〕

一 天長十年三月、戊戌、以三品秀良親王爲中務卿、

二十四日 辛亥、以略 中 三品秀良親王爲彈正尹、

〔續日本後紀〕

四 承和二年正月、丁巳、三品秀良親王爲太宰帥、彈正尹如故、

〔續日本後紀〕

九 承和七年正月、甲申、詔授三品秀良親王二品、

〔續日本後紀〕

十一 承和九年正月、戊申、以略 中 二品秀良親王爲上野太守、

〔續日本後紀〕

十二 承和九年九月、己亥、以略 中 二品秀良親王爲上野太守、

○端史料ニ、是年七月十五日、依嵯峨帝崩服解、今日所復任也トアリ、

〔本朝皇胤紹運錄〕

嵯峨天皇

仁明天皇 母皇后嘉智子、內舍人贈太政大臣正一位橘清友女、

寛平七年正月二十三日

御母
御元服

没官ノ書
ヲ賜フ
橘奈良麻呂ノ藏書
ヲ賜フ

公田ヲ賜フ

荒廢田及
ヒ空閑地
ヲ賜フ

又

早ニ依リ
親王家ノ
池水ヲ百
姓田ニ瀝
グ

親王家
訴ニ依リ
田地ヲ返
付ス

〔秀良親王〕三品、寛平七年正月廿四薨、七十

〔類聚國史〕九十九卷、職分脈同、天長九年二月乙亥、秀良親王於冷然院加元服、

即授三品

〔日本紀略〕淳和天皇、天長九年二月乙亥、秀良親王拜賀禮了、錫宴賜祿、

〔五月庚申、没官書一千六百九十三卷、賜三品秀良親王、

〔續日本後紀〕三、承和元年十月辛巳、以昔被没官橘朝臣奈良麻呂家書四

百八十餘卷、賜彈正尹三品秀良親王、以外戚之財也、

〔續日本後紀〕五、承和三年五月甲子、賜信濃國小縣郡公田十二町、彈正尹

秀良親王、

〔六月壬戌、近江國荒廢田十七町、加賀國百九十町、備前國空閑地冊四町、賜三

品彈正尹秀良親王、

〔續日本後紀〕六、承和四年七月辛卯、加賀國石川郡荒廢田卅九町、賜三品

彈正尹秀良親王、

〔三代實錄〕十九、貞觀十三年五月廿二日、丁卯、勅控秀良親王家池水

渙城南、百姓田旱也、

〔三代實錄〕四十四、元慶七年十月十日、癸卯、攝津國河邊郡墾田一町三

段百六十步、返給二品秀良親王、班田使收公、親王家披訴、故返、

寬平七年二月一日九日

二月己丑朔

二〇六

一日己丑大學、典藥二寮ノ諸生、并ニ鴻儒、名醫ノ子孫ヲ薦舉シテ、諸國ノ博士、醫師ニ任用セシム、

〔類聚三代格〕五 官員并廢置諸國

太政官符

應大學典藥諸生苦住學舍、并鴻儒名醫子孫、依薦舉任諸國博士醫師事、右大納言正三位源朝臣能有宣奉勅、如聞年來諸國博士醫師從事之間、或非其人、今須內藥生年勞二歟一人之外、及大學典藥諸生、不經課試者、不得輒任之、唯苦住學舍、頗堪採用者、雖非得試、間以舉補、勿令遂作空歸之恨、又鴻儒名醫子孫、去親不遠、篤實無疑之輩、假令不得傳習祖業、特修舉狀、奏補權任、然則教授療治之職、無有非業、碩德名士之後、猶賴餘慶、

寬平七年二月一日

九日丁酉釋奠、

〔菅家文章〕五 詩五 仲春釋奠、聽講論語、同賦爲政以德、

君政萬機此一經、乘龍不忘始收螢、北辰高處無爲德、疑是明珠作衆星、

諸國ノ博士醫師其人ニ非ズ

道真ノ詩

東宮ノ御給

十一日己亥除目、

〔公卿補任〕四 延喜九年 參議從四位下藤定方卅五、同七二十一陸奧權少掾、

春宮御給

〔公卿補任〕四 延長八年 參議從四位上平時望、同七二十七周防權介、

十四日壬寅、敍位、

〔公卿補任〕四 延喜十九年 參議從四位上橘良殖五十、同七二月十四日從五位上、

位上

二十一日乙酉左右檢非違使廳ニ勅シテ、每日政ヲ行ハシム、

〔政事要略〕六十一 檢非違使雜事上一

別當中納言兼左衛門督源朝臣光宣稱、近者囚徒滿獄、科決猶遲、或所犯是輕、禁囚日久、或本罪既重、待斷終身、獄官之道理不可然、因之去年十月五日、須定左右檢非違使廳、每日行政之狀已畢、而猶遲緩、不肯行之、自今以後、宜依前件行其政、不可隔日、又須所行事條目錄、每日申之者、

寬平七年二月二十一日 民部權大輔兼右近衛少將在原弘景奉

囚徒獄ニ滿ツテ待ツノ間身ヲ斷ラズ終アルモ

寬平七年二月十一日十四日二十一日

二〇七

斷罪遲延ノ理由

左右相交テ科決セシム

寬平七年二月是月

二〇八

別當中納言兼左衛門督從三位源朝臣光宣奉勅囚禁之事待斷之間身命難存是則使等不相具之所致也自今以後五位及尉志府生等四員在者宜行其政不可具官須左右相交者也

寬平七年二月二十一日 民部權大輔兼左近衛少將在原弘景奉

○左右檢非違使廳ヲ定メテ毎日政ヲ行ハシムルコト六年十月五日ノ條ニ又政ヲ行フ毎ニ其狀ヲ申サシムルコト延喜十二年三月十一日ノ條ニ見ユ

是月、公宴、

〔日本紀略〕

院亭子

二月日、公宴賦春翫櫻花之詩、

詩題

三月 大戊午朔盡

三日、庚申、御燈、曲水宴、

〔日本紀略〕

院亭子

三月三日、庚申、天皇幸神泉苑、臨覽池水、令鷗鷺喫遊魚、觀

神泉苑ニ幸シ騎射ヲ給フ

騎射走馬

〔扶桑略記〕

字多天皇

三月三日、行幸神泉苑、

〔西宮記〕

御燈

同七年三月、御燈日行幸事、

〔江次第〕

三月

三日御燈事

寬平七年御燈日、行幸曲水宴、內藏寮供殿上男女房酒肴、

〔菅家文章〕

詩五

神泉苑三日宴、同賦煙花曲水紅應製、

道真應製ノ詩

水上煙花表裏紅、流盃欲把醉顏同、動枝動浪皆應惜、所以慇懃恐暮風、

五日、壬戌、北野ニ幸シテ、雉兔ヲ獵シ給ヒ、右近馬場ニ御シテ、走馬ヲ覽給フ、

〔日本紀略〕

院亭子

三月五日、壬戌、天皇幸北野、命獵徒取雉兔、御右近馬場覽

走馬

六日、癸亥、得度者受戒ノ期ヲ改定ス、

〔類聚三代格〕

年分度者事

寬平七年三月三日五日六日

二〇九

太政官符

應改定得度者受戒事

右少僧都法眼和尚位益信等奏狀稱謹檢貞觀七年三月廿五日格^{十一}傳故少僧都惠運牒稱檢舊例凡有得度者先與度緣次令入寺就中分度者經二箇年臨時度者經三箇年令練沙彌之行然後初聽受戒者今出格以降雖經卅餘年而未有遵行伏案物情二年練行三年練^行未明其由凡檢受戒儀軌沙彌等從師之後發心年久是一練行次於三師七證前受三歸五戒十善畢是二練行次將授大戒而問遮難之日簡捨根闕選留根機然後授之是三練行加以檢本律云授戒以後五年律學度者練行前後共具何必局限二三箇年又提謂經云凡說授戒緣三種所以一者調和四時寒陰故二者不違日月亢陽故三者令就年中穀實故受戒緣起兼由祈年禱請豐穰^農當在歲首望請度者受戒無別年分臨時不經數年練行即聽授戒已授之後一依律文令勤五年律學便於各本寺令課試所學文義具錄其由以經三司傳於不朽恒^恒三月內使畢授戒四月中結夏安居祈禱年穀誓護國家伏請處分者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請者若度者多數限內不授畢後年

貞觀七年ノ格

格制行ハレズ

三月同共授畢又五年律學之後三司勘知之由具注其狀即申送官

寬平七年三月六日

十二日^{己巳}弓場殿ニ御シテ射ヲ覽給フ、

〔日本紀略〕

^{亭子}院

三月十二日己巳天皇御弓場殿覽結射

十三日^{庚子}博多警固所ニ夷俘五十人ヲ增置シテ新羅ノ賊ニ備ヘシム、

〔類聚三代格〕

○^{十八}草祿本

夷俘并外蕃人事

太政官符

應加置博多警固所夷俘五十人事

右得^テ太宰府解^テ備^フ少貳從五位上清原真人令望牒稱檢案内太政官去貞觀十一年十二月五日符傳夷俘五十人爲一番且宛機急之備者而今新羅凶賊屢侵邊境赴征之兵勇士猶乏件夷俘徒在諸國不隨公役繁息經年其數巨多望請言上加置件數練習射戰將備非常者府加覆審所陳適宜謹請官裁者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請

寬平七年三月十三日

寬平七年三月十二日 十三日

二一一

夷俘ヲ以テ機急ニ備フ赴征ノ兵ニ勇士乏シ

寬平七年三月二十二日 二十六日

二二二

二十二日、己卯王臣諸家ノ私物ヲ出舉スルヲ禁ズ、

〔扶桑略記〕

二十二日 字多天皇

三月廿二日、官符云、應禁斷王臣諸家出舉私物事、

〔類聚三代格〕

八 出舉事

太政官符

應禁斷王臣家出舉私物事

天平九年ノ格

右檢天平九年九月廿一日格、勅如聞、臣家之稻貯蓄諸國、貸與百姓、求利交關、百姓窮弊、因斯彌甚、實是國司教諭違方、使致於此、朕甚愍焉、自今以後、悉皆禁斷、如有違者、以違勅論科罪、其物沒官、國郡官人、即解見任者、比年如聞、或王臣家出舉私物妨民農業、因茲租稅難收、調庸未進、蠹民害政、莫甚於斯、而國司阿容、曾不糾正、爲吏之道、何其然哉、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅、宜加下知、一切禁遏、若猶違犯者、沒物科罪、一如先格、

寬平七年三月廿三日

二十六日、癸未東宮、中納言菅原道眞ヲシテ、一時ニ詩十首ヲ賦セシメラレ、

尋デ又、詩二十首ヲ賦セシメ給フ、

〔菅家文章〕

詩五

七年暮春二十六日、予侍東宮、有令曰、聞大唐有一日應百

二刻ニシテ成ル

首之詩、今試汝以一時應十首之作、即賜十事題目、限七言絕句、予採筆成之、

二刻成畢、雖云九鄙、不能燒却、故存之、

〔頭書〕扶三
送春

送春不用動舟車、唯別殘鷓與落花、若使韶光知我意、今宵旅宿在詩家、

落花

花心不得似人心、一落應難可再尋、珍重此春分散去、明年相過舊園林、

夜雨

不看細脚只聞聲、〔助方〕暗助農夫赴畝情、通夜何因還悶意、尙書定妨早衙行、

柳絮

春雪紛々繞柳枝、見知老絮陌頭垂、詩人詠得詩情苦、莫使狂風第一吹、

紫藤

高閣藤花次第開、疑看紫綬向風廻、榮華得地長應賞、不放遊人任折來、

青苔

青苔滿地不棲塵、似展平頭碧錦茵、雨後風前宜染色、慙慙欲著上仙人、

鷓

寬平七年三月二十六日

二二三

寬平七年三月二十六日

二一四

自初出谷被人憐、春色盡時自默然、若有遺音長不絕、明年可奏早梅前、

鷺

梁頭展翅幾銜泥、一々將雛起暮棲、春盡先歸秋至日、涼風萬里羽毛齊、

黃雀兒

點檢中庭黃雀兒、春風便是可無私、報恩何必遭復處、銜得白環卽此時、

燈

挑盡蘭燈送五更、簷頭夜雨颯然聲、吟詩不得他言笑、染翰猶要暗更明、

東宮寓直之次、下令曰、去春十首、既知急捷、今取當時二十物、重要某不停滯、

卽奉令之後、不敢固辭、自酉二刻及戌二刻、篇數僅成、慎令旨也、經數十日、要

寫一通、近習少年、斷失三首、初不立案、無處尋覓、一十七首、備于實錄云爾、

風中琴

清琴風處響、恰似有人彈、始自青蘋起、還隨玉軫殘、誤雲驚別鶴、疑野拂幽蘭、感

興應無限、窓頭力意看、

竹

翠竹踈籬下、脩々翫碧鮮、雨中重影合、風裏晚聲傳、欲見龍鱗化、兼期鳳翼遷、寒

一刻ニシ
テ成ル

霜如可拂、萬歲表貞堅、

薔薇

一種薔薇架、芳花次第開、色追膏雨染、香趁景風來、數動詩人筆、頻傾醉客杯、愛

看腸欲斷、日落不言廻、

松

孤松呈勁節、幸許在中庭、久苦寒霜素、猶全細葉青、故山辭澗底、新地近仙亭、塵

尾應堪用、攀將奉執經、

酒

閑亭開酒甕、始覺聖賢心、竹葉攀多少、梨花酌淺深、開眉杯裏伴、促膝醉中吟、自

此知神用、誰愁到晚陰、

牡丹

不知何處種、喜見牡丹花、帶雨傾臨架、隨風引亞沙、豈攀塵客苑、當翫玉仙家、朝

詠藁邊立、悠々忘日斜、

古石

孤拳誰得轉、苔薛不知年、不過雲來觸、唯聞溜引穿、練應投綠水、功欲補青天、漱

寬平七年三月二十六日

二一五

齒幽人意相看太可憐

扇

團々紈素扇、隨手幾成功、一轉看孤月、頻搖得細風、逆愁秋早至、偏待熱先隆、取捨知時節、輕身業豈空、

(頭書)扶十
屏風

屈曲初知用、施來不畏風、質宜羅帳裏、功見玉筵中、人馬無來去、煙霞不始終、丹青知有巧、開合又西東、

(頭書)扶四
錢

家兄何利國、施用手、中繁榆莢重、輕種貨泉商、賈源貪夫身、有癖高士口、無言腐鏹誰應識、將令禮節存、

弓

鳥號得舊弓、業在弛張名、細月空驚質、清風自發聲、步中楊葉遠、雲外白間輕、文武隨時用、韜將表太平、

石硯

文人施器物、石硯玉簾前、一片心猶重、多情手自傳、道成分水劑、功遂染松煙、月

滿花開處吟詩得用專

筆

學業何爲重、纖鋒用不輕、崩雲毫末急、垂露管中清、豈見焚無意、誰知格滅聲、願將羊牲質、良史表嘉名、

碁

手談幽靜處、用意興如何、下子聲偏小、成都勢幾多、偷閑猶氣味、送老不蹉跎、若得逢仙客、樵夫定爛柯、

鼓

八音調雅樂、鳴鼓自堪聞、見器驚春氣、疑雷撥夏雲、曲成隨舞舉、聲引任歌分、小大知全節、何時奏聖君、

蜘蛛

微蟲猶有巧、結網自含情、稟氣安身小、隨風轉質輕、簷前寬得地、籬上暫全生、萬物皆如是、應知造化成、

壁魚

白魚浮紙上、游泳九流中、繞軸高低去、隨書遠近通、豈嫌漁父業、唯妨學人功、若

得風前舉鱗飛道豈空

○道真、東宮ノ殿前ニ於テ、薔薇ヲ見ルノ作、便宜左ニ合敘ス、

〔菅家文章〕

詩五 (寬平七年) 感殿前薔薇一絶 東宮

相遇因緣得立身、花開不競百花春、薔薇汝是應妖鬼、適有看來惱殺人、

是月、除目、

〔公卿補任〕

昌泰二年 (寬平七年) 參議從四位上藤定國 同七三二十兼春宮大進

〔公卿補任〕

延喜十七年 參議從四位上良峯衆樹、五十(寬平)同七三廿八兼春宮

主馬首、

〔三十六人歌仙傳〕

從四位上行右兵衛督藤原朝臣敏行 (寬平)七年三月兼權亮、

公宴、

〔日本紀略〕

院亭子 三月其日、公宴、月夜翫櫻花爲題、

〔菅家文章〕

詩五 (寬平七年) 月夜翫櫻花、各分一字、應令一首、得開、

應因兔魄見花鰓、更恐春腸過九廻、芳氣近從階下起、莫言天上桂華開、

詩題

道真應令ノ詩

菅公ノ詩

光孝天皇ノ事皆承和ノ御代ニ據ラセラル

清涼殿前ノ松ト竹

是春、文人ヲ召シテ、詩ヲ賦セシム、

〔菅家文章〕

詩五 (寬平七年) 春惜櫻花應製一首 并序

承和之代、清涼殿東二三步、有一櫻樹、々老代亦變、代變樹遂枯、先皇(光孝)馭○文本粹御ニ曆之初、事皆法則、承和、特詔知種樹者、移山木備庭實、移得之後、十有餘年、枝葉惟新、根荖如舊、我君每遇春日、每及花時、惜紅艷以敘歡情、翫薰香以廻恩眄、此花之遇此時也、紅艷與薰香而已、夫勁節可愛、貞心可憐、花北有五粒松、雖小不失勁節、花南有數竿竹、雖細能守貞心、人皆見花、不見松竹、臣願我君兼惜松竹云爾、謹序、

春物春情更問誰、紅櫻一樹酒三遲、綺羅切齒相同色、桃李慙顏共過時、欲裏飛香憑舞袖、將纏脆帶有遊絲、何因苦惜花零落、爲是微臣職拾遺、

四月小 盡 朔

七日、甲午擬階奏、

〔西宮記〕

四月 擬階奏

寬平七年四月七日、大納言源卿執奏、依雨儀不著宜陽殿、

二省輔立宜陽殿西廂北上第二間、西面北上、○前田家卷子本及ビ大永鈔本ヲ以テ校正ス、

十六日、卯齋院君子內親王御禊、尋テ野宮ニ移ラセラル、

〔日本紀略〕

院 亭子

四月十六日、癸卯、賀茂齋內親王禊鴨河、入紫野院宮、〔主カ〕卜部豐宗、泥醉墜馬、終以死去、

○齋院君子內親王ノ宮内省ニ移ラセラル、コト、五年六月十九日ノ

條ニ見ユ、

二十一日、申 戊參議從四位上藤原保則卒ス、

〔日本紀略〕

院 亭子

四月廿一日、參議從四位上民部卿藤原保則卒、

〔公卿補任〕

四

參議從四位上藤保則 民部卿、四月廿一日卒、〔在官〕七十一、

〔公卿補任〕

四

參議從四位上藤保則、〔六〕十中納言從三位乙叡孫、左兵衛佐

正〔四〕五下貞雄男、〔母〕左中弁從四下、

〔下〕安倍弟富女、

齊衡二三、〔月〕任治部少丞同三正丙辰、民部大

丞、天安二、兵部少丞貞觀元三廿一轉大丞、同五二十式部少丞、同八正七從

五下、同十三日備中權介、同十三正七從五上、〔治國〕同廿九日備中守、同十六正十五備前權守、同十八正十四右衛門權佐、同二月十五日民部大輔、同十九正十五右中弁、元慶二五四正五位下、同日兼出羽權守、同三正十一轉守、同五七十六兼播磨權守、同六正七從四下、同二月三兼讚岐權守、仁和三二二任伊守、八月廿三日任太宰大貳、同十一月十七日從四上、寬平三四十一左大弁、同四年四月廿八日任參議、左大弁如元、同五年正月十一日兼近江權守、二月廿二日兼民部卿、去弁、〔六一〕

〔尊卑分脈〕

藤氏 武智鷹孫

貞碩

保則

參議、民部卿、右大弁、大貳、兵部、式部等丞、母、左中弁、安倍弟富女、寬平七四廿一薨、七十一、

萬緒

右中弁、從五下、母、

清貫

○事蹟略ス、或本云、清貫弟云々、

〔公卿補任〕

四

參議從四位下藤清貫、〔四〕十參木保則朝臣四男、母右

中將在原業平朝臣女、

〔藤原保則傳〕

○上文

旱田畝盡荒、百姓飢饉、道殣相望、群盜公行、邑里空虛、英

仁政ヲ施
加フ賑貸ヲ
田園闢ケ
戸口増殖
ス

備前權守
ニ轉ズ

吏民畏愛
シテ父母
ト曰フ
吉備津彦
神ニ雨ヲ
祈ル

賀哲多兩郡、在山谷間、去府稍遠、郡中百姓、或劫掠相殺、或逋租逃散、境內丘墟、無有單丁、前守朝野貞吉、以苛酷而治之、郡司有小罪者、皆著鉗鉢、人民犯纖毫者、捕案殺之、囚徒滿獄、仆骸塞路、公到任之初、施以仁政、宥其小過、存其大體、放散徒隸、遍加賑貸、勸督農桑、禁止遊費、於是百姓極負、來附如歸、田園盡闢、戶口殷盛、門不夜扃、邑無吠狗、府藏多蓄、賦稅倍入、遂受租稅返抄卅四箇年、受調庸返抄十一箇年、自古以來、未嘗有此類也、十三年、敍從五位上、即遷備前介、十六年、轉權守、公在備前、德化仁政、一如在備中時、凡厥僚下、若有奸賊者、曾無所發明其咎、即竊於間處相語云、君久疲學官、初得此官、必當立其廉節、勉取榮譽、豈可思滯一州小吏乎、然而上資父母之供養、下給妻子之飢寒、撓性屈心、受此濁穢、斯皆貧窶之憂、羈累善人、僕有薄俸、冀隨君所用、以資給之、勿犯官物而已、即分賜其俸、不限多少、於是耻格之化、如風靡草、吏民畏愛、號曰父母、備前備中兩國界上、有吉備津彦神、若國有水旱、公即祈禱、必致感應、速於影響、若境中有奸者、立降冥罰、嘗此神形見語、公云、感公德化、深以欣服、冀也助公為治、終此善績、由是治化兩國、前後年、歲頻豐穰、百姓和樂、時安藝國偷兒、遮險劫盜、備後國調絹冊正逃走、入草道、宿備前國石梨郡旅舍、盜語主人翁云、此國太守化跡何似、

竊盜ヲ悔
悟セシム

德化人神
ヲ感ゼシム
兩備ノ民
別ヲ惜ム

郡司等白
米二百石
ヲ贈ル

主翁語云、府君化民、專用仁義、一國之人、蓋為伯夷、恩信之感、自通神明、故國有奸濫者、吉備津彦神立降誅罰、及具語其治化本末、皆如實事、盜顏色大變、似有耻畏、終夜歎息、展轉不寢、向曉馳詣府門、叩頭自首云、小民無狀、略奪備後國官絹冊正、改過服罪、願賜生命、公召盜語云、汝知向善、遂非惡人、即賜米糧、封賊絹付盜、移備後國、僚下皆云、此奸盜之人也、恐不達彼國、公云、此人已改心歸誠、豈更有變其志乎、不聽、於是盜得移文、令送備後國、時備後守小野喬季、且悅、即放遣盜人、自詣備前、拜謝庭中、凡厥德化、感服人神、皆此類也、十七年秋、解歸京、兩備之民、悲號遮路、里老村媪、頭戴白髮者、各捧酒肴、拜伏道邊、公謂老人之心、不可違失、為之留連數日、相次競到、不可遏止、公以為若常如此、必引日月、仍竊藏小舟、輕棹解纜、時與從者相期、有未到者、仍暫泊和氣郡方上津、於是備前郡司等、聞公無糧儲、藏船白米二百石、奉進泊處、公謝云、無甘棠之遺愛、忝故人之厚贈、雖然、篤志深密、何不嘉納、即受之、無所辭、郡司等初思、公性過廉、必不受此贈、及聞此報、大悅、歸去、頃之、公遺國講師書云、自次此泊、舟中頗有恠異、風浪難測、憂念誠深、望率僧徒、來會津頭、相共祈念海行之穩焉、於是講師率國分僧等、馳詣泊處、公語云、願諸僧各讀誦般若心經一遍、功德足矣、諸僧承旨、即讀誦

悉ク米ヲ
講讀師等
ニ施與ス

寬平七年四月二十一日

二二四

蝦夷反亂
秋田城ヲ
燒ク

官軍敗北

心經畢、卽以此米二百石、悉充誦經布施、夜中飛帆、出去不顧、十八年正月、任右衛門權佐、兼檢非違使、公語所親云、昔者帝堯之民、皆可比屋而封之、時皐陶以大賢爲獄官、若有疑罪、則令獬豸決之、豈有枉濫之罪○以下十八行跨馬マデ、寺緣起集ヲ以テ補フ、乎、亦所用者象刑也、無慘毒之科焉、豈有怨酷之人乎、然而論者以爲英六之封不繼者、此皐陶治獄之咎、況今末代澆薄人多、何誅罰之間、動失兩造、縱有惻隱之情、必成子孫（脱ッラン）再三辭讓、遂不就職、無幾遷民部大輔、民部省例以商布貴賈諸國米、以充官人厨用、名爲交易、實是箕歛、諸國百姓爲之愁苦、公在職一年、遂無一飯、元慶元年、任在右中辨、二年二月、出羽國蝦夷反亂、攻秋田城（下五）之司介良岑、近者不能城守、脫身伏竄於草莽之間、賊放火燒城、軍資器械一時蕩盡、逆徒蟻聚、分兵圍諸城、國守藤原興世、棄府城逃走、時太政大臣昭宣公攝政、乃勅陸奥國發兵三千人、起援出羽國、於是陸奥守須大發國中得精騎千人、步兵二千人、其送鎧甲糧儲者將萬人、以大掾藤原梶長爲押領使、令與出羽軍討擊賊虜、出羽掾藤原宗行、文室有房、小野春泉等亦發國中步騎二千餘人、相共屯秋田河邊、時賊徒千餘人、乘輕舸隨流俄至、梶長等率兵對戰、天時大霧、四面昏暗、於是賊衆數百人、持兵歛至官軍後、同聲大門（四方）奔突官軍、々々大駭、狼狽散走、賊徒

基經ノ推
獎

小野春風
ヲ推舉ス

乘勢前後奮擊焉、官軍大潰、遂斬出羽國弩師神服貞雄、及兩國偏裨數十人、軍士被殺虜數百十人、軍實甲冑悉被鹵獲、遂相踏藉、死者不可勝數、文室有房被創殆死、小野春泉潛伏死人之中、纔得免害、藤原梶長深竄草間、五日不食、賊去之後、步逃至陸奥國、五月二日、兩國飛驒忽至、於是昭宣公大驚、與公謀事、語云、東方之將累長者、公辭謝云、身舊文吏、未嘗知跨馬引弓、非敢愛惜微軀、恐成朝廷之耻、昭宣公曰、自天智天皇時、藤氏代立、勳績朝所倚賴、方今身非伊周、忝攝冢宰、遭此寇亂、內慙外慙、瓜葛之義、君亦可願、悉（悉）盡智謀、勿爲謗讓、公曰、必不得已、可用愚計者、冀露肝膽、無有所隱、恐殿下不得能用之、昭宣公云、專意安付、遂無他腸、公曰、蝦夷內附以來、欲漸二百年、畏服朝威、無有寇逆、如聞秋田城司良岑近者聚歛無厭、徵求萬端、故疊怨積、怒致叛逆、夷種衆多、迎相合從、賊徒數萬、窮寇死戰、一以當百、難與爭鋒、如今之事者、雖坂將軍再生、不能蕩定、若教以義方、示以威信、播我德音、變彼野心、不用尺兵、大寇自平、昭宣公曰、善、公亦曰、今當以恩信化服夷狄、若群醜之中、猶有不馴服者、必可以兵威而臨之、前左近將監小野春風、累代將家、驍勇超人、前年頻遭讒謗、免官家居、願先令春風率精衆、示以朝廷之威信、然後以德招致、未歷數月、自應銷散、昭宣公大悅、其月四日、敕公

寬平七年四月二十一日

二二五

春風獨リ
夷軍ニ入
リ就命ヲ
宣ス

蝦夷信服
ス
津輕渡島
ノ夷亦内
屬ス
秋田城ヲ
再築シ舊
制ニ倍ス

爲正五位下、即以右中辨兼出羽權守、擢春風爲鎮守將軍、從五位下、及陸奧介、
從五位下坂上好蔭受公節度、公奉詔以後、數日進發、晝夜兼行、行路之間、飛驒
繼途、奏賊虜強盛、官軍頻敗、及城或失守、群隊陷沒之狀、時從騎十餘人、皆無不
褫魂奪氣、而公容色不變、曾無畏憚之意、既至出羽國、命春風、好蔭、各將陸奧國
精騎五百人、直入虜境、召其酋豪、宣以國家之威信、先是賊聞王師來討、率衆万
餘人、遮守險隘、春風少遊邊塞、能曉夷語、即脫甲冑、棄弓牟、獨入虜軍、具宣朝命、
皆如公意、於是夷虜叩頭拜謝云、異時秋田城司貪慾暴獷、谿壑難填、若毫毛不
協其求者、楚毒立施、故不堪苛政、遂作叛逆、今將軍幸以天子恩命而詔之、願改
迷途、歸幕府、於是競以酒食、饌饗官軍、其豪長數十人、相率隨春風、至出羽國府、
公即召見慰撫、賊亦盡返獻先所虜略生口及軍器、時有渠帥二人、不肯歸附、公
語諸豪長云、二虜不來、於汝心如何、豪長等俱陳云、殊自有謀、願暫垂寬假、後數
日、遂斬兩夷首以獻之、公即發使者撫恤餘種、自津輕至渡島、雜種夷人、前代未
曾歸附者、皆盡內屬、於是公復立秋田城、凡厥壘柵樓塹、皆倍舊制、三年、改權守
爲正守、右中辨如故、有勅暫留鎮撫之、此國民夷雜居、田地膏腴、土產所出、珍貨
多端、豪吏并兼、無有紀極、私增租稅、恣加徭賦、又權門子弟、年來求善馬、良鷹者、

基經ノ失
政

讚岐ノ治
績

大宰府ノ
政績

猥聚如雲、邊民愚朴、無知告訴、唯隨其求、不言煩費、由是隴畝之民、皆苦貧窮、
猾之輩、多致富溢、公施以朝典、教示百姓、嚴張憲法、勿令侵犯、若更有不法者、捕
而案之、由是百姓安堵、夷道清平、時陸奧國夷狄、有訴訟者、皆到出羽國而取決、
公初在兩備、專以仁惠而化之、及治出羽、更以威嚴以理之、吏民有罪、無有所宥、
當論者不能測其深淺、四年四月、依官符入京、時在朝卿相、皆賀公勳績、公辭謝
云、此皆朝威之所致、非愚略之有施也、是時天下皆以爲、公不勞一卒、平定大寇、
朝廷必當疏高爵、答其殊勳、而偏用公辭讓、遂無優崇之制、又良岑近者貪叨、
穢致此寇亂、而亦無懲惡之典、由是衆議、多譏昭宣公失賞罰之柄、公性樂靜默、
不好劇務、屢對昭宣公、固辭辨官、七月、任播磨守、辭不赴任、
日兼播磨權守、六年正月、敕從四位下、公曰、年既老矣、盍修功德、爲冥路之資、傳聞
讚岐國多倫紙、及能書者、當赴彼國、書寫修多羅阿毗曇等諸藏、二月、出爲讚岐
守、此國庶民、皆學法律、執論各異、邑里疆畔、動成諍訟、自公入境、人々相讓、如虞
芮之有耻心焉、秩滿歸京、隱居西山別墅、無復出仕之志、仁和三年二月、任伊豫
守、辭不赴職、八月、除爲太宰大貳、十二月、敕從四位上、公頻稱病、不肯就職、朝廷
屢加慰諭、強以發遣、公在鎮府、專以清靜而施化、故吏民感服、政化大行、先是姦

筑前筑後肥前八群盜ノ藪澤

寬平七年四月二十一日

二二八

俸米ヲ三國ニ施與シテ賊徒ヲ慰撫ス

天性廉潔

道眞ヲ評ス

猾之輩狼聚鎮西境內其筑前筑後肥前三國尤爲群盜之藪澤鄉閭騷擾道路隔絕人民有蓄積者皆被殺略行旅有資儲者(賊ヲシテ)無有令治前年府官及國司發兵捕殺凶黨彌熾不能禁止公初莅鎮衆人皆云宜多發軍士悉加鉏誅公曰吾聞此盜渠帥率非編戶之民皆是流浪之輩也或良家子弟逐衣食之利或舊吏僕從取婚姻之便寓居邊城猶如桑梓而比年不稔生產失利無賴之輩同惡相濟爭尋干戈赴爲賊徒之國之民大半爲盜今悉捕而殺之則里落之內聞而無人縱令有鄰家之警誰入城戍乎此輩未必懷凶狡之心多是爲飢寒被迫而已若施以恩賑自應食樾改音卽以其俸米遍賑贍三國深加慰撫各存生業於是盜徒大悅相語云府君以父母之情遇我々豈不盡孝子之志乎相率歸他(化カ)莫不守劔之夫寬平三年四月辟爲左大辨公被召入京之後未歷數月太宰府上奏云有新文アリ此間闕天性廉潔以身化物僚下有貪穢者推誠教訓若遂不悛者不與之接言語見其有一善則悅動顏色常稱譽推舉贊成其美又擇士採才有知人之鑒昔在備中時小野葛絃年少爲掾公稱曰若必當爲天下循良之吏又在讚岐時(實地)菅原朝臣代公爲守公竊語云新太守當今碩儒非吾所測知也但見其內志誠是危殆之士也後皆如其語凡厥獎鑒皆多此類也公年漸五十不近婦

晚年佛ニ歸ス般若經ノ義疏ヲ撰集ス

剃髮入道

人唯歸心內典尤熟空觀常談誦金剛般若經未嘗退倦卽撰集此經諸家義疏以爲一部究討其義莫不該通公清節沖虛心無廻(邪カ)蓋是練般若空無相之故也公未寢疾時忽語云死期將(至カ)何可終身於塵勞之中乎於(是カ)營一室於叡山東坂翌日夙興促駕起投山廬落髮入道晝夜念佛其後數月俄隨逝水啓體之日身無病痛屬續之時心不顛倒唯向西方念阿彌陀佛而已時賢驚公知天命僧徒感公得善報余初爲起居郎依元慶注記見東征之謀略爲備中介聞故老風謠詳西州之政績粗述所知成此實錄但世稱公德美老人之談不容口然而轉語浮詞不敢論著恐有口飭之疑損相公之美也昔者司馬遷著晏子傳遙羨報(報カ)鞭蔡伯諧作郭泰碑遂無慙德故叙此景行貞立志延喜七年季春一日文章博士善清行記之

〔菅家文章〕

詩三 路遇白頭翁○中

貞觀末年元慶始政無慈愛法多偏雖有旱災不言上雖有疫死不哀憐四千餘戶生荆棘十有一縣無爨煙適逢明府安爲氏(今之野州別駕○中略)更得使君保在名(今之豫州)刺史(保州)臥聽如流境內清春不行春々遍達秋不省秋々大成二天五袴康衢頌多黍兩岐道路聲愚翁幸遇保安德無妻不農心自得五保得衣身甚溫四隣共飯

寬平七年四月二十一日

二二九

寬平七年四月二十一日

二三〇

口常食樂在其中斷憂憤心無他念增筋力不覺鬢邊霜氣侵自然面上桃花色

○下略全文ハ二年
是春ノ條ニ收ム

名臣

〔二中歴〕十三人歴 名臣 保則宰相

〔官報〕大正四年十一月十日 號外

贈從三位

故從四位上 藤原保則

特旨ヲ以テ位階追陞セララル

故從四位上 藤原保則

五月大 朔

一日丁巳 日食

諸司廢務

〔日本紀略〕亭子 五月一日丁巳日蝕諸司廢務

〔本朝統曆〕六 五大朔丁巳巳五 日蝕一分強巳三

十一日丁卯 是ヨリ先渤海大使裴頹等鴻臚館ニ著ス是日豐樂院ニ行幸アラセラレ渤海使等ヲ召シテ饗ヲ賜ヒ位階ヲ授ケラル

鴻臚館ヲ
巡檢ス

〔日本紀略〕亭子 五月四日巡檢鴻臚館

七日癸亥渤海客來著鴻臚館

十一日丁卯天皇幸豐樂院賜饗於客徒兼敘位階

○渤海客ノ伯耆ニ來著スルコト六年十二月二十九日ノ條ニ見ユ

十四日庚午 渤海大使裴頹等ヲ朝集堂ニ饗ス尋テ參議菅原道真ヲ鴻臚館ニ遣シ酒饌ヲ賜フ

〔日本紀略〕亭子 五月十四日庚午於朝集堂賜饗於客徒

十五日辛未參議左大辨菅原朝臣（道真）向鴻臚館賜酒饌於客徒

十六日壬申渤海客徒歸去

渤海使歸
國ス

寬平七年五月一日十一日十四日

二三一

寬平七年五月十四日

二二二

〔扶桑略記〕

宇多天皇

五月十五日（正）唐使入朝

〔北野天神御傳〕

家○前田

今年（寬平七年）渤海大使裴頌重來朝別奉勅與式部少輔紀

道真ノ門
生從フ

長谷雄到鴻臚館聊命詩酒唱和往復遠及數篇日暮賦餞別詩門生十人著麴

〔菅家文章〕

詩五

（寬平七年）

客館書懷同賦交字呈渤海裴令大使自此以後七首予別奉勅旨與吏部紀侍

道真渤海
使ト唱和
ス

尋思執手昔投膠拜觀慇懃不暫拋雪鬢同年分岸老風情一道望雪交皎駒再

食場中藿儀鳳重歸閣上巢借問高才非宰相揚雄幾解俗人嘲

答裴大使見誄之作本韻

別來二六折寒膠今夕溫顏感豈拋持節猶新霜後性忘筌仍舊水中交恩光莫

恨初無禍聖化如逢古有巢相勸故久何外事只看月詠望風嘲

重和大使見誄之詩本韻

知命也曾讀易爻衰顏何與少年交成功宿昔應攀桂求類今宵幾拔茅聲價重

輕因道舉文章多少被人抄自慙往復頻誄贈定使魚蟲草木嘲

和大使交字之作次韻

副使

占明何更索瓊茅傾蓋當初得素交森々任他踰北海皤々定是養東膠鷄鷄自
愧群霜鶴珊瑚當嫌對竹筍欲以浮生期後會先悲石火向風敲

客館書懷同賦交字寄渤海副使大夫

珍重孤帆適樂郊雲龍庭上幾苞茅度春欲見心如結專夜相思曉不交寶禮來
時懷土鴈旅人歸處泣珠蛟暗知器量容衡霍愧我區々小斗筲

和副使見誄之詩本韻

遠客光榮自近郊羞君翰苑遇菅茅世間風月雖同道別後蕭朱定絕交材器好
承多雨露寵章祇怕幾魚蛟不須眉面相露接推料應嫌我瑣筲

夏日餞渤海大使歸鄉各分一字探得

初喜明王德不孤奈何再別望前途送迎每度長青眼離會中間共白鬚後紀難
期同硯席故鄉無復忘江湖去留相贈皆名貨君是詞珠我淚珠

二十四日庚辰神泉苑ニ幸シ給フ

〔日本紀略〕

亭子

五月廿四日庚辰天皇幸神泉苑

寬平七年五月二十四日

二二三

寛平七年六月六日二十日

六月丁亥朔盡

二三四

六日壬辰大和介藤原光善ヲシテ、群盜ヲ捕ヘシム、

〔日本紀略〕院亭子 六月六日、壬辰、令大和介藤原光善捕群盜、

二十日丙午致仕中納言從三位藤原諸葛薨ズ、

〔日本紀略〕院亭子 六月廿日、丙午、致仕中納言藤原諸葛薨、年七

〔公卿補任〕四 中納言從三位藤原諸葛、七十、正月上表致仕、六月廿日薨、頭五

年、參木中將十三年、中納言五年、

〔一代要記〕前官 多天皇 中納言藤原諸葛 從三位、寛平七年四月致仕、同六月

六日逝、年七十、

〔公卿補任〕 參議從四位上藤原諸葛、五十、右大臣三守孫、侍從々五位下有統一

男、母修理大夫從四位下橘永繼女、從五位下、承和十二正十一、但馬介、正月、

藏人、仁壽三正七、從五下、齊衡二正十五、加賀權介、貞觀二十一、廿從五位上、同

三二、廿五、中務少輔、四月九日、少納言、十一月十六、從五上、兩度、同八三、廿三、正

五下、同十三、正七、從四下、三月十一日、兵部大輔、同十五、正十三、備中權守、同十

七九、月、藏人頭、同十八、正七、從四上、十二月廿六日、左中將、元慶二正十一、備中

官歴

世系

權守、中將、同三年十月廿三日、任參議、左中將、備中權守等如元、元職、同五年十
二月十三日、兼右衛門督、同六年正月七日、正四位下、二月三日、兼近江權守、督
元、仁和三年正月、兼越前權守、二月二日、兼美乃權守、五月十三日、遷備前權守、
上三、以寛平三年三月十九日、任中納言、同日、敘從三位、超二人、上四、以

〔尊卑分脈〕藤氏 眞作孫

有統

諸葛頭 中納言、從三、參議、加賀守、左中將、寛平七、六、廿一、薨、七十、

母修理大夫從四位下橘長嗣女、從四下、數子、

玄上ハム 母致仕宮内卿從三百濟主勝義女、

善行藏 母內藏大允從五下、

玄致母 伊勢掾

末業母 少納言從五上、

〔玉葉〕十 承安二年十一月廿日、中、語云、陽成院暴惡無雙、二月祈年祭以

前、自拔刀殺害人云々、依如此事、昭宣公奪天子位、授小松天皇也、于時諸卿出

異議、事不一揆、融大臣深有此心、仗議大濫吹、爰參議諸葛懸手於劔柄、見御眼

劔ヲ按ジ
テ異議ヲ
排ス

寛平七年六月二十日

二三五

寬平七年六月二十一日 二十六日

二二六

云、今日事偏可隨太政大臣語、若於出異議之人、忽可誅之云々、于時諸卿止異議、相率參（光孝）小松親王第奉迎之云々、

〔體源抄〕

三之 皇帝破陣樂略○中

序一帖有三帖、初半帖拍子十六、中半帖拍子四、後半帖拍子十、

此家ニ習所ハ如此、而從五位下尾張連濱主傳云、コノ舞ノ序、ハジメハ四十

拍子也、シカルニ遣唐時、儂生還本國時、忘末八拍子ヲタリシニヨツテ、承和

御時、諸葛中納言奉勅序一帖拍子三十、以十六拍子爲半帖定畢、

○諸葛ノ勅ヲ奉シテ、紫宸殿ニ琴ヲ彈メルコト、三代實錄元慶八年十

月朔及仁和二二年十月二日ノ條ニ見ユ、

二十一日、丁未左近衛府ニ御シテ、相撲ヲ御覽アラセラル、

〔日本紀略〕

亭子

六月廿一日、天皇御左近衛府、奏音樂、又有相撲興、

二十六日、壬子大和丹生川上雨師神社ノ界地ニ狩獵スルヲ禁ズ、

〔類聚三代格〕

一 神社事

太政官符

應禁制大和國丹生川上雨師神社界地（ナシイ）狩獵事

禁獵地ノ
四至

四至、東限鹽勾、南限大山峯、
西限板波瀧、北限猪鼻瀧、

國栖戸神
地ヲ奪妨
ス

右得神祇官解僞、大和神社主大和人成解狀僞、別社丹生川上雨師神祝禰
宜等解狀僞、謹檢名神本紀云、不聞人聲之深山吉野丹生川上、立我宮柱、以敬
祀者、爲天下降甘雨、止霖雨者、依神宣造件社、自昔古イ至今、奉幣奉馬、仍四至之内、
放牧神馬、禁制狩獵、而國栖戸百姓并浪人等、寄事供御、奪妨神地、屢觸汗穢、動
致咎祟、爰祝禰宜等、依稱供御、不敢相論、既犯神禁、何謂如在、望經言上、嚴被禁
制者、所陳有實、仍申送者、官依解狀、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大
將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、宜下知彼國、令加禁制、

寬平七年六月廿六日

寬平七年六月二十六日

二二七

七月小辰朔 盡

二日、丁巳、權律師忠戒寂ス、

〔日本紀略〕院亭子 七月二日、丁巳、權律師忠戒卒、

〔僧綱補任〕二興福寺本 權律師忠戒 寛平六年八月十九日任、久修業東

大寺（兼）七十六、同七年六月廿八日入滅（兼）七十七、

七日、壬戌、童相撲、

〔日本紀略〕院亭子 七月七日、壬戌、天皇於綾綺殿前、覽童相撲、結以甘番、小童

奏舞、

八日、癸亥、追相撲、

〔西宮記〕童七月相撲 寛平七年七月七日、童相撲、八日追相撲、

〔公事根源〕七月相撲

是ハ諸國の供御人を召集て、七月ハ相撲節といひて、天子の御覽する事也、
略○申神龜三年ハ初て諸國よりめし登せらる、寛平七年ハ、童相撲を御覽ありき、

乞巧奠、

道眞應製ノ詩

〔菅家文章〕詩五 七夕應製（寛平七年）

今夜不容乞巧兼唯思萬歲聖皇占明朝大史何來奏、更有文星映玉簾、
絶句况非警策、伏增厚顔、

大僧都祥勢寂ス、

〔僧綱補任〕寺本興福 律師祥勢 元慶七年十月七日任、律宗、東大寺、東寺別

當上○以、寛平元年九月廿五日任、小僧都、同二年十月二日轉任、大僧都、同七年

七月七日入滅、上○以、

〔東大寺別當次第〕廿七傳燈 傳燈大法師祥勢 律宗、貞觀十三年閏八月十四日任、六年

再任

傳燈大法師位祥勢 元慶五年八月十九日任、律宗、安軌、死、闕、還、著、七年十月

七日任、律師、寛平元年九月廿五日任、少僧都、二年十月二日任、大僧都、寺務八

九日、甲子、洪水ニ依リテ、三社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕院亭子 七月九日、甲子、依洪水奉幣三社、

十日、乙丑、諸國不動倉ノ鈎匙ハ、國司ノ交替毎ニ申請セシム、

寬平七年七月十一日

二四〇

〔類聚三代格〕

八 不動々用事

太政官符

應開見不動倉事

太政官去寬平七年七月十日、下五畿内七道諸國符傳、交替式云、國司交替之

時、依不動物多煩、自今以後、彼鈎進官、但應修理其倉、及疑有雨損、臨時請鈎、新

案云、不動之物、理合算勘、自非開見、何知積高、須每當交替、請其鈎匙者、略、全文

九年五月十三日ノ條ニ收ム、

十一日、丙申、内外官交替ノ限内ニ、付領所執繕寫署印ノ程ヲ定ム、

〔類聚三代格〕

五 交替并解由事

太政官符

應内外官交替限内、量付領并所執寫署程事

右交替之政、式文具存、分付受領、前後無爭、而頃年人心多岐、遵行失旨、或新司

造、不與解由狀、限日促近、乃示前司、々々無程所執、不進其署、因茲爭論、自發、經

年成煩、人多愁訴、政致壅滯、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝

臣時平宣奉勅、自今以後、宜六分交替之程、四分爲付領之期、一分爲所執之程、

限内ヲ大分ス

一分爲繕寫署印之限、然則彼此無訟、公務不滯、

寬平七年七月十一日

○内外官ノ交替ニ、一度ノ延期ヲ聽スコト、延喜二年三月十三日ノ條

ニ見ユ、

國司交替ノ日、官物ハ先ヅ正稅ヲ填メ、後ニ雜稻ヲ取ラシム、

〔類聚三代格〕

八 出舉事

太政官符

應諸國交替所在見物、先填正稅、後取雜稻事

右官物之重、正稅爲本、至於雜稻、恰如枝葉、而新任國宰、意要剩物、交替之日、所

在見物、先填往古無實雜稻^{物イ}之代、惣致當時出舉正稅之欠、遷替之吏、雖歎其非、

爲求放還、合眼承引、官物損耗、莫不依此、中納言兼右近衛大將從三位行春宮

大夫藤原朝臣時平宣奉勅、自今以後、所在見物、先割置正稅定數、以其遺、辨置

色々雜稻、

寬平七年七月十一日

○式ニ依リテ、正稅ヲ舉填セシムルコト、延喜五年十二月二十五日ノ

寬平七年七月十一日

二四一

官物ハ正稅ヲ本トス

寬平七年七月十一日

條二見ユ、

諸國任用ノ吏ノ不與解由狀ノ制ヲ定ム、

〔類聚三代格〕

五 交替并解由事

太政官符

應依舊遷替吏、隨填交替欠差分、放解由事

任用ノ吏ノ職權

太政官（寬平七年）去年七月十一日符傳、任用之吏、政無自由、而其不與解由狀、載國中前

後諸未辨濟事、詳檢事意、曾無公益、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫

藤原朝臣時平宣、奉勅、自今以後、宜諸國任用之吏、被申不與解由狀、只令載其

預事及身犯、但至犯用官物、則一人有犯、餘官同坐、仍如格式、又受領卒死之間、

任用行事、若有自借判署、犯用之色者、後司進實錄帳之日、不待犯人解退、細錄

其狀、直以申官、其待裁之間、莫預釐務者、○下略、全文ハ八年九月五日ノ條ニ收ム、

○諸國任用ノ吏ノ解由ヲ拘放スル制ヲ定ムルコト、九年四月十九日

ノ條ニ見ユ、

階業ノ次第ニ依リ、諸國ノ講讀師ヲ簡定セシム、

〔類聚三代格〕

三 諸國講讀師事

太政官符

應依階業次第、簡定諸國講讀師事

登用資格

右延曆廿四年十二月廿五日、齊衡二年八月廿三日格傳、五階者補講師、三階

者補讀師者、格旨所指不敢乖違、而頃年雖果階業者、有其先後、而簡定擬補不

依次第、或停甲乙薦舉丙丁、或抑耆老、推轂年少、才不超倫、名無叶實、昇降任意、

愛憎專私、如此之漸、彌致人愁、僧綱等寄言本寺、不忍糾察、怨結之至、動訴公庭、

論之政途、尤是違濫、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平

宣、奉勅、自今以後、重仰本寺、不亂階業之次、簡定擬補、其絕望固辭、觸事越次者、

補任之下、具令注年、薦并辭退、抑留之由、若僧綱知情不糾、殊加科責、

寬平七年七月十一日

十三日、成丹生、貴布禰二社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕

院亭子 七月十三日、奉幣丹生、貴布禰二社、

十五日、庚皇子敦實ヲ親王ト爲ス、

〔日本紀略〕

院亭子 七月十五日、庚午、皇子敦實爲親王、

〔大鏡裏書〕

一品式部卿敦實親王事

寬平七年七月十三日 十五日

寬平七年七月二十日 二十六日

二四四

宇多天皇皇子、母皇太后宮胤子、○中寬平五年癸丑誕生、同七年七月十五日庚午爲親王、

二十日、乙越前國ノ史生一員ヲ停メ、弩師ヲ置ク、

〔類聚三代格〕

五加減諸國官員并廢置事

太政官符

應停史生一員置弩師事

右得越前國解僞、此國西帶大海、遠向異方、戎器之具、不可暫緩、望請被給弩師、備之不虞、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請、

寬平七年七月廿日

二十六日、辛兵庫ノ器仗ヲ辨置シ、闕損ヲ致スコトナカラシム、

〔類聚三代格〕

十八器仗事
○享祿本

太政官符

應辨置兵庫器仗事

右軍防令云、凡在庫器仗、有不任者、當處長官檢實具狀申官、在京庫者送兵部、

異方ニ備
フ

曝涼ヲ怠
ル

任宛公用、若奔掌不如法、致○致ノ下、政事要損壞者、隨狀推徵、又云、軍器在庫、皆造棚閣安置、色別異所、以時曝涼者、而牧宰等、不勤曝涼、無心辨置、滿庫壙積、徒致摧損之費、五兵混淆、難應警急之用、前後之司、默然付領、安不忘危、何忽其備、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅、宜自今以後、曝涼隨時辨置異所、交替之日、莫致欠損、在京所司、亦同准此、

寬平七年七月廿六日 ○政事要略十
一日ニ作ル

二十八日、相撲召合、

〔日本紀略〕

亭子七月廿八日、相撲召合、南殿前有此儀、

廿九日、追相撲、

〔西宮記〕

童相撲寬平七年七月略 ○中廿八日召合、○中略

吏部記 承平五年七月廿八日、相撲云々、○中大納言恒佐云、寬平七年節代、左數甚多、而最後手右勝、爰右先奏納蘇利、左次因數々勝欲進拔頭、式部卿本康親王令止云、先例因最後手勝、右奏勝樂、後左奏羅龍王云々、於是改新樂亂聲奏龍王也、○西宮鈔、前田家卷子本及
大永鈔本ヲ以テ校正ス

延曆寺戒壇院ノ授戒ノ期ヲ定ム、

寬平七年七月二十八日

二四五

樂ヲ奏ス

追相撲

寬平七年七月二十八日

二四六

〔九院佛閣抄〕

戒壇院

在四王院西
塚上、○中略

應四月十五日以前行授戒事、寬平七年七月廿
八日官符(宇多院)

〔年中行事秘抄〕

○四月
前田家本

十五日、延曆寺授戒事、

寬平二年官符云々、

八月小西盡

五日、丑大安寺司、緣起ヲ撰ビテ之ヲ上ル、

〔大安寺緣起〕

中天竺舍衛國祇園精舍、以兜率天宮爲規模焉、大唐西明寺以彼祇園精舍爲規模矣、本朝大安寺以彼西明寺爲規模焉、寺者在_(高良イ)大和國添上郡、其寶塔華龕、佛殿僧房、經藏鐘樓、食堂浴室、_(堂イ)內外重構、不遑具記、○中天平元年己巳、更勅道慈、改造此寺、卽以道慈補律師、兼賜食封一百戶、褒賞有員、不具記之、二七年間、營造既成、天皇歡悅、開大法會、施入_(町イ)三百町水田、得度五百人之沙彌、十七年乙酉、改大官大寺以爲大安寺、詔曰、令天下大平安樂之義也、同國復有東大西大兩寺、_(大イ)故俗呼爲南大寺焉、外從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村去七月十七日、_(廿五)仰稱遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣長谷雄傳宣、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、_(ナシ)宜須令大安寺司等、勸申彼寺建立代々緣起者、仍令勸出從流記十_(三イ)二卷中、准知弘仁_(ナシ)年承和八年之宣旨等例、略所注進如右、

寬平七年八月五日

都維那傳燈法師位恩寬

弘仁承和
ノ宣旨

寬平七年八月五日

二四七

寬平七年八月五日

二四八

俗別當遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣

寺主傳燈大法師位朝臣
上座傳燈大法師位恩成
別當傳燈大法師位壽令

○本書稍疑フベキトコロアレド、姑ク茲ニ掲グ、長谷寺緣起ノコト、便
宜左ニ合敘ス、

〔長谷寺緣起文〕

吾遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣
道真、忝加寺官、附大安寺、因依小僧之請、攀入長谷靈寺、爰則面爲勝絕之靈
場、視成大明之流記、精氣一通而得靈夢、十一面堂下、二百餘步、下畝有岡、名
懸梯高不幾許、從厥頂、探雲、有三金梯、至金峯山、三藏王各率山神等諸眷、屬踏
梯影向、忽入十一面堂、各以五色蓮花捧寶前、則覓其所以、藏王權現答曰、此
山者功德成就之地、諸佛經行之砌、是兜率天宮觀世音院也、菩薩聲聞住此
山而逞功德、諸天神祇在此山而振威驗、專治四海安寧鎮衛一人寶祚、我等
融彼冥誓、日々來而擁護伽藍、利益衆生云々、奚彌信仰無貳、仍鏡行基菩薩

道眞靈夢
ニ感シテ
緣起ヲ草
ストノ説

長谷寺緣
起

八中

勅ニ依リ
テ撰上ス
トノ説

國符記七卷并流記文三卷、本願聖人上表狀一通、就中尤聚金去塊、勘出緣
起文一首、其辭曰、傍兼
流記

稱長谷寺者、夫於南閻浮提陽谷輪王所化之下、礮馭盧島水穗國長谷神河浦
北豊山峯、而德道聖人建立十一面觀世音菩薩利生之道場也、中凡記錄取
要、依勅奏聞、聊依恐天覽繁務、從數卷舊記、撰一首緣起者矣、也

寬平八年二月十日

都維那僧行空
寺主法師惠義
上座法師圓詮
別當傳燈大法師位智照

俗別當左大臣從二位藤原朝臣良世

奉行去年七月廿七日、下
諸寺并長谷寺宣旨、

從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村
遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣長谷雄
中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平
執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真

寬平七年八月五日

二四九

〔三國傳記〕 二 長谷寺事

寛平二年三月三日、今ノ北野天神ニ詔メ、桃花宴會ヲ押ヘ、徳政ノ謀ヲ御尋アリ、天神勅問ヲ請テ、四箇條ノ事ヲ奏シ玉フ、先ツ佛法ヲ崇メ、神明ヲ敬ヒ、聖跡ヲ興シ、賞罰ヲ可行云々、重勅曰、聖跡何所ヲカ可興、爰ニ天神鎮護國家ノ伽藍十八箇所ヲ勘ヘ、其中ニ長谷寺ハ、開闢ヨリ以來、勝地神明發願ノ精舎也ト奏ス、仍テ七年七月廿七日、詔ヲ下メ、當寺ノ靈驗、建立ノ次第ヲ御尋有リ、同八年ニ、天神并ニ當寺ノ俗別當三綱縁起秘記ノ二卷ヲ以奏ス、

〔行仁上人記〕

寛平七年七月二十七日、下宣旨於長谷寺并七大寺○東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺等鎮護國家伽藍十八所、尋其縁起由來、爰當寺俗別當左大臣藤原朝臣良世、奉勅傳付別當傳燈大法師位智照、照依詔勅奉請菅相府、而從行基菩薩國府記等、令勘出當山建立縁起、則令長谷寺司等加署判、奏聞公家、于時寛平八年二月五日、菅相府詣長谷寺、而向聖跡渴仰無貳、乃至感靈夢

倍歡喜、歡喜餘載位署、製端作成一卷縁起、自手染筆而書於紙、奏天皇、又書於紙書於板、留寺内、其板二枚、各一丈三尺、懸十一面堂正面東脇云々、

〔參考〕

十八箇寺ノ縁起ヲ上ラシムトノ説

道真ノ自筆ナリトノ説

〔好古小録〕

書畫 菅贈太政大臣書

長谷寺ノ縁起、公ノ眞蹟也、卷尾云、執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真、其眞蹟タル疑ヘカラス、又大安寺縁起モ、公ノ撰并書ト云、卷尾云、俗別當遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣トノミアリテ名ノ字ナシ、書體長谷寺ノ縁起ト一點似タル所ナシ、又菅公ノ眞蹟ノ佛經世ニ散在ス、一モ長谷寺ノ縁起ニ似ス、十種アレハ十種ノ書也、皆信スルニ足ラス、

〔拾葉筆記〕

三 和州長谷寺此觀音の縁起は、天神の御筆よて、則菅道真と

あり、そのはされたる御名ありて、いとめつらしきたからなり、この縁起をかき、頃まで寺よはなくて、上京の質屋よりしと、御室院家報恩院權僧正覺遍御原大納言紀光卿御弟なり物語ふせき、勢給ふ、さてもと此長谷寺ふと、此へておくられしと、眞乘院ふ商人持來りし時、冷泉入道爲村卿うつさせ給ひしを、としむるか、比とさりし、いとみとなりしものと覺しとかさ、給ひさり、略中

大和國大安寺縁起の奥書に、

寛平七年八月五日

寛平七年八月五日

俗別當遣唐大使中納言從三位兼行左大辨東宮權大夫侍從菅原朝臣
大和國長谷寺緣起與書ふ、

寛平八年三月十日

執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大辨東宮大夫式部大輔菅原朝臣道眞
と見えたり、大安寺長谷寺とも、天神の眞跡といひ傳へしかと、長谷緣起の
かたまさりてをかまると也、さて寛平七年に春宮權大夫とて、八年に東宮
大夫とみえられたれ、七年に權大夫よて、八年に大夫に轉任し給ふよと
もひて、公卿補任を考るに、

寛平八年要

中納言正三位藤時平、春宮大夫、右大將、

中略

從三位菅道光（寛平五年十二月、春宮權大夫、八月廿八日、
兼民部卿、權大夫、辨、侍從如元、止大輔、

遣唐大使中納言從三位兼民部卿左大弁春宮權大夫菅原朝臣宣奉

勅十一月廿一日
私所注也、

大安寺長
谷寺二緣
起筆蹟
優劣

位署疑フ
ベシ

良世ヲ左
大臣トス
ハ合ハズ

と見えたり、緣起ふ公卿補任参考をへきとにこそあれ、又長谷寺緣起此末
に、東宮大夫時平とありて、菅公此御位署も東宮大夫とありし也、不審なる
となり、

〔長谷寺緣起剽僞〕

略○上さてまた菅原大臣の作りて書せ給へる長谷寺緣

起文の、今某處に崇め藏りとて、その摹寫本のありて、此本書もとはその寺
國內の或人の家に藏傳へたりけるを、近世となりて、寺に返し納たれと、又
しもはふれもやせむとて、その郷長の預て在りときけりと、或人かたりき、
世に崇め珍重あへるを、上のくたりのこと、因に、つらく、讀者に、いと
疑はしくおもはるゝ事とも、多かる、略○中さて今此文を論ふに、さるへき
由あれば、まづ卷末の年號、また署名につきて辨ふへし、

緣起文題末云、寛平八年二月十日、俗別當左大臣從二位藤原朝臣良世、
良世公は公卿補任云、寛平三年三月十九日、任右大臣、同八年七月十六日任
左大臣と記せり、八年二月十日の頃は右大臣の時なれば合はず、また次の
名署に、

從五位下行左大史兼春宮大属壬生忌寸望村（以下同シ）

遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣長谷雄

寛平七年八月五日

中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平

執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原道真と記せり、右四人の名署は、此縁起文に題せる前年、寛平七年八月五日、大安寺縁起の文末に、外從五位下行左大史兼春宮大屬壬生望村、去七月十七日仰稱、遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣長谷雄傳宣、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣云々とあり、此長谷寺縁起に、望村忌寸の位の外字なし、此主の敘任いまた考得されは辨ふべき由なし、但し御産部類記に、新國史を引て、寛平五年四月二日、如故と見、右大史從六位下壬生忌寸望村を、春宮大屬とし、本官を考ふるに、二縁起記せる年月日の時に合へるを、道真公の名署は、大安寺縁起の末署に、俗別當遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣とあり、菅家御傳記、公卿補任、そのほか古記ともに見えたる御傳を併考ふるに、大安寺縁起なる寛平七年八月五日の時の位署は合ひ、此長谷寺縁起の同八年二月十日の時の位署は違ひありて合はず、其は此縁起に春宮大夫式部大輔と書たれと、此公、春宮大夫に任され給へる事はあら

道眞ヲ東
宮大夫ト
スルハ誤
レリ

當時式部
大輔ニア
ラズ

縁起ハ偽
作ナリ

す、此時時平公兼春宮大夫にておはしつるとは、補任等にみえたり、同時に春宮大夫を二人置れたる事のあるへくもあらず、然るに此縁起の署名の中に、時平公、道真公ともに、春宮大夫と書るは、いかにそや、又大安寺縁起に、道真公の兼官に、春宮權大夫とあるは、寛平七年十一月十三日に任されたる兼官にて、其縁起記せる八月五日よりは後の事ながら、公の別當にて判署し給へるは、その兼官の後なるへければ難なし、さてまた式部大輔は、寛平五年二月十六日に兼任し給ひて、同七年七月十六日、敍從三位中納言、停式部大輔、春宮亮とありて、其頃式部大輔にてはおはさされば、これも合す、此縁起に記せる寛平八年二月十日の頃までの公の官位は、大安寺縁起に署されたることにて合へれば、三代格に見えたる寛平八年四月十三日、公の位署も全同し、きは、同年九月七日、十月十三日の太政官符の官位にて、是はし、時に當りて、此縁起なる公の位署の違へる事、ますます明なり、略、中上に論へること、右大臣良世公を左大臣と書るか違へる事、はた此たくひなり、かく詳なる違あれば、此縁起の偽書なる事著きものなるをや、さてかく辨へたるうへは、此縁起の文につきては論ふへくもあらぬ、わさなから、見過しかたき妄説ともをた、一ツ二ツわきまふへし、

長谷寺縁起文

大安寺そのほか舊き寺々の公家に上る縁起に、某寺縁起と書て、縁起文といへるはあらず、官符などにも、みな縁起と云へる例なり、文の字を加へたるは拙し、さて此縁起總ての文の拙さいはむかたなきを、一目見ても知らるれば、今さらに論ふへくもあらず、

吾遣唐大使、略 添加寺官附大安寺、因依小僧之請、攀入長谷靈寺、爰則稱云々、

文の首に、吾云々と位署姓名云々と、辱くも書出せるは、あまりに拙し、中納言とある人の寺別當になさるるは、そのかみの例なれば論ふへくもあらず、されと、公のみつから、添加寺官といかてか書せ給ふへき、又爰則稱云々と、は、此寺の小僧の請によりて、其縁起を文に作り給へる由にて、奥に執筆云々と、官位姓名を記給へるものとせり、大安寺の別當の判署にすら書給はぬ御名を、首尾二處に御名をさへに記給ふへくもあらず、又その二處ともに管字を管と書り、公いかてみつからの姓字を、さは書訛り給ふへき、

管ヲ管ト訛ル

天武天皇、更勅弘福寺道明聖人、建精舍於此矣、彼金銅佛像下、有天皇御筆

縁起文

この天武天皇の勅を奉れる事、又同天皇御筆縁起文の事、時世合はず、そは三代實録にみえたる長谷寺の僧長朗か申牒に、道明寶龜年中、率其同類、奉爲國家所建立也云々といひ、多寶塔銘に、寶龜元年、道明率引八十許人、天武天皇の奉爲に造れる由記せるに當て、まづ道明か齡のほとを推考るに、下文に道明か弟子徳道か、齊明天皇二年丙辰に生れ、天武天皇四年乙亥廿歳にて出家せりといへば、其師とある道明は、いかに若くとも二十歳ばかりの長なるへく、さためて二人の齡を推考ふるに、寶龜元年は、道明百三十四歳ばかり、徳道は百十五歳の時に當れり、さはかり長壽の師弟あるへくもあらず、こは多寶塔銘に、奉爲飛鳥清御原宮治天下天皇敬造と誌せる文にのみ泥み、全文をばよくも讀わきまへずして、道明を天武天皇の御世の事に係て、妄説を造れるものなること著し、

次谷東岡上、有十一面堂等者、長谷寺也、中略 專答徳道聖人之願、而北家曩祖房前臣、奏元正天皇、奉詔勅以所建立也、下略

こは下文に、神龜六年己巳歲四月八日、十一面觀自在菩薩を造れりといへ

るに當れり、されと此寺寶龜元年に建立せる明證あれば、これはた妄説なり、

元正天皇即位六年壬戌秋七月、

此天皇の即位六年は、すなはち養老四年庚申なるを、かく書るは違へり、養老六年は壬戌なれと、即位よりは八年なり、件の上文に養老四年庚申と書なから、たちまち下文に然書るは、謾説なるか故なり、

房前臣、中略山中開禮拜音頗奇、行菴前問曰、聖人何祈兩家、○以下本文略ス

聖人とは道明なり、兩家とは此下文をみるに、天皇と藤原家とを合ていへるなり、また第六天魔王云々といひ、天照大神居法性宮といひ、こゝのほかにも長谷谿の寶塔寶石の東に、鵝形石ありて、天照大神影向、而坐彼石上、其石南有杵形石、春日大明神影向石也、なといへる事とも、あまりなるかしこき妄言なり、さるは藤原氏攝關の家門のことくに、いたく權勢ある世となれるうへにて、もはら藤原氏に媚て、房前公の事を造り添、かゝる妄言せるものなる事著し、憎むへしく、もし菅家大臣の御時に、かゝる妄なる造言せるものあらむには、重罪にそ申行ひ給はむかし、

聖人受命神龜元年、中略相共近行佛所、而見常人也、

聖人は、これも道明なり、相共とは徳道となり、いと拙くきこえかたき書さまなり、さて此神龜の時の事は、上文に房前臣奏元正天皇云々といへる時の事をいへるにて、これはた塔銘、また長期か申牒に違へり、妄説なること既に論ひ辨へたるかことし、そもそも舊き寺々の縁起書を見るに、僧徒の例として、佛の靈驗などを奇怪しく説ひなせる事こそは、あれ尋常の事實に、さはかり妄説せるはをさく見えず、長谷寺にも然る例さまの縁起書ありて、公家にも上り、寺家にも其案の在つらむを、故ありて失ひたるによりて、年経て後もの知らぬえせ法師のありて、いささか聞傳たる縁起の趣に、虚言謾言をもてつけて、此縁起文を作れるものなり、續日本紀に、稱徳天皇は、御世、神護景雲二年十月庚申、幸長谷寺、拾田十町とみえたり、縁起にはかゝる事を、さるは日本紀略に、天慶七年正月九日、壬午、夜半風雨、大和國豐山寺、注に長谷寺也、堂舎皆悉焼亡、驗佛同焼失、建立之後二百廿四年とみえたる、ときに縁起も焼亡せたりしなるへし、○中略、そもそも此縁起文は、偽説とはいへと、しかすかに古人のいみじき筆のあとの、久しくとゞまれるはめてたきを、これまことに

寬平七年八月十七日二十一日

二六二

忠

〔二中歷〕

儒職歷 儒者辨 橘公材寬平七、八右少、左少

〔職事補任〕

宇多院五位藏人 左衛門佐從五位下源善〔寬平〕 同七年八月十一日補

○源善ヲ藏人ニ補スルコト、便宜合敘ス、

十七日、辛丑男子ノ乗車ヲ聽ス、

〔政事要略〕

六十七男女衣服并資用雜物等事

同七年八月十七日宣旨、奉勅、男聽乘車、〔便體類〕

男乘車之制隔一年停止、爲見舊法、大略記注、

○貴賤ノ乗車ヲ禁ズルコト、六年五月十二日ノ條ニ、重ネテ男子ニ乘

車ヲ聽スコト、長保元年七月二十七日ノ條ニ見ユ

二十一日、乙巳藤原忠平元服ス、

〔日本紀略〕

〔長谷雄〕 院亭子 八月廿一日、乙巳、授太政大臣息无位藤原忠平正五位下、

同兼平從五位上、

〔公卿補任〕

昌泰三年 參議從四位下藤忠平、〔世〕 寬平七八十一敘正五下、

十六 九月十五日聽雜袍、昇殿、

忠平兼平
敘爵

位記

〔本朝文粹〕

〔長谷雄〕 位記

無位藤原朝臣忠平

紀納言

右可正五位下

中務先功名臣後胤遺種、非唯悅當時之器量、亦感曩日之附託、宜授爵命、用異寵榮、可依前件、主者施行、

寬平七年八月二十一日

〔尊卑分脈〕

〔藤氏〕 冬嗣孫

基經

兼平

忠平

貞信公傳 元慶四年庚子生、寬平七八廿一敘正五下、〔元服〕 同九月十五

二十五日、〔西〕 左大臣從一位源融薨ズ、尋テ、正一位ヲ贈ル、

〔日本紀略〕

〔院〕 亭子 八月廿五日、己酉、從一位行左大臣源朝臣融、薨於東六條

〔第十年〕 第十四、

廿八日、壬子、葬故左大臣、是日贈正一位、

寬平七年八月二十五日

二六三

葬送

河原左大臣
下號ス

源能有道
悼ノ歌

子湛等ノ
一周忌法
會願文

融樓霞觀

寬平七年八月二十五日

二六四

〔公卿補任〕

四 左大臣從一位源融、七十八八月廿五日薨、同廿八日贈正一位、

號河原左大臣、在官廿四年、公卿勞四十一年、生年承和三年丙辰、

〔一代要記〕

皇嵯峨天皇 融 左大臣從一位、母正五位下大原金子、（金イ）寬平十七

年八月二十五日薨、年七十三、號河原大臣、

〔古今和歌集〕

十六哀傷歌 河原のおほいまうちきみのみまかりての秋、かの

家のほとりをまかりけるに、紅葉の色またふかくもならさりけるを
見て、かの家によみていれたりける、

近院の右のおほいまうち君

打つけにさひくもあるかもみちはもぬしなき宿は色なかりけり、

〔菅家文章〕

十二願文下 爲兩源相公先考大臣周忌法會願文、寬平八年八月十六日、

弟子參議從四位上源朝臣湛、參議從四位下源朝臣昇等歸命稽首、諸佛聖衆、
弟子所天大臣宿昔發願、始繕寫一切經、復次作念、漸歸依彌陀佛、佛像未現、經
王猶欠、言事相違、始終如失、遂以去年八月二十五日藥動薨逝、弟子等眼流新
淚、心計舊懷、寫畢經王之有欠者、卽法藏分教求而聚焉、造成佛像之不現者、亦
觀音得大隨而具矣、所天尋常言曰、棲霞觀者嵯峨聖靈久留睿賞、假使暫爲風

ヲ寺トス
アリ宿志

官歴

〔公卿補任〕

非參議從三位源融、廿九嵯峨天皇第十二源氏、母大原金子、（金イ）賜京

職、弘仁十三生、淳和帝爲子、棲霞觀大臣之山庄云々、承和五十一廿七正四
下、加元同六正二侍從、同八正十二兼相模守、同九九八遷近江權守、同十四正
、兼近江守、同十五二十四任右中將、同月、兼美作介、○三代實嘉祥三年

正月七日敍從三位、五月十七日任右衛門督、仁壽四年八月、○廿兼伊世守、
齊衡三年九月日任參議、右衛門督、伊世守如元、天安三年正月十三日兼備中守、督如十

一月十九日正三位、貞觀二年正月十六日兼近江守、右衛門督、同五年二月十日
遷左衛門督、近江守、同六年正月十六日任中納言、三月八日兼按察使、同十一

年正月十三日去之、同十二年正月十三日任大納言、同十四年八月廿五日任
左大臣、同十五年正月七日從二位、同十三日兼東宮傅、陽成同十八年十一月

廿九日止傅、受禪同十九年正月三日正二位、御即位、日坊官賞元慶八年二月五日勅

寬平七年八月二十五日

二六五

寬平七年八月二十五日

二六六

授帶劔仁和三年十一月十七日從一位御即位日同五年十一月十九日勅聽乘輦車出入宮中古今和歌集目錄寬平二年七月廿二日聽腰輿同六年七月、勅許車以上四

〔三代實錄〕清和天皇貞觀二年十一月三日己卯詔參議正三位行右衛門

督源朝臣融賜大和國宇陀野爲臂鷹從禽之地

〔三代實錄〕清和天皇貞觀八年十一月廿九日庚午是日勅聽中正三位

行中納言兼陸奥陸奥出羽按察使源朝臣融鷹三聯、鷄二聯

〔三代實錄〕清和天皇貞觀十四年八月廿五日癸亥策命曰中大納言正

三位源融朝臣波久朝政爾經奉天至今時末天無怠緩亦於朕天近親爾毛在

又可奉波資爾毛在爾依天左大臣官爾治賜布

〔三代實錄〕清和天皇貞觀十五年四月十六日庚戌左大臣從二位兼行皇

太子傅源朝臣融上表請還食封千戶封千戶ヲ賜フ勅答曰略中至彼減封

之請苟存利國之義復有舊章不敢排拒朕之此意公能順之

〔三代實錄〕光孝天皇元慶八年六月十日己亥天皇御紫宸殿神祇官大副

從五位上大中臣朝臣有本昇殿讀奏御體御下左大臣正二位源朝臣融行事

放鷹ノ地ヲ賜フ

鷹鷄ヲ養フコトヲ聽サル

封戸辭退ノ上表

貞觀ノ末閑居ス

世系

○中承和以後是儀停絶是日尋舊式行之左大臣自貞觀十八年冬杜門不出今日始就太政官候廳視事

〔尊卑分脈〕

嵯峨源氏

嵯峨天皇

融 相模近江伊世備中守右中將侍從左右衛門督從一位按察使左大臣

皇太子傅母正五位下大原全子賜源姓貫京職寬平七、薨七十三才

贈正一位號河原院

湛 從三刑部卿權正大弼大納言左中將按察使

母贈太政大臣總直女贈正一位延喜十五薨七十一

泊 左權佐伊与讚岐等守民部卿左兵佐木工頭大納言正三右兵衛督勸長官

五藏侍從參木兼左中弁例母延喜十八廿九薨七十一後撰新勅作者號河原

望 周防守左京大夫

副 從四下兵部大輔

〔續日本後紀〕七 承和五年十一月辛巳皇太子於紫宸殿加元服中是日

亦源朝臣融於內裏冠焉天皇抽筆敘正四位下嵯峨太上天皇第八子大原氏

所產也賜之天皇令爲子公卿補任淳和故有此敘

寬平七年八月二十五日

二六七

紫宸殿ニテ元服ス 仁明天皇養子

寛平七年八月二十五日

二六八

清和上皇
融ノ山莊
ニ幸ス

家司敘爵

皇位ニ意
アリトノ
説

融ト在原
行平

〔三代實錄〕

三十八 陽成天皇

元慶四年八月廿三日、甲辰、(清和)太上天皇遷自水尾山寺、

御嵯峨棲霞觀、以水尾有營造佛堂也、

〔類聚國史〕

百一 職官部六

元慶四年十一月廿五日、乙亥、先是、太上天皇

聖體不豫、是日遷自棲霞觀、御圓覺寺、詔授左大臣源朝臣融家、令正六位上伴

宿禰枝雄從五位下、棲霞觀者、左大臣山莊也、故有此賞也、

〔大鏡〕

太政大臣基經

陽成院ありさせ給へきため、にさふらはせ給、と

ほるの大臣やんことなくて、位につかせ給はむといふ御心ふかくて、ちか
き王胤をたつねは、とほるらも侍はといひいて給へるを、この大臣、王胤を
れとしやうを給はりて、只人にてつかへて、位につきたるためしやあると
申出給へれば、さもある事なれば、この大臣のさためによりて、小松のみか
とは位につかせたまへるなり、○古事 談同ジ

〔後撰和歌集〕

十五 雜歌一

家に行平朝臣まうてきたりけるに、月の面白かり

ける夜、酒をとたうへて、まかりたゝむとしけるほとに、

河原左大臣

照る月を正木のつなによりかけてあかすわかるゝ人をつなかむ

かへし

行平朝臣

限りなき思のつなはのなくばこそ正木のかつらよりもなやまめ

〔二中歴〕

十二 倭歌 公卿 融

河原左府

〔古今和歌集目錄〕

大臣

河原左大臣二首、戀一、雜略ス、

〔勅撰作者部類〕

自帝王至庶人

河原左大臣從一位源融、

古今集、戀四、雜上、

〔古今和歌集〕

十七 雜歌上

五節のあしたに、かんさしの玉のれちたりけるを

みて、たかならんと、とむらひてよめる、河原の左のおほいまうちきみ
ぬしやたれとへとまら玉いはなくにさらはなへてやあはれとれもはん

〔後撰和歌集〕

二 春歌中

貞觀の御時、ゆみのわさつかうまつりけるに、

河原左大臣

けふさくらあつくに我身いさぬれんかこめにさそふ風のこぬまに

〔東寶記〕

二 佛寶中 相承道具等

一 聖教等

隆海法印抄

或記云、東寺卅帖雙紙宗叡僧正取出、被渡河原院大臣了云々、

〔拾芥抄〕

中末 諸名所部二十

河原院六條坊門南万里小路東八町云、融大臣
家後寛平法皇御所本四町京極西、號東六

寛平七年八月二十五日

二六九

歌人

歌什

射藝

三十帖冊
子ヲ覽ル
邸宅
河原院

院條

〔伊呂波字類抄〕

三所佛菩薩名號 河原院先朝文集云二皇子左丞相融仁
之甲第也相府在世之間窮風流之體擅遊蕩之美疊山累殿草木比其枝遊覽
泄水魚鳥戲其波調管絃於仙臺翫文籍於月殿寬平法帝脫屣之後時々遊覽
馬勝地再逢主幽境重得時蹙後早改蓮府之號更爲花界之
砌鐘磬懸兮增地勢之幽奇幡蓋飄兮從天然之形勝云々

〔伊勢物語〕

むかし左のおほおまうち君いまそかりけり、かも河の邊に、六
條わたりに、家シイをいとおもしろく作りて住給ひけり、かみな月のつこもり
かたに、菊の花うつろひてさかりなるに、紅葉のちくさにみゆるをり、みこ
たちおはしまさせて、夜一よ酒のみしあそひて、夜あけもてゆくほとに、此
殿のおもしろきをほむる歌（かみしちい）よむ、そこに有けるかた（在原業平）お翁、板鋪（チ）のしたには
ひありきて、人（シイ）にみなよませはて、よめる、

鹽かまにいつかきにけん朝なきにつりする船はこ、によらなん

〔貫之集〕

九哀傷部 河原の左大臣うせ給ひて、のちにいたりて、しほかまと
いひし所のさまのあれ（かたを、くれりける）にたるをみてよめる、

君まさてけふりたえにしほかまのうらさひしくも見え渡る哉

〔安法法師集〕

六條のかはらの院に、むかしむつのくにしほかまのうらう

鹽釜ノ景ヲ模ス

きしままがきのしまうつしつくられたりければ、おと、かくれたま
ひて、みつね、つらゆきなと、き、つ、よめりければ、それはいとかきり
なければ、人のよまぬを心みにて、あひよめる、
年ふりてあまそあれたる、あほかまの浦の煙はまたそ残れる
うきしま

おき津波たてはた、よふうき島は昔の風のなこり也けり

〔河海抄〕

九通女 六條院は河原院を模する歟、御記に見えたり、（中）延喜
十七年三月十六日、己丑、此日參入六條院、此院是故左大臣源融朝臣宅也、大
納言源朝臣奉進於院（定多）

〔本朝文粹〕

十四諷誦文 宇多院爲河原左相府、没後修諷誦文
紀在昌（天原）秀才（天原）

河原院者、故左大臣源朝臣（之イ）舊宅也、林泉卜隣、喧囂隔境、擇地而構、雖在東都之
東、入門以居、如遁北山之北、是以年來尋風煙之幽趣、爲禪定之閑棲、時代已不
同於昔年、舉動何有煩於舊主、（上）略、全文ハ、（下）略、（四）收、

〔江談抄〕

三雜事 融大臣靈抱寬平法皇御腰事

寛平七年八月二十五日

資仲卿曰、寛平法皇與京極御休所同車、渡御河原院、觀覽山川形勢、入夜月明、令取下御車、疊爲御座、與御休所令行房內之事、殿中塗籠有人、開戶出來、法皇令問詰給、對云、融候、欲賜御休所、法皇答云、汝在生之時爲臣下、我爲主上、何猥出此言哉、可退歸者、靈物乍恐抱法皇御腰、御休所半死失顔色、御前駭等皆候中門外、御聲不可達、只牛童頗近侍、召伴童召人々、羞御車令扶乘、御休所顔色無色、不能起立、令扶乘還御、召淨藏大法師令加持、纔以甦生云々、法皇依先世業行爲日本國王、雖去寶位、神祇奉守護、追退融靈了、其戸面有打物跡、守護神令追入之跡也、又或人云、法皇御簾中融靈參、居檻邊云々、○古事談異事ナシ

〔今昔物語〕

二十

川原院融左大臣靈、宇陀院見給語第二

今ハ昔、川原ノ院ハ、融ノ左大臣ノ造テ住給ケル家ナリ、陸奥ノ國ノ鹽竈ノ形ヲ造テ、潮ノ水ヲ汲入テ池ニ湛ケヘタリ、様々ニ微妙ク可咲キ事ノ限ヲ造テ住給ケル、其ノ大臣失テ後ハ、其ノ子孫ニテ有ケル人ノ宇陀ノ院ニ奉リタルケ也、然レハ宇陀ノ院、其ノ川原ノ院ニ住セ給ケル時ニ、醍醐ノ天皇ハ御子ニ御セハ、度々行幸有テ微妙ケカリ、然テ院ノ住セ給ケル時ニ、夜半許ニ、西ノ臺ノ塗籠ヲ開テ、人ノソヨメキテ參ル氣色ノ有ハケレ、院見遣セ給ケル日ノ

鹽竈ノ形ヲ模ス

没後天皇ニ獻ズ

臺閣水石風流ヲ盡ス

後ニ佛閣ト爲ル

〔續古事談〕

四 神社佛事

河原院ハ、融左大臣ノ家也、臺閣水石、風流ヲツクシ

テ、造リ磨キテ住給ケリ、失給テ後、其御子、宇多法皇ニ奉リテ、時々ワタリ給ヒケリ、彼大臣ノ靈止リ住キコエアリケレハ、ニヤ、常ニハ住給ハス、大臣ノ拔苦ノ爲ニ、誦經セラレタル事アリ、其後佛閣ニナリニケリ、仁康聖人ト云者知識ヲ勸テ、丈六ノ釋迦佛ヲ造リテ、此所ニ居タテマツリケリ、○中略假堂ヲ作テ、始テ五時講ヲ行フ、○中略正曆二年三月十八日ノ條參看、其後此所鴨河水ミナキリ入テ、苑池ホト（悉）水底ニナリヌヘカリケレハ、上人廣幡院ニ移作ケリ、○長保二

寬平七年八月二十五日

二七四

年四月二十日ノ條參看

役夫ヲシテ尼崎ノ潮ヲ運バシム

〔和漢合符〕醍醐天皇 延長四年丙戌 融大臣者醍醐帝之名臣也、爵祿過人、以故浮華豪奢、世少比、問或云、日域之中佳境、答曰、莫如奥州鹽竈浦、乃說其風景、融慕之、欲模寫、即於家庭鑿池、納潮、築島植樹、乃至鹽竈燒鹽、以象海嶠之景、蓋其潮者、使役夫數百人、自尼崎浦運之、每日以百文相繼而運其池、今河原院是也。

〔花鳥餘情〕

十風 棲霞觀は、左大臣融公の山庄なり、後に寺になりて棲霞寺といふ、今の清涼寺の東にある阿彌陀堂是なり、

〔本朝文粹〕

十木 詩序三 初冬於栖霞寺、同賦霜葉滿林紅、應李部大王教、

源順

栖霞寺

栖霞寺者、本栖霞觀也、昔丞相遊息所遺者、泉石之聲、今天王紹隆所供者、香花之色、彼江都之好勁捷也、七尺屏風、其徒高、淮南之求神仙也、一旦乘雲、何益乎、我王不好勁捷、不求神仙、樂山水於閑中、翫景物於秋後矣、觀夫霜迎冬白、葉滿林紅、樹々傳錦里之風、枝枝帶炎州之火、至夫鑱洞門、兮曉積、掩岩泉、兮寒浮、鹿苑跡埋、寸步無青苔之地、鷺池影變、尺波非曝布之流者也、於是管絃韻清、龜山

之曲間奏、詩酒興盡、兎園之駕將歸、順暮年折桂、寒夜臥蓬、幸陪大王之光塵、豈非小人之景福、請記勝事、貽于方來云爾、

〔賜蘆文庫文書〕

三 太融寺文書

（編書） 足利尊氏公寄附狀

當寺者、河原左大臣融公之草創、一天不二靈場也、依有心願、寄附攝州倉橋庄一分、祈天下太平、并欲遂二世安全之願、仍寄附狀如件、

建武元年八月朔日

花押

○融左大臣ノ辭表ヲ上ルコト、三代實錄貞觀十四年十月六日、十七日、元慶元年十二月四日、同二年正月三日ノ條ニ見ユ、

攝津太融寺ヲ建ツトノ説

寬平七年八月二十五日

二七五

寬平七年九月九日十一日

二七六

九月大甲寅朔

九日壬戌重陽宴

詩題

〔日本紀略〕

院亭子

九月九日、重陽宴、題云、秋日懸清光、

〔菅家文章〕

詩五

重陽侍宴同賦、秋日懸清光應製、

道眞應製
ノ詩

天下無爲日自清、今朝幸遇再陽并、深追合璧龍宮徹、遠任孤輪鳥路平、萬里如逢、寰續望、黎民欲慰載、盆情微、臣俯仰依明德、心比秋葵且暮傾、

〔頭書〕扶十五
重陽後朝、同賦、花有淺深應製、

同後朝ノ詩

十步花明一點燈、葉々不得色相承、夜風豈有吹濃淡、寒露應無潤愛憎、蘭爲送秋深紫結、菊依臨水淺黃凝、榮華物我皆天授、時去時來罷不能、

十一日甲子、例幣ヲ停ム、

〔日本紀略〕

院亭子

九月十一日、停伊勢奉幣、

公卿上表シテ、薩摩開聞神社ニ慶雲ノ現ル、ヲ賀ス、

〔日本紀略〕

院亭子

九月十一日、是日公卿等上表、奉賀大宰府申慶雲見薩摩

國開門神社事、

〔菅家文章〕

詔勅

答公卿賀薩摩國慶雲勅

勅答

勅、公卿去九月十一日表狀曰、大宰府奏慶雲見管薩摩國、有司考之上志、以爲政致和平之應也、德至山陵之感也、朕省表以恐之、聞瑞以懼之、卽位之後九載于今、水旱疫癘、軍兵盜賊、豈是政和德至之言、可以儉措齒牙乎、君臣者一體之分也、朕可耻、卿等亦可耻、抑而止之、勿爲虛賀耳、

寬平八年十月日奉勅製

○公卿慶雲ヲ賀スル論奏ヲ上ルコト、十一月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十七日庚辰、郡司百姓等ノ私物ヲ官家ノ物ト假稱スルヲ禁シ、竝ニ正稅ヲ受ケズ、田租ヲ輸サマル輩ヲ科責セシム、

〔類聚三代格〕

十二禁制事

太政官符

應禁斷郡司百姓私物假稱官家物、并科責不受正稅不輸田租之輩事

右得美濃國解稱、凡諸國例、分配郡司、充租稅調庸、專當駟使、土浪、差進官雜物、綱丁、若有損失官物、取預人私物、填納其欠負、而此國人心多巧、只事奸欺、至于欠失官物、國司沒其私物、臨欲運納官舍、忽就官家、假爲寄進、請其家牒、送於當國、或云是家之出舉物、或云寄進借物之代、或時懸札、或時打杭、如此違濫、不可

寬平七年九月二十七日

二七七

美濃國人
トス
奸欺ヲ事

國司權勢
ヲ恐レテ
默ス

諸司雜任
事ヲ本司
ニ寄セ王
臣僕從威
ヲ本主ニ
假ル

寬平七年九月二十七日

二七八

勝計、國司詳知非家物、爲恐權勢、擊目閉口、是故官物已致未進、國宰罹其負累、國之難治、莫大於斯焉、望請元來無由稱其家物者、雖有家牒、不更許容、然則部內肅清、官物全納、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子備民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請、又如聞諸司雜任以上、王臣僕從之中、居住部內、業同編戶之輩、或假威本主、或寄事本司、春給正稅、則乍置官舍、涉月不受秋徵田租、亦爭運獲稻、過期無輸、如此之類、不論土浪、任理勘責、不得許容、若逆不順國郡之教諭、事須具錄其本司本主急以言上、隨事科罪、國司忍而不言、同加重責、諸國准此、

寬平七年九月廿七日 ○政事要略同シ

大宰府、壹岐ノ官舍等、討賊ニ依リテ、燒亡セシ狀ヲ奏ス、

〔日本紀略〕 亭子院 九月廿七日、庚辰、大宰府言上、壹岐島官舍等、爲討賊悉被燒亡、

○討賊ノ事詳ナラズ、新羅ノ賊ヲ擊破スルコト、六年九月十七日、同十九日ノ條ニ見ユ、本書或ハ去年ノ誤ナランカ、

十月 甲申 朔 盡

一日、甲申、從三位基棟王薨ズ、

〔日本紀略〕 亭子院 十月一日、甲申、從三位基棟王薨、

〔一代要記〕 字多天皇 非參議 平基棟王 元從三位、寬平七年十月六日薨、

〔三代實錄〕 清和天皇 貞觀二年十一月十六日、壬辰、授散位、從四位下、基棟

王從四位上、

〔三代實錄〕 清和天皇 貞觀三年正月十三日、戊子、(以麻カ)散位、從四位上、基棟王爲

下野權守、

〔三代實錄〕 清和天皇 貞觀五年二月十日、癸卯、以從四位上行下野守、(攝關カ)基棟

王爲越中守、

〔類聚國史〕 百一 職官部六 敘位六 元慶三年十一月廿五日、庚辰、授從四位上行

右京大夫兼山城權守基棟王正四位下、

〔三代實錄〕 光孝天皇 元慶八年二月廿三日、甲寅、授正四位下行右京大夫

兼山城守基棟王從三位、(攝關カ) 任同シ、公卿補

〔三代實錄〕 光孝天皇 仁和元年正月十六日、壬申、是日以從三位行右京大

寬平七年十月一日

二七九

官歴

寬平七年十月十四日

夫基棟王爲刑部卿

十日、癸巳、興福寺維摩會、

講師延賓

〔維摩會講師研學豎義次第〕

七年乙卯、講師延賓、（寬平）年六十七、滿四十七、
法相宗、興福寺、（去年十一月廿八日宣、十二月二日請）階山

〔僧綱補任〕

〇興福寺木（寬平）同七年乙卯、講師延賓、（六年所方二方）法相宗、興福寺、（十一月）月二日請、六十七、
豎者基

十四日、丁酉、僧綱ヲ任ズ、

〔僧綱補任〕

〇興福寺木（寬平）十月十四日轉任權大僧都、法務六十九、（東寺長者補任、歷代、皇記二十六日係夕、

常全 同日轉任大僧都、八十一、

權律師幽仙 十月十四日轉正、六十、（古今和歌集目錄同）

仙忠 十月十四日任、法相宗、興福寺、已講勞、伊勢國人、麻績氏、六十、（三會定、

會定一

濟棟 同日任、法相宗、東大寺、已講勞、七十一、（三會定、

三脩 同日任、法相宗、已講勞、菅野氏、六十七、（三會定、

呪願文

天變地妖
類リニ臻ル

十七日、庚子、臨時仁王會、

〔菅家文章〕

〇興福寺木（寬平）臨時仁王會呪願文、（寬平七年十月十七日）

慶俊 同日任、淨福寺根本、七十七、（三會定、

空操 十月十七日任、已講勞、南淵氏、卅七、（三會定、

峯敦 十一月十六日任、眞言宗、東寺、（三會定、

國主皇帝 歸命頂禮 仁王般若 波羅密多 發願無邊 所以者何

太宰府奏 水鳥之妖 攝津國言 兩頭之犢 兵庫器鳴 官廳鷺集

天上變徵 禁中恠異 神宣人語 所告云々 流星夢想 所見種々

咨之卜筮 考之陰陽 或水火災 或兵賊難 或藥動患 或不祥謀

雖爲一人 雖爲萬民 雖爲近處 雖爲遠方 如是等禍 惣可怖畏

是故作念 亦復廻慮 至心懺悔 三業六根 合掌歸依 十方諸佛

寬平七年 孟冬十月 十有七日 庚子良辰 自大極殿 至朱雀門

一十六堂 百八十僧 幡蓋莊嚴 香花供養 鐘磬連響 梵唄合聲

講演百座 朝夕二時 緇素同心 見聞隨喜 心不貳心 欲滅災難

念無餘念 欲除憂患 未然降伏 轉禍爲福 在前護持 變凶爲吉

寬平七年十月十七日

寬平七年十月二十六日

二八二

復有今秋 五穀纔熟 大乘力故 願全收穫 乃至永年 風雨順時
疫癘無起 天下安穩 大鐵圍下 恒沙界中 知之不知 同昇覺道

二十六日西菅原道眞ヲ中納言ニ、藤原高藤、源希、源昇等ヲ參議ニ任ズ、

〔日本紀略〕院亭子 十月廿六日、任公卿

〔公卿補任〕四

中納言從三位菅道通、御年五十一十月廿六日任、同日從三位、左大弁、式部大輔、侍

從大使等如元、○政事要略同、尊卑分脈、辨官

日ニ作り、菅家御傳記、七月トナス、竝ニ誤ナリ

參議從三位藤高藤八、五十十月廿六日任、播磨權守如元、

從四位下源希冊六、七十十月廿六日任、右大弁、左中將、播磨守、侍從等如

元、元藏人頭、○職事補任同

從四位下源昇冊七、七十十月廿六日任、左中弁、侍從等如元、元藏人頭、○辨

官至要抄同

○藤原敏行、在原友于ヲ藏人頭ニ補シ、藤原高藤辭表ヲ上ルコト、便宜

左ニ合敘ス、

〔職事補任〕

宇多院藏人頭

左近中將從四位下藤敏行 寬平七年十月廿九日補

修理大夫從四位下在原友于 同日補、○公卿補任二十五日ニ作ル、一代要記、皇代曆同

〔菅家文章〕

九奏狀 爲藤相公請罷職狀

右臣高藤謹言、臣伏奉去年十月二十六日詔旨、以臣被任參議之列、臣須激勵ナシイ愚性、扶持病身、晨昏備員、左右從事、而衰老迫來、宿痾彌倍、計不上、則拜除之後、及三百日、量其力、則尪弱之中、過六十年、縱使皇恩、忍以無咎、如何天鑒、明而不容、思之顧之、以畏、以慎、伏願特降寵光、罷臣參議、不勝至歎、修狀抗聞、臣高藤誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

寬平八年某月某日 參議從三位行近江守臣藤原朝臣高藤

二十八日辛亥延曆寺ノ度者授戒ノ期ヲ定メシム、

〔類聚三代格〕

二年分度者事

太政官符

應四月十五日以前行授戒事

右得延曆寺牒稱、被太政官今年三月七日十一下當寺牒稱、如聞、諸寺他宗應得度

寬平七年十月二十八日

二八三

老病ニ依
リテ參議
ヲ辭ス

三月七日

臨時度者

貞觀八年

山家ノ年分ハ諸宗ニ異ル

少年ト雖モ才行兼備ナラバ試練ス

年分十八人皆先皇ノ御願ニ出ヅ神分授戒

者各就便宜勞下宣旨直預彼寺授戒論之正道理不可然大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅凡天台宗年分之外臨時度者寺家具注官符日月依山師主二月以前直申送官更待符到三月之內令授戒畢自今以後永爲恒例者謹案牒旨二月言上之制雖限臨時度者而三月授戒之期未降年分度者若以年分准臨時者授戒之期太早若令臨時隨年分者舊格之旨得宜伏檢去貞觀八年閏三月十六日格云寺家牒稱太政官去年三月十五日下治部省符稱檢舊例年分度者經二箇年臨時度者經三箇年然後令受戒者然而山家年分既異諸宗得業以後何更經年凡年々試度年々受戒謂之年分若不爾者恐有所闕伏冀依先師式當年授戒則閉山門誓護國家又雖臨時度者不必經三年縱雖少年而廿歲以上才行兼備堪爲僧者方加試練同聽登壇謹請處分者右大臣宣奉勅年分度者依請自餘一同去年三月十五日符者寺依格旨行來無闕又於臨時度者應受戒者皆依宣旨乃聽登壇而今官牒下寺制依宣旨而授戒禁遏三月以後授戒官牒之旨最有理致但三月受戒之期於當寺甚早也所以然者當寺年分總一十八皆是先皇御願也就中二人奉爲大小比叡兩神三月十七日試度之二人奉爲賀茂春日兩神

貞觀七年四月十五日以前受戒期トス

時奏闕怠ノ處分

三月廿五日試度之然則餘程無幾式月已迫凡年分學生等幼稚離鄉長大住山各勤學業更無他計纔預度例乃未戒具染縫三衣買備一鉢非是啻一二日之功授戒何畢三月之內因是欲令二人待後年者得度既畢屬神分授戒豈闕年料望請官裁當寺授戒之事准於貞觀七年三月十五日格四月十五日以前定戒日行之又臨時度者與年分度者同日令受戒並十六日結夏安居鎮護國家者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請

寬平七年十月廿八日

內豎時奏闕怠ノ罪ヲ定ム

〔西宮記〕

○前田家本

侍中事

一始聽昇殿者

參入事

頭藏人同可注

又寬平七年十月廿八日別當宣云時奏內豎有一刻之闕怠者奪先勞五日之例載在所式而不守式例重致闕怠自今以後闕一刻者即停日給令候十日闕二刻者除時奏帳闕三刻者削上殿之名闕一時者永從解却若有不奏當刻後奏刻外者奪先勞十日立爲恒例者要同今案先奏中務簡次奏宮內簡後奏本所簡

寬平七年十一月一日二日七日

二八六

十一月 癸丑朔

諸司廢務

一日、日食、

丑、癸〔日本紀略〕院亭子十一月一日、癸丑、日蝕、諸司廢務、但雨降不見、

二日、寅、甲伊豫國ノ史生一員ヲ停メ、弩師ヲ置ク、

〔類聚三代格〕五加減諸國官員并廢置事

太政官符

應停史生一員補弩師事

右得伊豫國解備、夫兵器之要、莫先於弩、而所有之弩、機牙差誤、望請廢史生一員、置弩師者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子備民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請、

兵器ハ弩ヲ先トス

寬平七年十一月二日

七日、己未皇女孚子女王ヲ内親王ト爲ス、

〔日本紀略〕院亭子十一月七日、己未、今上皇女孚子女王爲内親王、

遙授陸奥出羽按察使、大宰帥等ノ僚仗ヲ停ム、

〔類聚三代格〕五加減諸國官員并廢置事

遙授官員赴任セズ

太政官符

應停止遙授陸奥出羽按察使大宰帥等僚仗事

右中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅、遙授官員不赴國府、凡其僚仗於事無益、自今以後、宜從停止、

寬平七年十一月七日

前司ノ任國ニ留住シ、輒ク畿外ニ出ヅルヲ禁ズ、

〔類聚三代格〕十二禁制事

太政官符

應禁五位以上前司、留住本任國、并輒出畿外事

右案承和十五年五月十五日格、得勘解由使解備、太政官去承和九年八月十五日下大宰府符、大貳從四位上藤原朝臣衛奏狀、備交替務畢、未得解由之徒、寄事於格旨、留住管内、常奸農商侵漁百姓、巧爲奸利之謀、未觀填納之物、望請交替畢、早從入京者、右大臣宣奉勅依請者、今檢太政官去弘仁十三年八月廿五日符、備右大臣宣奉勅、諸國司等在任之吏、只拘解由、無意徵物、去職之人、自推難填、不恐拘留、官倉罄空、職此之由、今須交替之日、犯用欠負損失之

寬平七年十一月七日

二八七

承和九年及比十五年ノ格

弘仁十三年ノ官符

寬平七年十一月十三日

二八八

五位以上
資俸稍
寬ナリ

物、隨即徵物役身、勿更延引、物填役畢、乃聽放還者、然則欠負之輩、未得解由之間、輒不可入京、若爲處分、謹請官裁者、同宣奉勅、宜停止後符、依前格行之、但情樂留住、不填欠負、所行乖憲、爲物所愁、具狀言上、隨即科處者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅、夫五位以上、資俸稍寬、故不入無財之限、役身折庸、豈同六位、自今以後、被申不與解由狀、依承和九年格、早從入京、不得留住本國、輒出畿外、若有違犯者、所在官司、具錄言上、隨將科責、

寬平七年十一月七日

○五位以上、及ビ孫王ノ、輒ク畿内ヲ出ヅルヲ禁ズルコト、十二月三日

ノ條ニ見ユ、

十三日^丑、中納言菅原道眞ヲシテ、春宮權大夫ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕^四 中納言從三位菅道^一、^五十一月十三日兼春宮權大夫、

〔政事要略〕^八八月上^二 四日北野天神會事

右大臣從二位菅原朝臣、^略○^七七年^略○^中十一月十三日、兼春宮權大夫、

〔菅家御傳記〕^同七年七月廿三日、轉兼春宮權大夫、^{左大辨侍}從如元、

〔三十六人歌仙傳〕從四位上行右兵衛督藤原朝臣敏行、^七七年十一月兼亮、

○古今和歌
集目錄同シ、

十六日、^戌新嘗會、

〔政事要略〕^{十一}十一月二^日 中卯新嘗祭事

吏部記承平四年十一月廿日、^略○^中大臣語次陳云、昔寬平七年、有問命平敷之

故事、其後此事已絕、彼時爲中將、^{供奉}供出居勅召書司、^御御就障下召之、書司稱唯

仰云、御手奈良之方爲禮書司、^御御取朽女、^{倭琴}出障戶、則取轉置之御前、爰召堪

事王公有遊宴云々、

○新嘗會ヲ行フ月日闕ク、今恒例ニ依リテ茲ニ揭グ、

二十二日、^甲公卿慶雲ヲ賀スル論奏ヲ上ル、

〔日本紀略〕^院亭子^{十一}十一月廿二日、^甲甲戌、公卿參左近陣、上賀慶雲論奏、

○公卿上表シテ、慶雲ヲ賀スルコト、九月十一日ノ條ニ見ユ、

平敷ノ故
事
御手奈良
之
倭琴朽女

寬平七年十一月十六日 二十二日

二八九

寬平七年十二月三日

十二月癸未 盡

二九〇

三日、乙酉大納言兼民部卿源能有ヲ五畿内諸國ノ別當ニ補ス、

〔公卿補任〕四 大納言正三位源能有一、五十二月三日兼五畿内諸國別當、

五位以上及ビ孫王ノ、輒ク畿内ヲ出ヅルヲ禁ズ、

〔類聚三代格〕十二 禁制事

太政官符

應禁止五位以上及孫王、輒出畿内事

右大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅五位已上及孫王、不出畿外之制、先建憲章、從行尙矣、今如聞、畿内百姓愁嘆無極、公事私業、或失其勤、試遣使者略問部内、所申雖多、其尤甚者、權貴雜居、動爲煩苦、宜禁止件輩輒出、稍慰民意、唯高年送老之徒、痼病就醫之地、各量穩便、可有處分者、仍須七十以上、并宿病尙弱、或遂療治之便、或立終焉之謀者、申牒國司、依實修解、被報符後、聽任居住、國司若不據實、處之科責、曾不寬宥、但山城國內、東至會坂關、南至山崎與渡泉河等北涯、西至攝津丹波等國堺、北至大兄山南面、不在制限、大和國春日社二月十一月祭、與福寺三國忌齋會、

權貴雜居
シ民ノ煩
ヲ爲ス
老人病者
ヲ除ク

氏神祭ニ
ハ氏人ノ
參向ヲ許
ス

同寺十月維摩會、藥師寺三月最勝會等、應參氏人及散位諸司五位以上、其人有限、臨期直參、又諸人氏神、多在畿内、每年二月、四月、十一月、何廢先祖之常祀、若有申請者、直下官宣、如此之類、往還有程、不得任意留連、經日遊蕩、其違越者、錄名言上、處違勅罪、

寬平七年十二月三日

○五位以上ノ前司、輒ク畿外ニ出ヅルヲ禁ズルコト、十一月七日ノ條

ニ見ユ、

九日、辛卯越中國ノ史生一員ヲ停メ、弩師ヲ置ク、

〔類聚三代格〕五 加減諸國官員并廢置事

太政官符

應省史生一員置弩師事

右得越中國解稱、此國有弩無師、不習機發、若有不虞、卒爾何爲、望請省史生一員、置弩師者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寬平七年十二月九日

寬平七年十二月九日

二九一

十六日、戊戌從三位藤原榮子薨ズ、

〔日本紀略〕院亭子 十二月十六日、戊戌從三位藤原榮子薨、可尋

八年十一月七日、癸未、從三位藤原朝臣榮子薨、之

○本書榮子ノ薨日兩説アレド、他ニ徵スベキモノナキヲ以テ、姑ク此

ニ收ム、

二十二日、甲辰檢非違使ノ職掌及ビ誣告反坐ノ制ヲ定ム、

〔政事要略〕八十四 雜事 二十四

太政官去寬平七年十二月廿二日、給使等符簡、檢非違使別當中納言兼行左衛門督源朝臣光奏狀、檢非違使式云、凡使之所掌、准彈正事、并依臨時宣旨行之、又條云、諸司諸衛及諸家官人以下、雜色以上等、若有犯過者、禁其身、經本司、又條云、盜人不論輕重、停移刑部、別當直著鈇配、收所令駭使、收女官當爲贖、各依本法、自餘犯、收普從常律、臺式云、臺聞官司枉判及閭里犯法者、追所由人、勘問其由、得實應奏者、隨即奏聞、公式令奏彈式云、親王及五位以上、有犯應須糾劾、而未審實者、竝據狀勘問、不須推考、事大者奏彈、非應奏及六位以下、竝糾移所司推判、義解云、凡彈正、是糾劾之職、非科斷之官、即不限有位無位、皆不須推考

八年薨ト
スル説ト

檢非違使
式

彈正臺式

奏彈式

檢非違使
ハ糾彈及
ビ追禁推
拷ヲ掌ル

私怨ヲ以
テ誣告ス

使廳招誣
ノ府トナ
ル

誣告反坐
ノ制

者、按此等文、使等文、新カ使等所掌、非啻准彈正之事、兼行追禁推拷之法、然則至准彈正、須自見及風聞、即糾彈其犯、但不可禁拷反坐、於從常律、當禁拷反坐、不可習臺事、因斯言之、所掌相兼、執行亦多、是則爲早糺人犯、忽決其罪也、而今或使等論云、准説カ既云彈正事者、爰知不可反坐、誣告之人、比年所行、亦復如之者、方今嫌惡之輩、爲報私怨、新カ僞注他犯、告使所、隨即追禁犯人、推鞠之間、久イ又苦禁獄、遂不承伏之日、僅反問告人、于時所告之事、是既虛也、須依法反坐、而偏稱准彈正事、直從放免、無更反坐、因茲檢非違使之職、新カ還正事爲招誣之府、非據行法令、何以絕此亂計、檢獄令云、告言人罪、非謀叛以上、皆令三審、若事有切害者、不在此例、其前人合禁、告人亦禁、辨定放之、注云、切害謂殺人、賊盜、逃亡、若強姦良人、及有急速之類、鬪訟律云、誣告人各反坐、注云、反坐致罪、准前人入罪之法、又條云、被殺被盜、及被水火損敗者、雖虛皆不反坐、斷獄律云、拷囚限滿而不首、新カ反拷告人、其被殺被盜家口親屬、告者不反拷、注云、被水火損敗者亦同者、按此等文、告謀叛以上及切害者、不令更三審、即禁告人、前人推勘之日、若誣告者、隨即科反坐、除此以外、必令三審、若誣告者、亦同處反坐、但被殺被盜之家口親屬、非故誣告、不可反坐、今使等多糾切害之事、非有宣旨、無理訴訟之輩、仍告切害之日、不令三

寬平七年十二月二十九日

二九四

審即以禁推前人、若有誣告者、須從反坐、而專稱准臺之詞、直不坐誣告之人、(依)檢法意理不可然、望請處分、自今以後、若有誣告者、將處反坐、然則妄愁自絕、使務亦正、但先禁告人者、恐告實之輩有所憚、亦望若有告切害者、依舊例先追前人、後禁告人、又依臨時宣旨、追勘之中、若有可令三審之色、不更三審、速以禁推、若有誣告、隨即反坐、其不可反坐之類、雖有對問、不更禁告人者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅民部卿陸奧出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依奏者、○上下略、延長七年九月十九日官符

二十九日、辛權律師聖寶ヲ東寺長者ニ補ス、

〔東寺長者補任〕一 權律師聖寶權法務 十二月廿九日補二長者、六十但

任日不詳、或宇多、醍醐二代長者云々、

〔元亨釋書〕二十四 寬平皇帝 實治表五 七年冬十有二月、僧都益信、律師聖寶管法

務、

二長者聖寶

是歲、宇佐大少宮司大神宇佐二氏ノ門地ヲ定ム、

〔八幡宇佐宮御託宣集〕三 大尾山社部下 宇多五十九代天皇七年寬平七年乙卯、神託

二年、

應大少宮司大神宇佐二氏正胤銓擬事

右太政官寶龜四年大神託宣、并同八年七月廿九日符、(大中臣海部)右大臣宣奉勅、在豐

前國宇佐郡八幡比咩神社預大神朝臣比岐氏、永爲社祝大宮司禰宜門地、以

宇佐公池守氏、宜爲少宮司副門地、雖同姓之大神宇佐、以宮民氏不可混合任

神社預令爲上下之亂、又太政官去四月廿三日符、并貞觀十年九月十四日下

諸道符、倘諸國所行、專忘格旨、偏稱氏人并神戶、擬補課丁、論之政途、事乖公平、

被大納言正三位藤原朝臣氏宗宣、稱是氏人并神戶、先八位已上、六十已上、堪

事者、無其人、乃擬年少、每社勘定、其氏言上、永備計會、無致違濫者、而雖經數年

未勘申、因茲擬補解文、頻從返却、(具世)右大臣宣奉勅、宜更仰早令勘申、若重延怠、處

怠事、留科、都不寬宥、亂勿令致濫望、若雖有競望輩、以大神正胤擬補言上者、

宜承知、依宣施行、

神護寺年分ノ學生ハ、本寺ニ於テ試度セシム

寬平七年是歲

二九五

寶龜ノ制

大神朝臣

比岐氏

宇佐公池

守氏

四月廿三

日及貞

觀十年ノ

官符

寬平七年是歲

〔東寶記〕

八 眞言宗僧寶下年度者

二月以前
ニ試度ス

去寬平七年、新下格制、神護寺年分三人、於彼寺二月以前試度之、○上略、寬平九年六月
日二十六官符

○此後、東寺ニ於テ、舊ノ如ク、眞言宗年分學生六人ヲ課試セシムルコト、
九年六月二十六日ノ條ニ見ユ、

年末雜載

佛寺、

〔正倉院文書〕

一 東南院文書 櫃第六卷

四月一日到來、

太政官牒 東大寺

東大寺知
事補任

傳燈法師位智春年冊九、

右知事僧益良之替、

傳燈法師位良基年冊八、

右知事僧朝宗之替、

傳燈法師位基鏡年冊五、

右知事僧性可之替、

傳燈滿位僧中寬年冊九、

右知事僧正能之替、

已上並專寺、

以前得彼寺牒、併等法師依例請補如件者、大納言正三位兼行左近衛大將

寬平七年雜載

皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣依請者寺宜承知依宣補之牒到准狀故牒

寬平七年三月十九日 遣唐錄事從八位下兼守右少史阿刀連（自是）春正（自是）牒

遣唐副使從五位上兼守右少辨行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣（自是）○本書太政官印二十顆ヲ踏ス

七月十五日到來

太政官牒 東大寺

同造寺專當

應令重任造寺專當傳燈大法師位增宥事

右得彼寺別當傳燈大師位濟棟辭狀俾件增宥天性格勤執事必果所濟公事苟有厥數因屢舉申功績未賜褒賞望請更賜重任將勵人情謹請官裁者大納言正三位兼行右近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣依請者寺宜承知依宣行之牒到准狀故牒

寬平七年六月廿八日 左大史正六位上善道朝臣（自是）宗道（自是）牒

遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣（自是）○本書太政官印ヲ踏ス顆數分明ナラズ

〔石山寺文書〕○二 近江

大納言正三位兼行右近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣依請者寺宜承知依宣補之牒到准狀故牒
寬平七年三月十九日遣唐錄事從八位下兼守右少史阿刀連春正牒
遣唐副使從五位上兼守右少辨行式部少輔文章博士讚岐介紀朝臣

原寸 一尺二寸五分

寶日引案

太政官牒

傳燈法師位良基

傳燈法師位良基

傳燈法師位良基

傳燈法師位良基

傳燈法師位良基

傳燈法師位良基

傳燈法師位良基

正倉院御物

以昔得此寺牒傳件等... 大御方三位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽
按察使源朝臣張有宣依請守直承知依宣稱之
歸到唯缺故歸

寬平七年三月...

遺事...

太政官蘇東寺

傳燈法師位智春 年卅九

右知事僧益良之替

傳燈法師位良基 年卅八

右知事僧朝宗之替

傳燈法師位基鏡 年卅五

右知事僧性可之替

傳燈滿位僧中寬 年卅九

右知事僧正能之替

已上蘇東寺

以前得彼寺牒係伴等法師依例請補以伴者
大納言正三位兼行左近衛大将皇太子傅陸奥出羽
按察使源朝臣能有宣依請者守直承知依宣補之
除到准狀故除

寬平七年三月五日遣蘇東寺僧正能春

遣唐僧徒在唐守其齋戒其齋戒者皆請改元朝臣

宇白利家

東寺傳法
灌頂

太政官牒 東寺

應以傳燈法師位觀賢傳授阿闍梨位灌頂事

右權律師法橋上人位聖寶奏狀稱、件觀賢生年臈次、雖未有高積、顯教密宗、彌勒練學、望請官裁、將授件職位者、遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道真宣奉勅、見之師主、所請非輕、用之公庭、其志可勸、滿寺先達、殊加勸戒、受法之後、遂成重器者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

寬平七年十二月十三日 外從五位下行右大史兼春宮大屬壬生元喜林彌

從五位上左小辨源朝臣○東寺傳法

〔血脈類集記〕

灌頂師資相承血脈 僧正聖寶小四代源仁弟子

付法十人○中

觀賢 權僧正般若寺○中 寬平七年卯乙十二月十三日、乙未鬼、木、給官符

於東寺灌頂堂 即日傳受之、年三四、師位法務權律師、年六十四、○真言傳法

〔密宗血脈鈔〕

中

聖寶

觀賢權僧正號般若寺僧正

或記云、○中 寬平七年卯乙十二月十三日、乙未鬼、宿、木、可授灌頂之由給官符

寬平七年雜載

聖寶具支
灌頂ヲ無
空ニ授ク

後院使ニ
上日ヲ給
ス

源能有五
十ノ賀算

屏風ノ詩

寬平七年雜載

三〇〇

聖寶即日於東寺灌頂道場傳授(聖寶) 師主年六十四位權法務律師、

〔高野春秋〕三 冬十二月十三日(聖寶) 師主年六十四位權法務律師、 二高者(聖寶) 受者年四十三凡僧、 乙未(聖寶) 鬼宿木、無空師受具支灌頂於聖寶師(聖寶) 師

者元慶四年受
法真然師之故

公家

〔類聚符宣抄〕十使上日

史生石上邦雄

被大納言源卿宣云、件人遣後院使、宜給上日者、

寬平七年九月七日

少外記多治宗範奉

諸家

〔菅家文章〕五(寬平七年) (當時) 右金吾源亞將與余有師友之義、夜過直廬相談言曰、嚴父

大納言、去年五十、心往事留、過年無賀、此春已修功德、明日聊設小宴、座施屏

風、寫諸靈壽、本文者紀侍郎之所抄出、新樣者(長谷雄) 巨大夫之所畫圖、書先屬藤右

軍、詩則汝之任也、談畢歸去、欲罷不能、予向燈握筆、且挑且草、五更欲盡、五首

纔成、右軍即書之、以備遊宴事、(中)

廬山異花詩

〔聖寶〕師主年六十四位權法務律師、

二高者〔聖寶〕受者年四十三凡僧、

乙未〔聖寶〕鬼宿木、無空師受具支灌頂於聖寶師〔聖寶〕師

者元慶四年受
法真然師之故

〔類聚符宣抄〕十使上日

史生石上邦雄

被大納言源卿宣云、件人遣後院使、宜給上日者、

寬平七年九月七日

少外記多治宗範奉

〔菅家文章〕五(寬平七年) (當時) 右金吾源亞將與余有師友之義、夜過直廬相談言曰、嚴父

大納言、去年五十、心往事留、過年無賀、此春已修功德、明日聊設小宴、座施屏

風、寫諸靈壽、本文者紀侍郎之所抄出、新樣者(長谷雄) 巨大夫之所畫圖、書先屬藤右

軍、詩則汝之任也、談畢歸去、欲罷不能、予向燈握筆、且挑且草、五更欲盡、五首

纔成、右軍即書之、以備遊宴事、(中)

廬山異花詩

何處異花觸目新、廬山獨立採松人、煙霞不記誰家種、水石相逢此地神、吹送馨香風破鼻、養來筋力氣關身、一淪筭計前程事、珍重童顏二百春、

題吳山白水詩(略)注

吳山神水石間來、看是孤雲澗口開、欲見多年懸藥處、空留一服去蓬萊、

劉阮遇溪邊二女詩(略)注

天台山道々何煩、藤葛因緣得自存、青水溪邊唯素意、綺羅帳裏幾黃昏、半年長聽三春鳥、歸路獨逢七世孫、不放神仙離骨錄、前途脫屣舊家門、

徐公醉臥詩(略)注

自到東陽道不違、徐公一飲二年歸、赤松計會新來客、玄草纏綿舊著衣、壺酒淺深初得意、醉鄉遠近惣忘機、無情湖水誰遺迹、憶昔長山臥翠微、

吳生過老公詩(略)注

山頭不倦立煙嵐、幸甚神人許接談、念々逢時丹桂一、行々見處石梁三、生涯養性年華美、逆旅知恩曉露甘、傾蓋如今爲舊識、誰辭竟夕玉膏醞、

〔尊卑分脈〕(藤氏真作孫)

村田

寬平七年雜載

三〇一

藤原達良
鷹卒ス

寬平七年雜識

〔藏〕
達良磨 從五下、遠江守、寬平七五十八卒、
母（縣大室以綱女）富士丸同、
房雄 從五下、紀伊、肥後等守、左近將監、刑部大輔、
母紀宅主女、

三〇二

寬平八年丙辰

正月大 癸丑 朔 盡

一日、癸丑朝賀、元日節會、

〔日本紀略〕亭子 正月一日、癸丑、天皇於大極殿受朝賀儀、訖廻御紫宸殿賜

宴、

〔西宮記〕朝拜上 延長七年正月一日御記云、中檢前例、寬平八年、正五位

下藤善直（真イ）爲四位代、略 中左大臣令定申云、略 中寬平八年朝拜時、四位侍從忽

闕、以奏瑞人補侍從、

三日、乙卯、卯杖奏、皇太子拜觀アラセラル、

〔日本紀略〕亭子 正月三日、乙卯、皇太子拜觀御杖奏如例、

〔撰集秘記〕日獻御杖事 寬平八年、近衛先列陣後獻東宮御杖、今依此例行

之、

七日、己未、己未、敍位、節會賜祿ノ制ヲ定ム、

〔西宮記〕正月 中 七日 節會 寬平八年正月七日宣旨、雖免雜役預節會人、不預謝座

謝酒之禮者不給當日祿、立爲恒例、

寬平八年正月一日 三日 七日

三〇三

大極殿出
御紫宸殿出
御

〔公卿補任〕^四

參議正四位上源直^{七、六}左衛門督備中權守正月七從三位

從四位上源貞恒^{一、四}大藏卿正七正四下

從四位下源湛^{二、五}正月七日從四位上

〔公卿補任〕

^四寛平九年 參議正四位下十世王^{六、十}同八正七正四位下

〔公卿補任〕

^四延喜九年 參議從四位下藤定方^{卅、五}同八正七從五下^{御給}

〔公卿補任〕

^四延喜十七年 參議從四位上三善清行^{七、十}同八正七從五上

〔外記補任〕

一 大外記外從五位下和氣宗世 正七敍

〔古今和歌集目錄〕

^{庶人}良峯秀崇^八年正月七日敍從五位下

〔古今和歌集目錄〕

^{庶女}治子朝臣 寛平八年正月八日敍從四位上

〔三十六人歌仙傳〕

從四位上行右兵衛督藤原朝臣敏行 八年正月敍從四位下

位下

○藤原敏行ノ敍位便宜合敍シ良峯秀岳ノ事蹟左ニ附收ス

〔古今和歌集目錄〕

^{庶人}良峯秀崇一首別

元慶三年十月十日補文章生^{該永詩}七年正月十一日任但馬掾八年六月八

日任治部少丞仁和四年二月十日任兵部少丞寛平三年三月九日轉大丞八年正月七日敍從五位下同月廿六日任伯耆守

〔古今和歌集〕

^{離別歌}友の吾妻へまかりける時によめる

良峯ひてをか

白雲のこなたかなたにたち別れ心をぬさとくたく旅かな

八日^{庚申}後七日御修法

〔東寺長者補任〕^一 權律師聖寶 權法務後七日法

十三日^{乙丑}地震

〔日本紀略〕^{院亭子} 正月十三日乙丑巳時地震

十五日^{丁卯}除目

〔公卿補任〕^四寛平九年 參議正四位下十世王^{六、十}同八正十二日兼越前權

守

〔外記補任〕

^{兼治部少輔例}大外記從五位下大藏善行 正月十五日兼治部少輔

〔康富記〕

文安四年十二月十三日

大外記敍留例

大外記大藏善行

寬平八年正月十五日任治部少輔、敘留以後九ヶ年、○權大外記中原康富注進

十七日、巳射禮、

〔西宮記〕

正月下射禮

寬平八年正月十七日、無射遺皆射了、

二十一日、酉、癸、內宴、

〔日本紀略〕

亭子院

正月廿一日、癸酉、內宴、春先梅柳知爲題、

〔菅家文章〕

詩六

早春內宴侍清涼殿同賦春先梅柳知、應製、自此以下十一首、中納言之作

官梅早綻柳先垂、趁遇春情問便知、不見年光依樹報、非聞月令到園施、素心易

表風前藥、青眼難眠雨後枝、天與芳菲爲第一、艷陽多少莫空移、

〔北山抄〕

三拾遺雜抄上

太子祿絹定百廿疋、又略加又綿十屯、略○寬平八年

清行ヲ召ス

召備中介清行、

女御正四位下藤原佳美子、同從四位下橘義子等二、各位一階ヲ進ム、

〔一代要記〕

光孝天皇後宮

女御正四位下藤原佳美子 寬平八年正月廿一日敘

從三位、

〔一代要記〕

宇多天皇後宮

女御從四位上橘義子 八年正月廿一日從四位上、

〔公卿補任〕

昌泰二年

參議從四位上藤定國

同八正廿一正五下、

二十六日、戌、除目、

〔日本紀略〕

亭子院

正月廿三日、除目、

〔公卿補任〕

昌泰二年

參議從四位上藤定國

同八正廿六日左少將、兼官如元

〔公卿補任〕

昌泰三年

參議從四位上在原友于 同八正廿六兼侍從、

從四位下藤忠平、廿一、同八正廿六侍從、

〔公卿補任〕

延喜八年

參議正四位下藤仲平、卅四、同八正廿六右中將、

〔公卿補任〕

延喜十年

參議從四位下藤清貫、四十、同八正廿六兵部少丞、

〔公卿補任〕

延喜十一年

參議從四位上源當時、四十、同八正廿六權右中弁、

〔公卿補任〕

延喜十三年

參議從四位下橘澄清、五十、同八正廿一藏人、同廿

六日兵部少丞、

〔公卿補任〕

延喜十七年

參議從四位上良峯衆樹、五十、同八正廿六兼播磨

少掾、

〔公卿補任〕

延長五年

參議從四位上橘公賴、五十、寬平八正廿二藏人、廿六

寛平八年正月二十六日

日播磨少掾

〔外記補任〕

大外記外從五位下和氣宗世 正廿六日丹波介

多治宗範 正月廿六日任

自内記任外記例 少外記三統理平 正月廿六日任 元少内記備中權掾四十八策

〔中古歌仙三十六人傳〕 在原棟梁 八年正月廿六日任左衛門佐

〔外記補任〕 延喜六年 大外記外從五位下阿刀春正 八年正月左少史

〔三十六人歌仙傳〕 正四位下行右京大夫源朝臣宗子 八年正月任丹波權守

○阿刀春正等任官ノコト便宜合敘ス

門文ノ帝
義勞ノ料
綱丁ノ奸

閏正月癸未 朔

一日、癸未諸國ヲシテ、門文ヲ進メシメ、之ニ依リテ、調庸并ニ例進ノ雜官物

ヲ檢納セシム、

〔類聚三代格〕八調庸事

太政官符

應令先進門文、檢納調庸并例進雜官物事

右得讚岐國解僦檢案内、調庸并例進雜物、依倉庫令、國明注載進物色數、附綱丁等各々送所司、此號門文、須任門文全進納、而頃年綱丁等、不出門文私作自解、折留物數、進納所司、々々不知其奸、隨進偏放日收、其所折留皆充私用、或自望官職、充贖勞之料、或偷買雜物、求貿易之利、綱丁之奸、觸類多端、望請仰檢納所司、將絕綱丁奸、但有稱非常漂失之類、令進公驗、隨狀被定者、遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道真宣、依請諸國准此、

寛平八年閏正月一日

六日、戊子北野、雲林院、船岡ニ行幸アラセラレ、子日遊ヲ行ハセラル、

〔日本紀略〕院亭子 閏正月六日、戊子天皇爲遊覽幸北野、午刻先御各流幸雲

寛平八年閏正月一日 六日

皇太子以下供奉ス
勸賞

寬平八年閏正月六日

三一〇

林院^(致親王)皇太子以下王卿陪云々、以院主大法師由性爲權律師、未時更幸船岡、放鷹犬追鳥獸、

〔扶桑略記〕

宇多天皇

閏正月六日、有子日宴、行幸北野、雲林院其扈從者、皇

太子及一品式部卿本康親王、上野太守四品貞純親王、四品貞數親王、大納言

正三位源朝臣能有、中納言從三位藤原時平、中納言源光、中納言菅原道一、參

議從三位藤高藤從三位藤原有實、參議源真、參議正四位下源貞恒、參議源希

殿上六位以上、皆著麴塵衣、雲林院之院主由性法師任權律師、^(遍昭僧正)弘延

素性兩法師、施度者各二人云々、已上、

〔菅家文章〕^(六) 扈從雲林院、不勝感歎、聊敘所觀、^(并序)

雲林院者、昔之離宮、今爲佛地、聖主玄覽之次、不忍過門、成功德也、侍臣五六

輩、翫風流而隨喜、院主一兩僧、掃苔藓以恭敬、供奉無物、唯花色與鳥聲、拜謝

有誠、唯至心與稽首而已、予亦嘗聞于故老曰、上陽子日、野遊厭老、其事如何、

其義如何、倚松樹以摩腰、習風霜之難犯也、和菜羹而啜口、期氣味之克調也、

况年之閏月、一歲餘分之春、月之六日、百官休假之景、今日之事、今日之爲、豈

非爲無爲事無事乎、予雖愚拙、久習家風、廼與有時、走筆無地、聊舉一端、文不

道真ノ詩

道真詩ヲ
紀長谷雄
ニ送ル

加點云爾、謹序、

明王暗與佛相知、垂跡仙遊且布施、松樹老來成繖蓋、莓苔晴後變瑠璃、暖光如

淺慈雲影、春意甚深定水涯、郊野行々皆斗藪、和風好向客塵吹、^(長谷雄)

行幸後朝憶雲林院勝趣、戲呈吏部紀侍郎、
從來勝境屬風情、專夜相思夢不成、把酒空論深淺戶、看花只倦往還程、青苔地

〔三十六人歌仙傳〕

素性法師 寬平八年閏正月、行幸雲林院日、大納言源朝

臣奉勅、宣命素性大法師、爲權律師、弘延、素性兩法師、給度者各一人、共起稽首、

舉聲歡喜、^(古今和歌集目錄同)

〔僧綱補任〕

興福寺本

權律師由性 閏正月六日任、天台宗、延曆寺、遍照

僧正在俗之時子也、^(宋書)五十五、雲林院別當、伴院行幸有賞、良峯氏、^(釋家初例抄同)

十七日、^(宋書)左右看督近衛等ヲシテ、旬毎ニ施藥院、并ニ東西悲田ノ病者孤

子ノ安否ヲ巡檢セシム、

〔類聚三代格〕

諸使并公文事

太政官符

寬平八年閏正月十七日

三一

寬平八年閏正月二十五日

三一三

應令左右看督近衛等、每旬巡檢施藥院、并東西悲田病者孤子多少有無安否等事

收養ノ病者孤兒多シ預難使乳母養母
預以下懈息多シ

右施藥院奏狀、稱院并東西悲田三所、收養病者孤子其數不少、病者差充預及雜使等、令勞治、孤子亦差充預及雜使、乳母養母等、令視養院司常加巡檢、然預以下人等、未必其人、屢加勸戒、猶多懈怠、恐徒費衣食、存活者寡、望請令看督近衛等、每旬分番、巡檢三所、察其多少、問其安否、預以下之人、若有闕怠、重令勸當、其巡檢之日、錄病者孤子數、付院司、令知之、亦其寒温不適、衣食無給者、令責院司、謹請處分者、右大臣宣奉勅、依請、事須看督近衛等、巡檢京中之日、有見路邊病人、孤子者、隨便令取送院、并東西悲田、又大藏宮內兩省所充綿、及古弊、幄疊等、施藥院司請納之後、與彼院司共相知、頒給三所病者孤子等、莫致疎略、

寬平八年閏正月十七日
略同政事要

二十五日、朱雀院ニ幸シテ、工事ヲ覽給フ、

〔日本紀略〕

院亭子

閏正月廿五日、丁未、天皇幸朱雀院、覽諸工造作、

○此後、朱雀院ニ移御アラセラル、コト、昌泰元年二月十七日ノ條ニ見ユ、

朱雀院ノ工事

大藏宮內兩省ヨリ綿及ビ古弊、幄疊等ヲ給ス

二十六日、神泉苑屬星祭、

〔日本紀略〕

院亭子

閏正月廿六日、戊申、於神泉院行屬星祭、供祭物之間、牝鹿

穢ニ依リテ中止

入池水溺死、依穢止之、

是月、齋院ニ幸シ給フ、

〔中右記〕

長承元年十二月五日、臨深更頭辨書狀云、可有御幸齋院、准據之例、

可量申者、□返事云、有御幸例、不慥覺問、難申左右、但寬平八年閏正月、有院御幸齋院之由、見舊記、齋院ハ君子內親王、今上第三女、母女御橘義子也、略下

寬平八年閏正月二十六日是月

三一三

二月 大王子 盡

四日、乙、地震、

〔日本紀略〕院 亭子 二月四日、乙卯、地大震、有聲如雷、

十三日、子、甲齊世親王、大學寮ニ於テ、御讀書始ヲ行ハセラル、

〔日本紀略〕院 亭子 二月十三日、甲子、齊世親王於大學寮始讀書即召得業生

以下生徒三百許人、於彼賜饗膳、朱紫之輩、會聚如雲、文章博士紀朝臣長谷雄

講文選、

十月十九日、文章博士紀長谷雄講文選了、

〔菅家文草〕九 奏狀

式部少輔紀長谷雄者、北堂文選講說未畢、八 上下略、寬平八年七月五日、

請令議者及覆

檢稅使可否狀、

〔菅家文草〕六 詩六

(寬平八年)北堂文選竟宴各詠史句、得垂月弄潺湲、仁壽年中、文選竟宴、先君詠句、得招

隱俱在山、古調多敘所懷、予今習先君體、寄詩言志、來者語之、

文選三十卷、古詩一五言、々々、何秀句、垂月弄潺湲、半百行年老、尙書庶務繁、雖

思樂風月、不放到丘園、非唯無所樂、悠々有所煩、水空觸眼逝、月暗過頭奔、惣爲

貪名利、亦依憂子孫、此時玩斯集、如避世喧々、

聲雷ノ如

得業生等

ニ饗ヲ賜

長谷雄文

選ヲ講ズ

竟宴

十五日、丙、除目、

〔公卿補任〕四

參議從四位下源湛、五、二、二月十五日兼彈正大弼、

同昇、卅八、左中弁侍從、二月十五日止左中弁、

〔公卿補任〕延四

參議從四位下藤定方、卅五、同八二月十五尾張權守、

〔公卿補任〕延四

參議從四位上源當時、四、十、同八二月十五兼木工

頭、〇辨宜至要抄同シ、

〔外記補任〕一

大外記多治有友、二月廿三日任、

少外記嶋田房年、二月廿六日任、元勘解由判官進士、

〔二中歷〕二 察頭 諸司 歷 大藏 峰雄 計 寬平 八 二、

○大外記多治有友以下、補任、便宜合敘ス、

二十三日、甲、神泉苑ニ行幸アラセラレ、文人ヲシテ詩ヲ賦セシメ給フ、

〔日本紀略〕院 亭子

二月廿三日、甲戌、天皇幸神泉苑、召文人賦詩、其題花間理

管絃、又召學生奉試賦同題、及第者三人也、

詩題 學生ヲ試